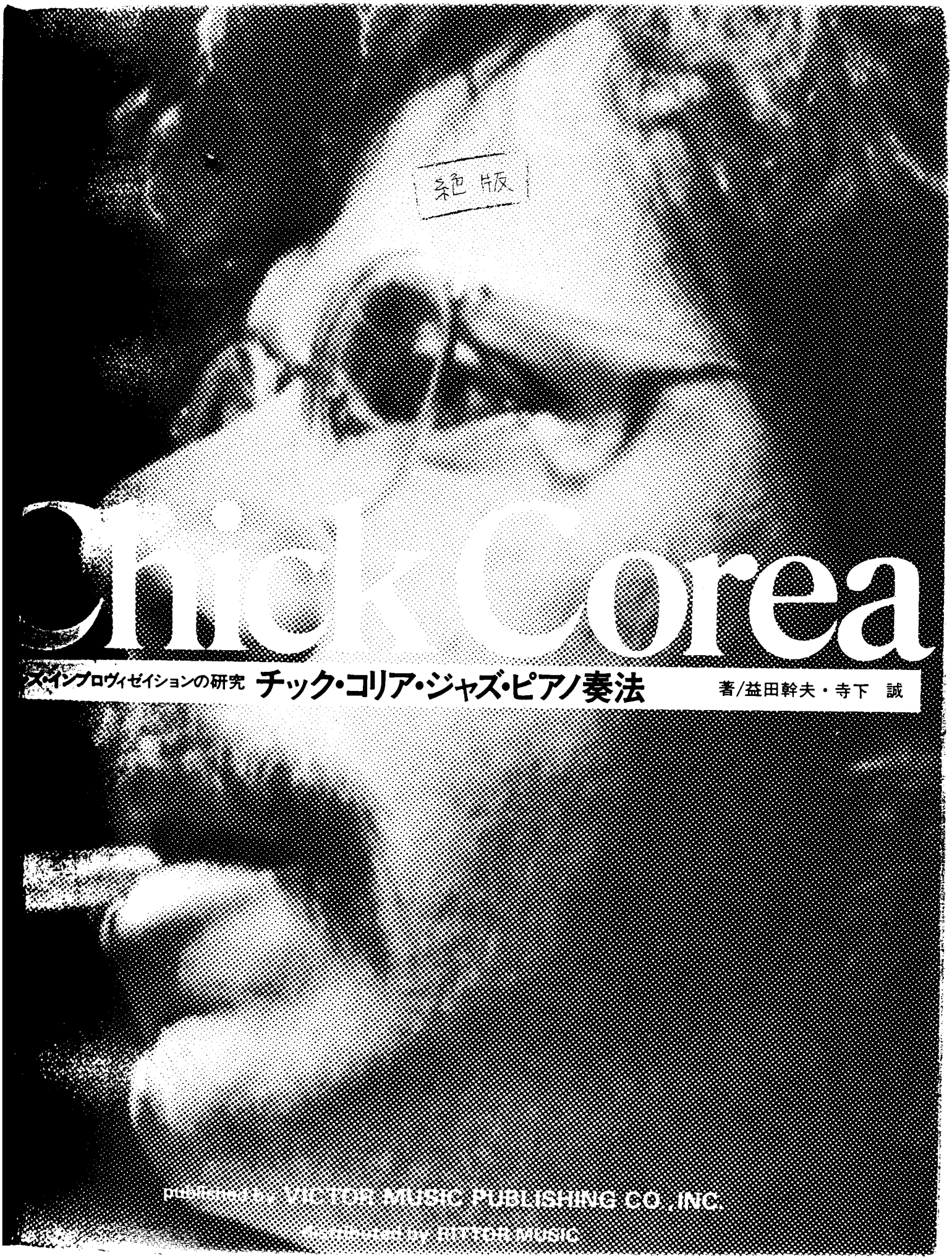
Makion


絶版
Chick Corea
ズ・インプロヴィゼイションの研究
チック・コリア・ジャズ・ピアノ奏法
著/益田幹夫・寺下　誠
PUBLISHED BY VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.
DISTRIBUTED BY VICTOR MUSIC

Makion

CHICK COREA

チック・コリア ／ジャズ・ピアノ奏法

益田 幹夫／寺下 誠 編

ジャズ・インプロヴィゼイションの研究

Makion

前書き

チック・コリアは、60年代、70年代を通して、主流派の第一線のミュージシャンとして活躍しており、最近では、ハービー・ハンコックと共に人気を二分し、ほかの追従を許さぬ存在となっている。彼も、デビュー当時のブルー・ミッチェルとの共演盤などを聴くとキラリと光りつつもひとりのハード・バッパーであったようである。

ハービー・ハンコックの天才型に比べて、努力型という印象をまとうのも、想像させる絶え間ない練習量や、ほかのピアニストらの影響などがそのプレイから聴きとれるからである。しかしそのスタイルが顕著になってきてからというものは、その努力がにじいたというか、その彼の偉大な音楽は、単にジャズというジャンルを超えて多くの人びとに愛されている。

本書は、チック・コリアのレコードの中から何曲かを選び出し、全コピーしたもので、アマチュアからプロまでの音楽家の手引きになれば幸いです。

なお、本書発刊に際し、沢井原児氏ほか関係者の方がたのかずかずならぬ御協力を感謝します。

益田

黒人音楽であったジャズが、今や全世界共通の音楽にまで成長してきている。その動きの中で、驚くべき情熱と意欲を持って活動している音楽家のひとりがチック・コリアである。黒人音楽としてのジャズが他民族に広く親しまれるようになり、また、他民族から彼のような優れた音楽家が出現するということは、非常に驚異である。

本書は、彼の初期から現在に到るまでの作品の中からいくつかを選曲し、採譜、解説をしてある。演奏時に何が起ってどうなったのかは、その場に居合わせた演奏者に説明してもらうのが最善の方法ではあるが、それは実に困難である。故に、あくまでも私自身の観点から説明をさせてもらうことにした。

チック・コリアの音楽を吸収したい人、ジャズ・ピアノを勉強したい人に、何らかの形で参考になれば幸いである。とにかく、難しい理論や形式にとらわれることなく、より自由に、より楽しく演奏することが、最高の音楽への近道であることを忘れず探究してもらいたい。

寺下　誠

CHICK COREA

採譜：林　知行／藤森潤一

Makion

CONTENTS

チック・コリア／奏法と演奏スタイル……4
チック・コリア／インタビュー……6

●記譜法……10
●Available Note Scale……13

Now He Sings, Now He Sobs ナウ・ヒー・シングス, ナウ・ヒー・ソブス
Improvisation Advice……16
Improvisation……18

Noon Song／ヌーン・ソング
Improvisation Advice……29
Improvisation……30

Ballad For Anna／バラード・フォア・アンナ
Improvisation Advice……37
Improvisation……38

Sometime Ago／サムタイム・アゴー
Improvisation Advice……41
Improvisation……42

La Fiesta／ラ・フィエスタ
Chord Progression Analyze……59
Improvisation Advice……60
Improvisation……61

Captain Marvel／キャプテン・マーヴェル
Chord Progression Analyze……77
Improvisation Advice……78
Improvisation……79

Spain／スペイン
Improvisation Advice……87
Improvisation……88

No Mystery／ノー・ミステリー
Improvisation Advice……97
Improvisation……98

Soft And Gentle／ソフト・アンド・ジェントル
Improvisation Advice……107
Improvisation……108

The Mad Hatter Rhapsody／ザ・マッド・ハッター・ラプソディー
Chord Progression Analyze……115
Improvisation Advice……116
Improvisation……117

● Discography……124

チック・コリア／奏法と演奏スタイル

チック・コリアの奏法

チックの奏法は、ニューヨーク、マンハッタンに住むある著名なクラシック・ピアニストについて習い、確立したようである。

他のジャズ・ピアニストに見られるリスト・ストロークではなく、手首を使わず指を鍵盤から離さないようにして弾く奏法である。リッチー・バイラーク、ジョアン・ブラッキーン、パトリス・ラッセンなど多くのジャズ・メンがこのピアニストに教授されている。この弾き方は複雑なメロディーを弾くのに非常に便利で、音の跳躍をつけてリズミックなメロディーを作るのではなく、近接音へと移りながら、きめの細かいフレージングを作っていくのである。あの早口でしゃべっているようなニュアンスは、こういう弾き方でなければ出せない。ペダリングについても非常に速く細かい動かし方をする。また、ピアノ、フェンダー・ピアノ、シンセサイザーなどにみられる音色のコントロールが非常にセンシティブである。

ハーモニー・スタイル

トライアッド、完全4度からなる和音、増4度を含む4度和音、マイナー・セブンス和音、メジャー・セブンス和音、ディミニッシュ和音、完全5度からなる和音、10度の和音、2音からなる2オクターブ和音、3度の和音、6度の和音、1オクターブの和音など、これらを彼は使い分けている。このほかにも、スケールを暗示させるためにスケール音を付加させたりしている。これら各々の和音はそれぞれ特色のあるイメージを持っていて、曲のイメージによってうまく使い分けられている。また、これらをうまく組み合わせて、ポリ・ハーモニー的な効果も出している。

メロディー・スタイル

彼は初期の頃から、多種のスケールから起因する積極的なメロディー・メーキングをしている。5音階的なメロディー、また、リハモニゼーションをして生まれてくる新しいコードによるスケール、1オクターブで終らない長いスケールなどがある。しかし、ここで注意したいことは、使う音は非常に幾何学的であるが、ジャズ特有の言いまわし(ブルース)の上に作られたものであることだ。つまり、歌うことを基本にしてのメロディー・メーキングから生まれたものであることを把握しておいてほしい。

メロディーとハーモニーのコンビネーション(右手と左手)を比較すると次のようになる。

〈A〉 メロディー(右手)対ハーモニー(左手)
"Now He Sings, Now He Sobs"などにみられるチックの特徴的なソロ・プレイ。

〈B〉 ハーモニー(右手)対メロディー(左手)
"La Fiesta"、"Sometime Ago"、"Ballad For Anna"にみられる。

〈C〉 ハーモニー(右手)対ハーモニー(左手)
"Now He Sings, Now He Sobs"の前奏にみられる。

〈D〉 メロディー(右手)対メロディー(左手)
"Sometime Ago"の一部にみられる。

リズム・スタイル

彼は、$\frac{4}{4}$拍子よりはむしろ$\frac{6}{8}$拍子、$\frac{3}{4}$拍子などを好んで演奏している。

彼の4拍子系統のものには、黒人のリズム感に見られる大胆な感じはなく、3拍子系統のものの方がより生き生きしたものが出てくるように思われる。また、ラテン・リズムのような中においても、生き生きとしたものが出ているようだ。これは、民族、言語、生活などといった環境が大きく影響しているものと考えられる。

右手のアドリブ・メロディーは強弱を平均にとり、均等な長さをとって弾く方法が多い。

また、左手の和音奏法でリズムの進行感を出しているのも、彼のリズムの特徴である。

音楽家としてのチック・コリア

初期の演奏を聴いてもわかる通り、実に知性的なピアニストである。彼は自分のピアノ・スタイルを構築するために、あらゆる種類の音楽からヒントを得、貪欲に吸収してきている。また、まだ無名であった頃は、ニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジのジャズ・クラブなどに出て、ジャム・セッションに参加していたようである。

音楽的なピアノ・スタイルの影響として、ジャズ・プレイヤーからはバッド・パウエル、マッコイ・タイナー、ビル・エヴァンス、クラシックからはドビュッシー、ラヴェルなどからで、ラテン音楽からも強い影響を受けている。

音楽家としてはマイルス・デイヴィスに多大な影響を受けている。マイルス・グループ退団後、彼はピアニストとしての音楽から、さらにジャズ・オーガナイザーとしての音楽を始めることになる(最近のアルバムにそれが感じられる)。しかし、ここで注目したいのは、彼の音楽家としての意識の変化である。彼の音楽が土台から変わったことではないのである。なぜならば、電気楽器を導入した以後のオーケストレイションは、初期における自分のピアノ・スタイルそのものなのである。彼はほかの楽器奏者に対して、適確にどのように演奏してほしいかというイメージを要求することができる。これは、彼がピアニストとしてではなく、ひとりの音楽家としてより広い音楽性を持っていることを示している。

インタヴュー

―音楽は、人々とコミュニケイトするための道具にすぎない―

――最初にピアノを始めたキッカケと、ジャズに興味を覚え始めたキッカケについて話していただけますか。

チック：ピアノは4歳の時始めたけど、キッカケはボクの育った環境、というのが一番いいと思う。父がジャズのトランペット・プレイヤーだったから、家にはメンバーの連中が毎日のように出入りしていて、常に音楽に囲まれていた。それに、父はレコード・コレクション、特にビ・バップ系、たとえば、チャーリー・パーカー、ディジー・ガレスピー、バッド・パウエル、ビリー・エクスタイン、サラ・ボーンといったようなネ、こういったコレクションをしていたので、この種の音楽はボクにとって、非常にノーマルなものだった。

ピアノは最初、父が教えてくれたが、10歳の時、始めて先生についてクラシックを学び、本格的なピアノ・テクニックを習い始めた。

だいたい4～5年の間、先生について勉強したけど、ボク自身は常にジャズをやりたいと思っていた。

――影響を受けたミュージシャンがいたら教えて下さい。

チック：有名無名にかかわらず、いろんなミュージシャンの影響を受けていると思う。その中にはもう亡くなった人もいるし……。やはり、クラシックとジャズのミュージシャンが主だったけど。ただ、ほかのミュージシャンから新しい何かを学ぶごとに、それらはボクのクリエイションの源になっていたことは間違いないことだ。

サークル は前衛派の影響

――ところで、あなたのピアノにはパーカッション的な要素を感じるんですが、初期のモンゴ・サンタマリアとのレコーディングでは、あなた自身もパーカッションを担当していたんですか。

チック：あの時は、ただピアノだけだった。ボクのピアノにパーカッション的な要素があるのは、ボクがドラムもやるせいだろう。実際、ボクはウェイン・ショーターと一緒に演った2枚のレコードでドラムを叩いたし、マイルス・デイヴィスのバンドでも、ジャック・ディジョネッ

トと交代しながらドラムを演ったことがある。

ボクは小さい頃から、ドラムやパーカッションに興味があったので、練習することはもちろん、ラテン、アフリカン・リズムも研究していた。

——サンタマリアと一緒に演った頃に比べ、『サークル』のアルバムは全く音楽的には異質で、我々にはフリー的な要素を感じさせてくれたんですが、当時はどのようなことを考えていたんですか。

チック：あれは、ボク自身の、ちょうど実験的な時期だった。インプロヴィゼイションに関して、さらに音楽的なスタイルに関しても、全て実験的な試みをしていた。だから、あのアルバムは、全てその場のインプロヴィゼイションだけが収録されていて、前もって作曲したものは何ひとつ入っていない。

当時、ボクやデイヴ・ホーランドは、前衛派といわれたカールハインツ・シュトックハウゼン、ジョン・ケイジ、ベル・バルトークらに強い影響を受けていた。当時はボクにとって、非常にいい経験だったし、また楽しくもあった。

新しい人生観が"R.T.F."を作った

——そして、次にはマイルス・バンドを経て、"リターン・トゥ・フォーエヴァー"を作ったわけですが、これまた我々にとっては驚きのバンドだったわけで、そのへんの経過、またエレクトリック・ピアノを弾き始めた理由についても話してもらえますか。

チック：エレクトリック・ピアノは、マイルスのバンドにいた時使い始めたけど、最初は全く好きじゃなかった。でも使っていくうちに、だんだん好きになり始めた。でも、当時はまだまだアクースティック・ピアノが主体で、エレクトリックはあくまでも付加的に使っていた。言い換えれば、ピアノではなく、異質な楽器として使っていたわけだ。

マイルスと一緒に演った最後の頃、ボクは一人の哲学者に傾倒し、完全に自分の人生の生き方に新しい方向性を見い出していた。その哲学者はエルヴィン・ハバートという人なんだが、彼は、人生についてのいろいろな素晴らしい、それも実用的なことを書いている。そのひとつとして、コミュニケイションということがあった。それまでは、人生を考える上で、常に自分自身のことだけを中心にしていたんだが、彼の哲学を勉強すればするほど、他人とのコミュニケイションの重要性に気付き始めた。要するに、自分がクリエイトしたものを、自分だけの喜びにするのではなく、その喜びを他人にもわかってもらえた方が、もっともっと大きな喜びとして感じられる。ということで、自己中心の人生から、人々の中の自分という考えに変わったんだ。

もちろん、この思想はボクの音楽にも入り込んだわけだ。具体的にいえば、今までと異なる音楽、スタイル、バンド、楽器、リズム、メロディ、その他の音楽要素を、ひとつの道具、手段にして人々とのコミュニケイションをはかり、喜びを分かち合いたいと思ったんだ。だから、子供とコミュニケイトしたい場合にはこの手段で、また君とコミュニケイトしたい場合には違った手段で、またこの聴衆とコミュニケイトしたい時には、さらに違った手段で、というふうに、その時々によって道具も変わってくるわけ。

こういった哲学的思考の中から作りだした、最初の試みが"リターン・トゥ・フォーエヴァー"であって、音楽的にいっても、それまでのグループに比べれば、よりユニヴァーサル的なものだったといえる。そして、このグループで演ることを、ボク自身大いに楽しんでいる。

ジャズが大衆音楽になれなかった理由は‥

——最初、あなたがこの音楽界に登場してきた時、我

Makion

々は、あなたをジャズ・ミュージシャンと呼んでいたわけですが、現在の音楽的動向、すなわち、クロスオーヴァーとかフュージョン・ミュージックの台頭を考えてみて、一体あなたの音楽、またあなた自身をどのように呼べばいいのでしょうか。

ボク個人の考えを述べさせてもらえば、従来のジャズという言葉自体が、曖昧になってきていることはもちろんですが、でもジャズという音楽は元来、いろんな分野の音楽的要素を集めてきたもので、元々フュージョン・ミュージックだったと思うのですが。

チック：君の意見は、全く正しい。ボクにいわせれば、真実そのものだと思う。現代音楽といわれるものは、全部フュージョンなんだ。バルトークであろうが、コルトレーンであろうが、全てそうだ。

このフュージョンという言葉は、何も芸術の分野だけでなく、たとえば電子工学の分野だって、いろいろな物を組み合わせる"フュージョン"によって発展を遂げてきているわけだ。日常的な物では、テープレコーダーなんかが良い例だ。

ということで、現在頻繁に使われるようになったフュージョンという言葉は、何ひとつ新しい物事を指すものではなく、単にマス・メディアの連中が、いかにも新しい何かが起りつつある、ということを示そうとしているだけのことにほかならない。だから、君らがボクの音楽、またボク自身を何と呼ぼうと、一向にかまわないんだ。

——あなたは、聴衆とのコミュニケイション、ということを大事にすると言われましたが、50年代、60年代のジャズが多くの聴衆を摑まえられなかった理由は、そのへんにもあるのでしょうか。

チック：当時のジャズ、と一言でいっても、いろいろなジャズがあったわけで、個々のプレイヤー、たとえばオーネット・コールマン、ジョージ・ベンソン、セシル・テイラー、ビル・エヴァンスなんかを取り上げてみても、全員違ったことを演っていた。だから、君の質問の解答として言えるひとつは、単にジャズという言葉だけから考えずに、もっと個々のプレイヤーについて考えてみれば、どうして数多くの聴衆を得られなかったかを知ることができると思う。もちろん、ボク自身やハービー、マイルス、そのほかいろんな個々のミュージシャンを含めてネ。

また、これは一般的な解答になってしまうが、当時のジャズ・シーンを取り巻いていた雰囲気は、音楽をボク流の"手段"として、聴衆とのコミュニケイションをはかるというよりは、音楽そのもののための実験段階だったと思う。もちろん、その段階で革新者とか、偉大なプレイヤーといわれた人達が出現したわけだけど、彼らが真剣に音楽に取り組んだのは、聴く側のためというよりは、自分らのためだった。だから、チャーリー・パーカーの、そしてコルトレーンの革新性を完全に理解できた人間だけが、当時のジャズというものを楽しめたのであって、それはほんの一握りのグループでしかなかった。もっとわかりやすい例をあげるなら、一人の科学者が何か新しい調合法を発見したとして、果して何人の人が、その偉業を本格的に理解できると思う？それは同じ科学者、でなければそれなりの知識を持っている人だけが、それを偉業として認め、受け入れるということになるだろう。同じようなことがジャズにも言えるのではないかと思う。

さらに、もうひとつの要因として、当時のジャズを取り巻いていた環境が、ドラッグの世界だった、ということがあげられると思う。ドラッグは他人とのコミュニケイションを薄れさせ、自己の内面ばかりを見つめるような状態にさせるからネ。でも、現在活躍するミュージシャンは、ドラッグよりもどちらかといえば健康食、たとえばビタミンとかネ、それに毎日のエクササイズに興味を持っているから、他人とのコミュニケイションは、前に比べてはるかに良い状態になりつつあると思う。

——ところで、エレクトリックの楽器が、このように広域にわたって使用され始めたわけですが、アクースティック・サウンドの音楽はどうなると思いますか。

チック：この質問は、あまりにも全般的すぎて、答えるには少しシンドイな。

結局、ボク自信のことになるけど、ボクはこれまで、アクースティック・ピアノをずっと弾き続けてきたし、今でも少なくとも半分はアクースティック・ピアノを弾いているから、これからもこの状態が続くと思う。

——アクースティックとエレクトリック・ピアノ、あるいはシンセサイザーなどを使いわけるあなたとしては、作曲する段階ですでにどの楽器を使用するか、また、この楽器用に曲を書こう、とかいろいろ考えると思いますが、どうですか。

チック：ボクはいつも2通りの方法をとっている。ひとつは、楽器のことは何ひとつ考えずに、メロディ、オーケストレイションを構成させ、その後で、この部分にはミニ・ムーグを、この部分にアクースティック・ピアノを、と後で考える方法と、もうひとつは、最初から楽器を頭の中に入れておき、シンセサイザー用のメロディとか、エレクトリック用の何がし、という方法を取っている。実際の話、最新作の『マッド・ハッターズ』の1曲目は、完全に後者の方法で作曲した。

——あなたと同じような楽器の使い方をしているプレイヤーに、ハービー・ハンコックがいると思いますが、彼の音楽観とあなたのそれに、類似した点があると思いますか。

チック：もちろん。いろんな点で一致している。ボクらは大の親友ということもあって、よく話す機会がある。類似している一番大きな点は、どのような音楽効果を利用して、聴衆とのコミュニケイションをはかるか、ということだ。またボクらは、マイルスのバンドに長く参加したこともあり、音楽的バックグラウンドが、非常に似かよっているので音楽の味わい方にも共通点がある。

アイドルを求めるのもいいけど……

——では、最後になりますが、日本のファンの印象について、また、本誌の大半の読者が、何かしらの楽器を演るので、できればテクニカルな面や、精神的な面からのアドヴァイスもお願いしたいのですが。

チック：今までの何度かの来日を通して、日本の音楽一般状況を見たボク個人の意見なんだが、日本人には、どちらかというとアイドル嗜好というか、ひとりのベスト・プレイヤーを捜し求める傾向があるのではないか、と思う時がある。別に悪いことだとは思わないが……。そのプレイヤーが真にベストならネ。でも、そういったアイドルを求めるために費やす時間は、不必要であるとともに無意味なんだ。もっともっと個人個人のプレイヤーの果す役割なり、創造性に目を向けるような姿勢が、今の日本人には必要なのではないかと思う。もし、そういう姿勢で音楽を聴けば、日本人の中にも数多くのアイドルが見つかるだろう。言い換えれば、日本人にもそれだけの創造性を持った人間がいる、ということだ。だから、もっと内面を見るようにすれば、自ずと音楽の楽しみ方が拡大されると思うのだが……。

それから、アドヴァイスだけど、こういったインタヴューで、細かい点までは無理なのだが、ひとつだけ、はっきり言えることは、常に自分自身のための目標、目的をしっかりと持つことだ。特にビギナーには、練習に耐えられなくなる人がいるけど、彼らは、先生のため、親のための練習をしているからで、自分自身のために、という確固たる目的を持っていないからだと思う。

——いろいろと、ありがとうございました。

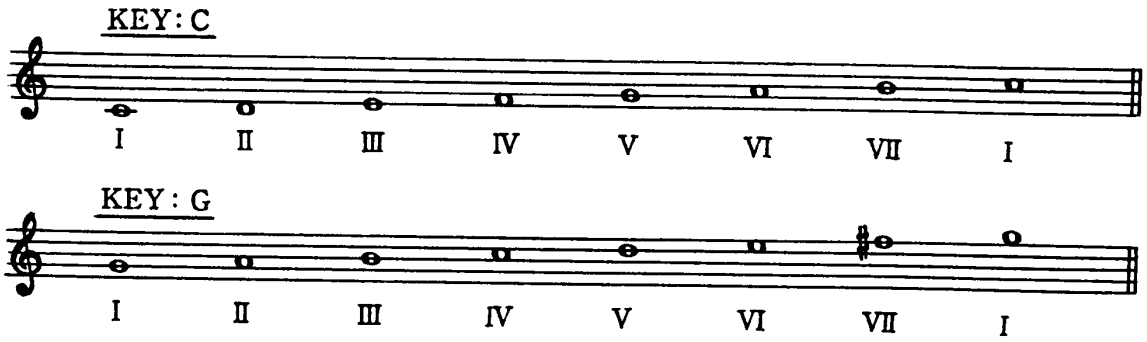
〈インタヴュアー：浅石雅道〉

《Jazz Life '78 8月号より》

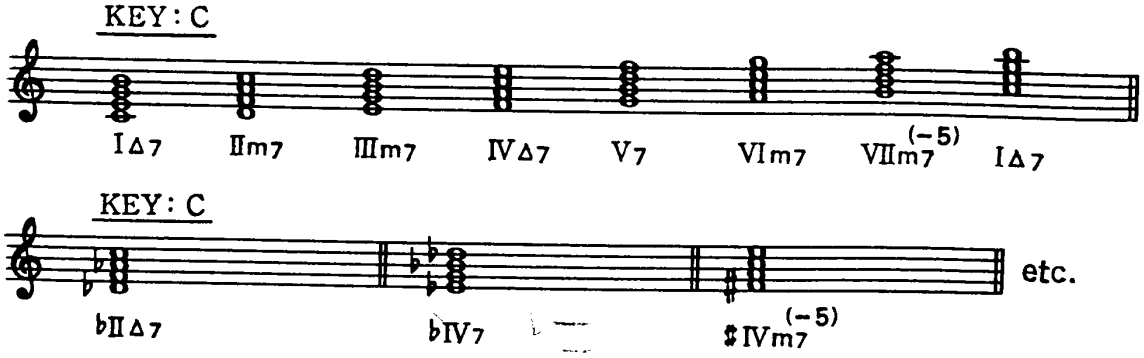
記譜法

詳しくは、理論書で勉強していただきたいが、コード・プログレッション上の表記は下記のとおりである。

スケール上の度数（ディグリー）表示は、その部分の調性の主和音をⅠとし、順にⅡ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅶで表わす。

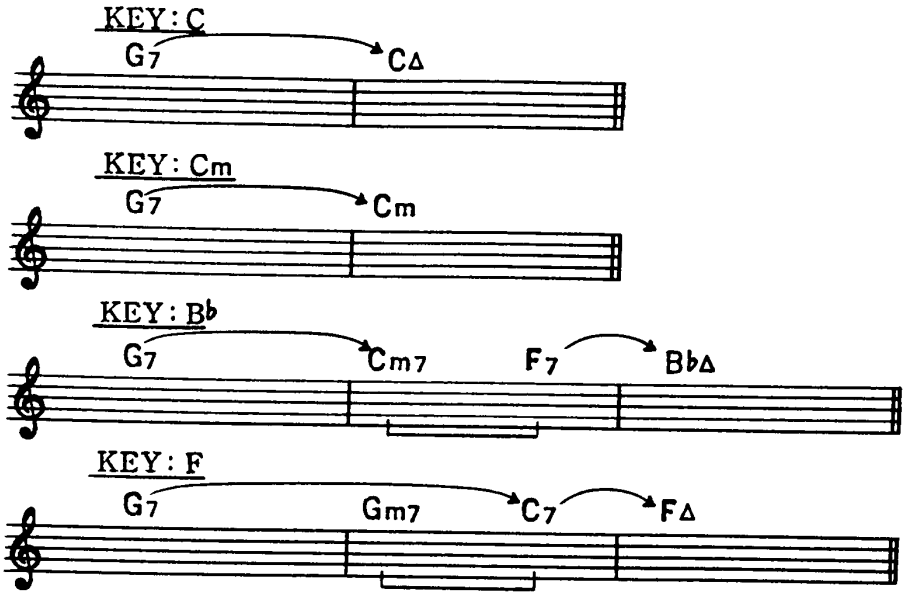


その上に組み立てられたコードは、そのキャラクターを右側に付加する。スケールをはずれたものは、その根音の変化を左側に付加する。

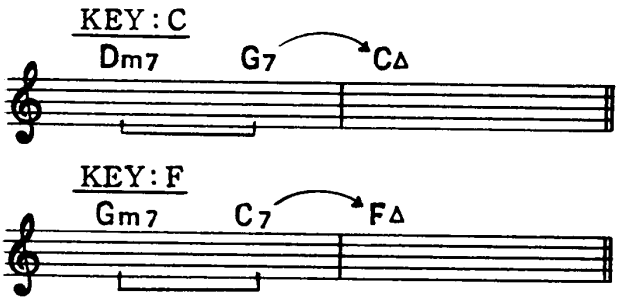


コード・プログレッションの中で、多用される進行は、略号をもって次のように表わす。

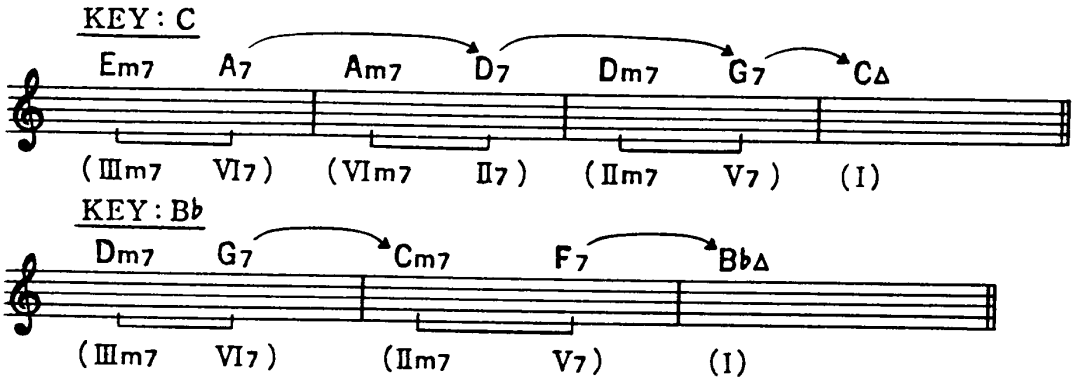
ドミナント・モーション（属７の解決）は、矢印（⌒）で表わす。



IIm7— V7はカギカッコを下につける。



IIm7— V7に準じたコード・プログレッションもカギカッコを下に付ける。（この場合、マイナー7thから４度上行したドミナント7thの進行は、すべて当てはまる）



代理和音（Sub Chord）を利用したと見なされるコード・プログレッションは、原和音を想定し、同じように表記する。

代理和音の詳細は、既刊「実用ジャズ講座」（藤井貞泰編／リットーミュージック出版）に譲るが、基本的には、次のようになる。ただしダイアトニックのみとする。

Tonic Majorの代理

主和音＝I
- I6
- I△9
- IIIm7
- VIm7

＝代理和音

Tonic Minorの代理

主和音＝Im
- Im6
- Im△7
- Im7（Dorianとして）
- ♭III△7（　〃　）
- ♮VIm7−5

＝代理和音

Sub Dominant Majorの代理

下属和音＝IV
- IV△
- IV7
- VII7
- IIm7
- ♯IVm7−5

＝代理和音

Sub Dominant Minorの代理

下属和音＝IVm
- IVm
- IIm7−5
- ♭VII7
- ♭VI7
- ♭VI△7
- ♭II△7

＝代理和音

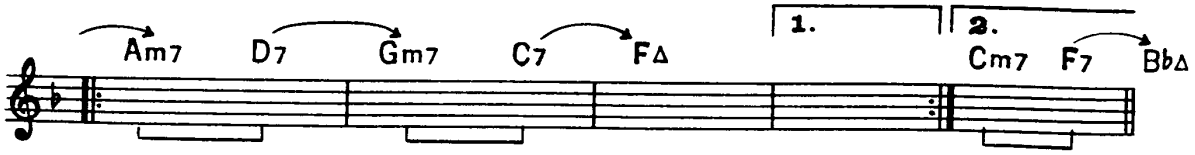
Dominant 7thの代理

属7の和音＝V7
- ♭II7
- VIIm7−5

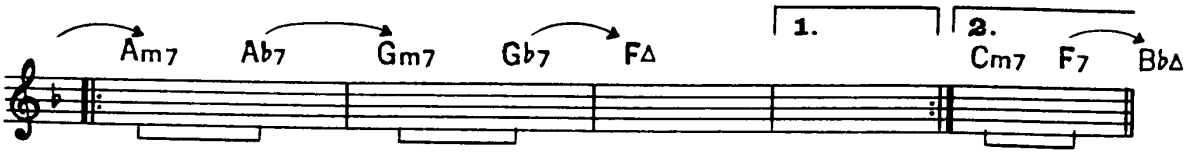
＝代理和音

これらの代理和音は、それぞれ互換性があるので、覚えておく必要があり、さらに使われる場合の条件も知っていなくてはならない。

たとえば、下記のコード・プログレッションは——



上記のように表記できるが、代理和音を使って次のようにも変えられる　この場合、サウンド（響き）は変わるが、機能的には同じであると考える。



Available Note Scale

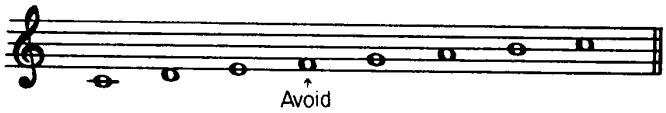
コードは、それぞれのスケールから、派生したものがもとになっている。逆にコードからスケールを想定していくことは、インプロヴィゼイションにおいて非常に重要な位置を占め、さらに、この理解なしに、インプロヴィゼイションを行なうことは、不可能なほどである。コード・トーンとそのアプローチ・ノート、テンションなどによって、おおむねあるスケールの形は生じるが、それをコードの機能と合わせて、スケールとして扱う考え方が、このアヴェイラブル・ノート・スケールの根底をなすのである。

実際の使い方については、各ステップで解説しているので、ここでは、通常使われるスケールの名称と、音列を知っておこう。

ヴォイシングの際にそのコードの響きを阻外する音をアヴォイド・ノート（Avoid Note）という。インプロヴィゼイション上では、原則的に8分音符以下の音符で使用される。しかし、モードの曲の場合には、特性音としてアヴォイド・ノートがなければそのモードが成立しない。この表では矢印でAvoidと表記してある。

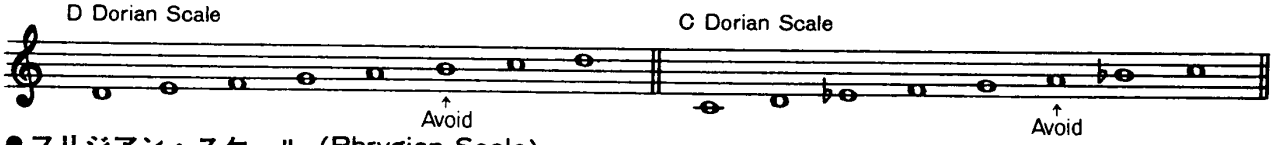
●アイオニアン・スケール（Ionian Scale）

C Ionian Scale



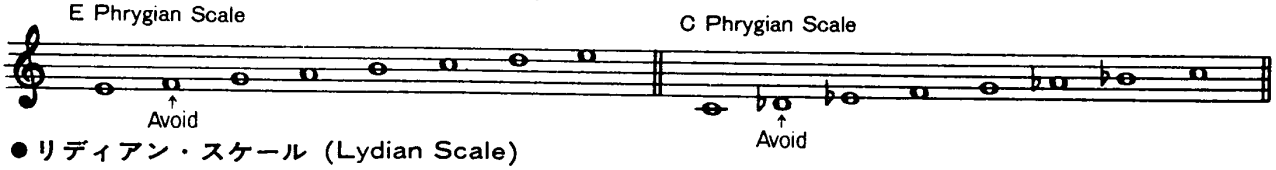
●ドリアン・スケール（Dorian Scale）

D Dorian Scale　　C Dorian Scale



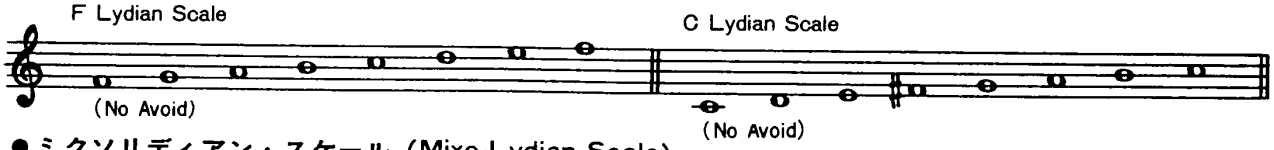
●フリジアン・スケール（Phrygian Scale）

E Phrygian Scale　　C Phrygian Scale



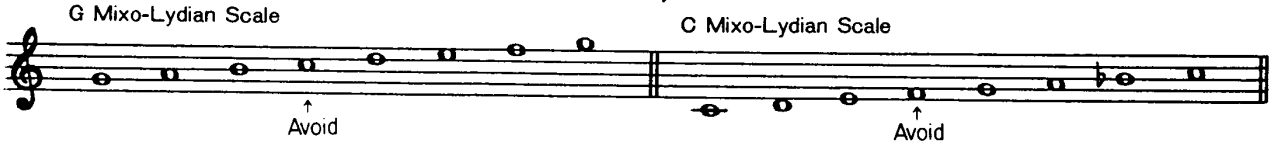
●リディアン・スケール（Lydian Scale）

F Lydian Scale　　C Lydian Scale



●ミクソリディアン・スケール（Mixo-Lydian Scale）

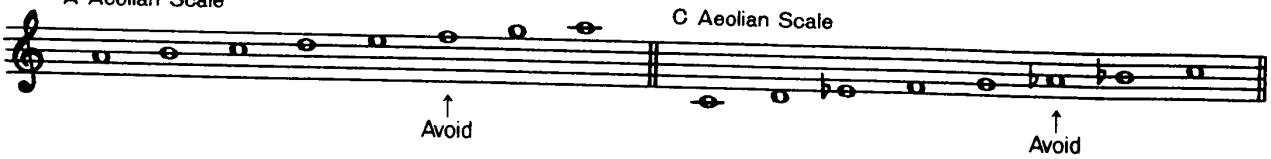
G Mixo-Lydian Scale　　C Mixo-Lydian Scale



●エオリアン・スケール (Aeolian Scale)

A Aeolian Scale

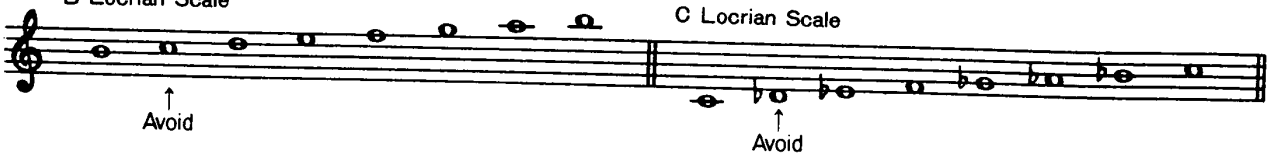
C Aeolian Scale



●ロクリアン・スケール (Locrian Scale)

B Locrian Scale

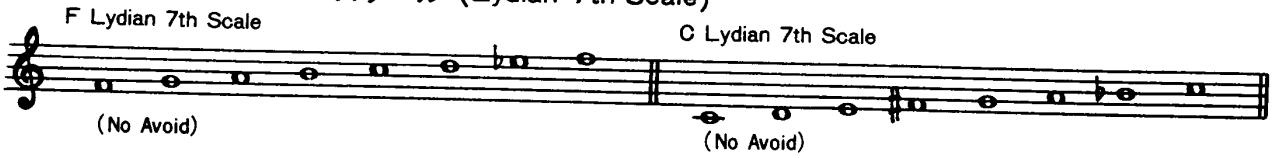
C Locrian Scale



●リディアン・セブンス・スケール (Lydian 7th Scale)

F Lydian 7th Scale

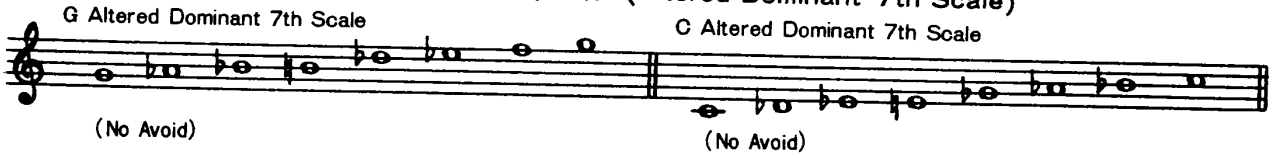
C Lydian 7th Scale



●オルタード・ドミナント・セブンス・スケール (Altered Dominant 7th Scale)

G Altered Dominant 7th Scale

C Altered Dominant 7th Scale

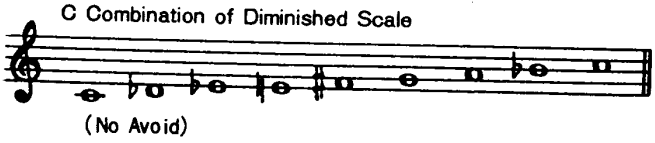


●ディミニッシュド・スケール (Diminished Scale)

C Diminished Scale

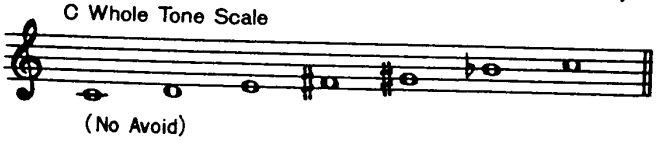
●コンビネーション・オブ・ディミニッシュド・スケール
(Combination of Diminished Scale)

C Combination of Diminished Scale



●ホール・トーン・スケール (Whole Tone Scale)

C Whole Tone Scale



● トニック・マイナー・スケール (Tonic Minor Scale)

(a) 自然的短音階 (Natural Minor Scale)

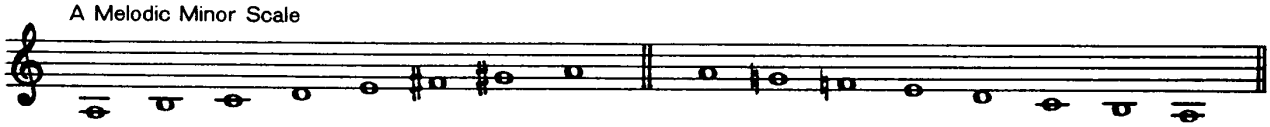
(Aeolian と同じスケールである。)

(b) 和声的短音階 (Harmonic Minor Scale)

A Harmonic Minor Scale

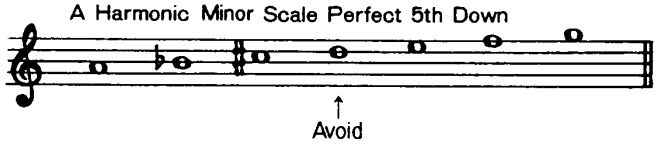
(c) 旋律的短音階 (Melodic Minor Scale)

A Melodic Minor Scale



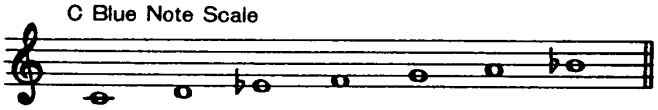
● 完全5度下から始まるハーモニック・マイナー・スケール
(Harmonic Minor Scale Perfect 5th Down)

A Harmonic Minor Scale Perfect 5th Down



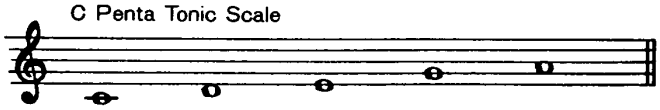
● ブルー・ノート・スケール (Blue Note Scale)

C Blue Note Scale



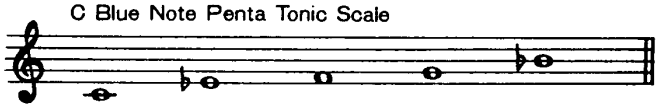
● ペンタ・トニック・スケール (Penta Tonic Scale)

C Penta Tonic Scale



● ブルー・ノート・ペンタ・トニック・スケール (Blue Note Penta Tonic Scale)

C Blue Note Penta Tonic Scale



●各曲のコード・プログレッション・アナライズのスケール名は，略語を使用しました。

Now He Sings, Now He Sobs

ナウ・ヒー・シングス, ナウ・ヒー・ソブス　by CHICK COREA

IMPROVISATION ADVICE

イントロ部分は、$\frac{3}{4}$、$\frac{4}{4}$、$\frac{5}{4}$、$\frac{6}{4}$拍子といった変則的な拍子の組み合わせによってできている。

右手と左手の対位的なメロディーの作り方や、ハーモニーの作り方がおもしろい。

イントロでは、BSUS4の5度の響きが全体を引き締めている。

テーマ部におけるコード進行を考えてみよう。

○Bm→C△

これは、Bフリジアンとしてのトニックとドミナントの関係である。

○Bm→B♭SUS4→ASUS4→A♭SUS4→GSUS4→F♯SUS4→Bm

これは、Bmのドミナントである F♯コードへ、Bmからメジャー SUS4コードの形で半音下降したもの。

全音下降ならば次のようになる。

Bm→ASUS4→GSUS4→F♯SUS4→Bm

○Bm→Bdim(on D♯)→Bdim(on C)→Bdim(on A)→GSUS4→F♯SUS4→Bm

このテーマ部の7～8小節目のコード進行の中で、Bdim(on D♯)は譜面上で上2声がG♯音、D音、下2声がD♯音、G♯音になり、機能としては上2声がBdim、下2声がE♭SUS4になる。このようにしてBdim(on C)の下2声はCSUS4、Bdim(on A)はASUS4になる。そうすると上声と下声とで異なる進行ができあがる。

EX.

上声～Bm→Bdim →Bdim →Bdim →GSUS4→F♯SUS4

下声～Bm→E♭SUS4→CSUS4→ASUS4→GSUS4→F♯SUS4

○ $G^{(on\ A)} \rightarrow A^{(on\ B)} \rightarrow B\flat^{(on\ C)} \rightarrow C^{(on\ D)} \rightarrow D\flat^{(on\ E\flat)} \rightarrow E\flat^{(on\ F)} \rightarrow$

$\rightarrow E^{(on\ F\sharp)} \rightarrow F\sharp^{(on\ G\sharp)} \rightarrow A\flat_7 \rightarrow A\flat_7 \rightarrow B_7 \rightarrow F\sharp_7 \rightarrow Bm$

このテーマ部の9小節目からの進行は次のようになり、ディミニッシュ・スケールをAから上降したものである。

$A_7\ SUS4 \rightarrow B_7\ SUS4 \rightarrow C_7\ SUS4 \cdots\cdots\cdots \rightarrow A_7 \rightarrow A\flat_7 \cdots\cdots\cdots$

ディミニッシュ・スケール上を根音とした和音の動きは、迷路遊びの時に出口を探すような感じで、和音としての進行感はあまりないが、ニュアンスは非常におもしろい。

○ $Bm \rightarrow C \rightarrow D_6 \rightarrow E_6 \rightarrow F\sharp_6 \rightarrow E \rightarrow D_6 \rightarrow C \rightarrow Bm$

この進行はBm以外は全音(ホール・トーン)進行である。

インプロヴィゼイションのモチーフとして、次のようなコード進行が使われている(原則としてBmワン・コードがインプロヴィゼイションの中心となっている)。

EX.

○ $Bm \rightarrow C\triangle_7 \rightarrow C_7 \rightarrow Bm$

○ $Bm \rightarrow B_7 \rightarrow A\flat_7 \rightarrow F_7 \rightarrow Bm$

○ $G_7 \rightarrow G\flat_7 \rightarrow Bm$

○ $B_7 \rightarrow A\flat_7 \rightarrow F_7 \rightarrow C_7 \rightarrow Bm$

$(F\sharp m \rightarrow E\flat m \rightarrow Cm \rightarrow C_7 \rightarrow Bm)$

○ $C_7 \rightarrow G\flat_7 \rightarrow Bm$

○ $C\triangle_7 \rightarrow G\flat_7 \rightarrow Bm$

Makion

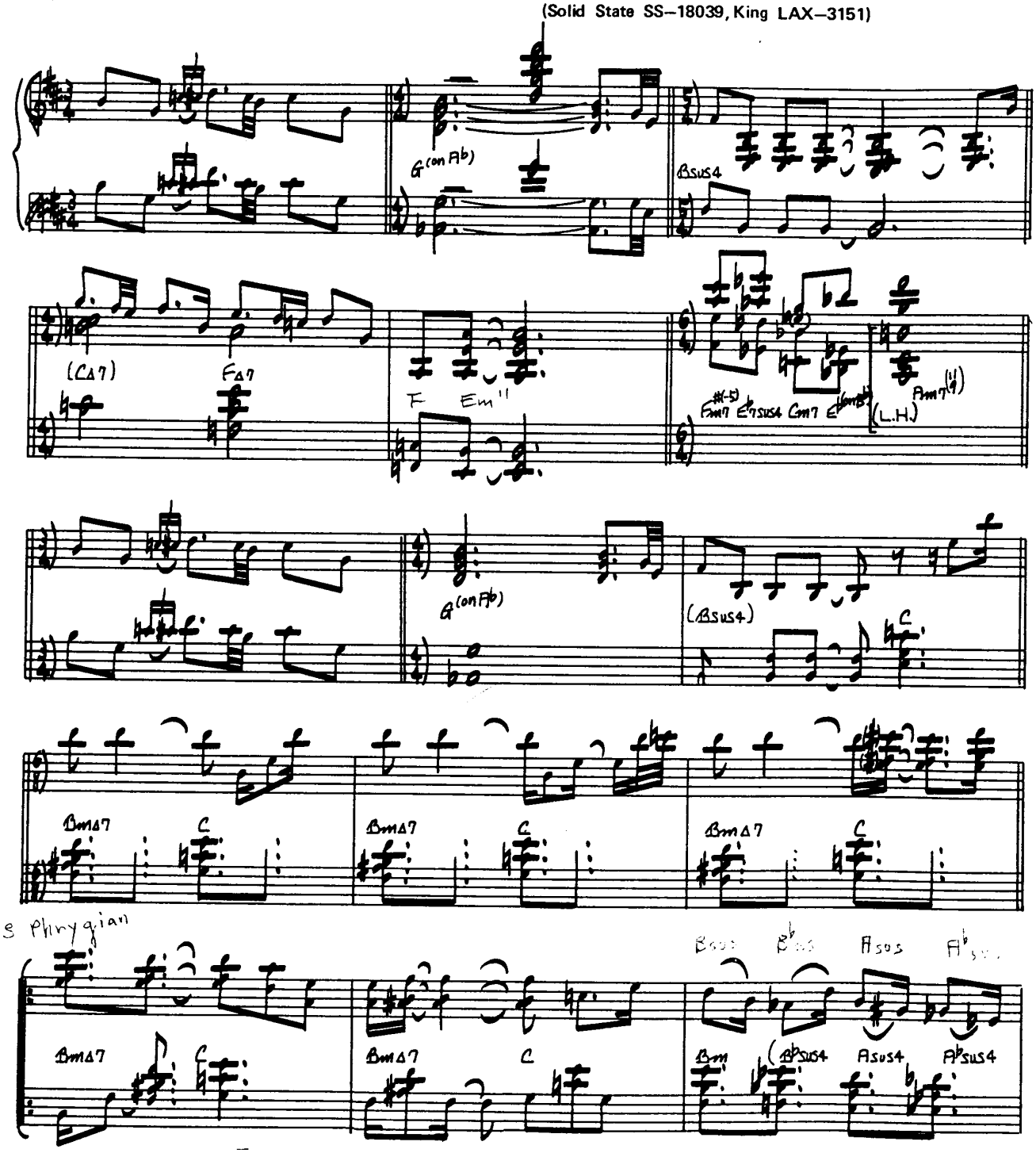
IMPROVISATION

Chick Corea (p)
Miroslav Vitous (b)
Roy Haynes (ds)

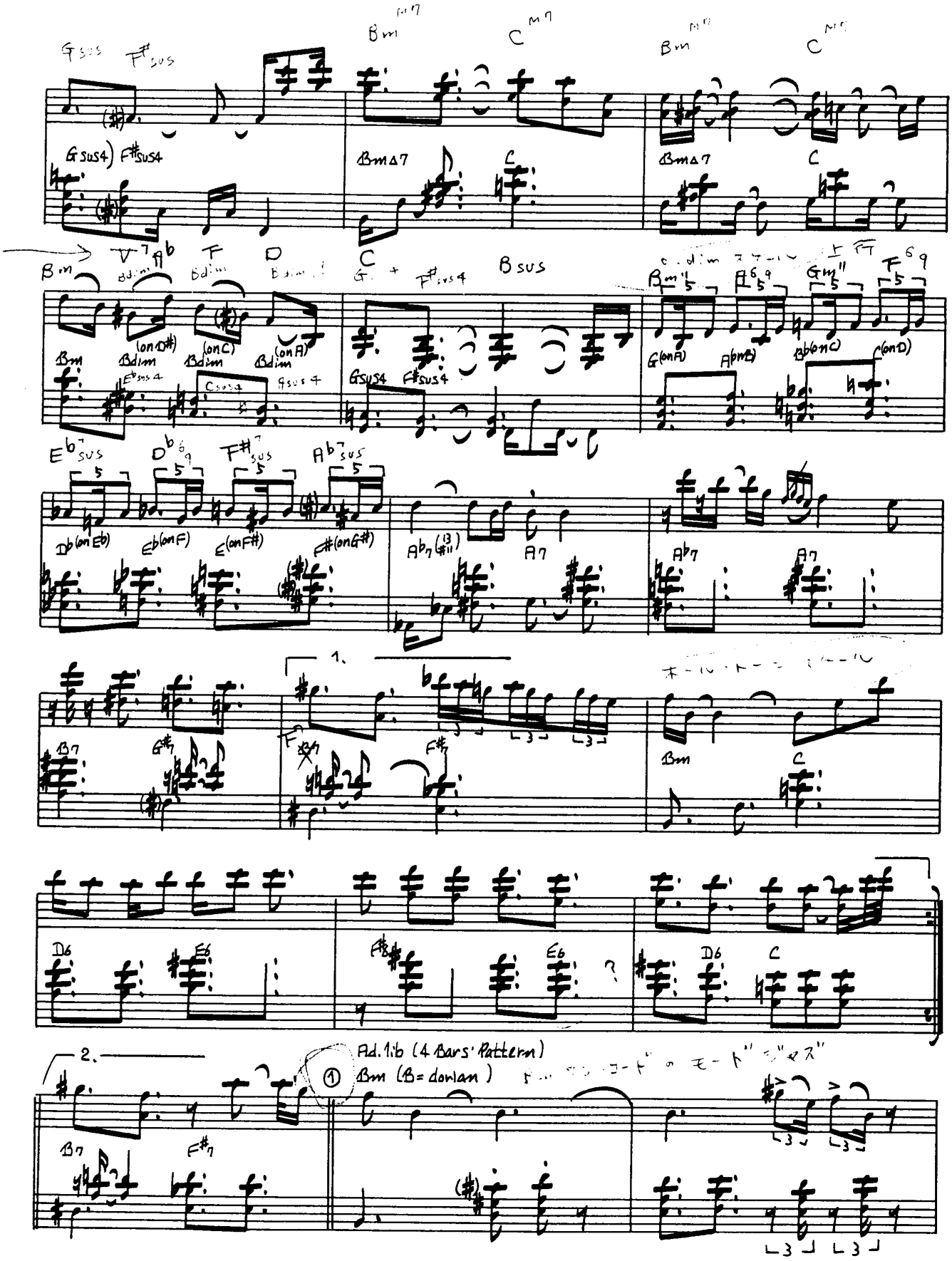
「Now He Sings, Now He Sobs」

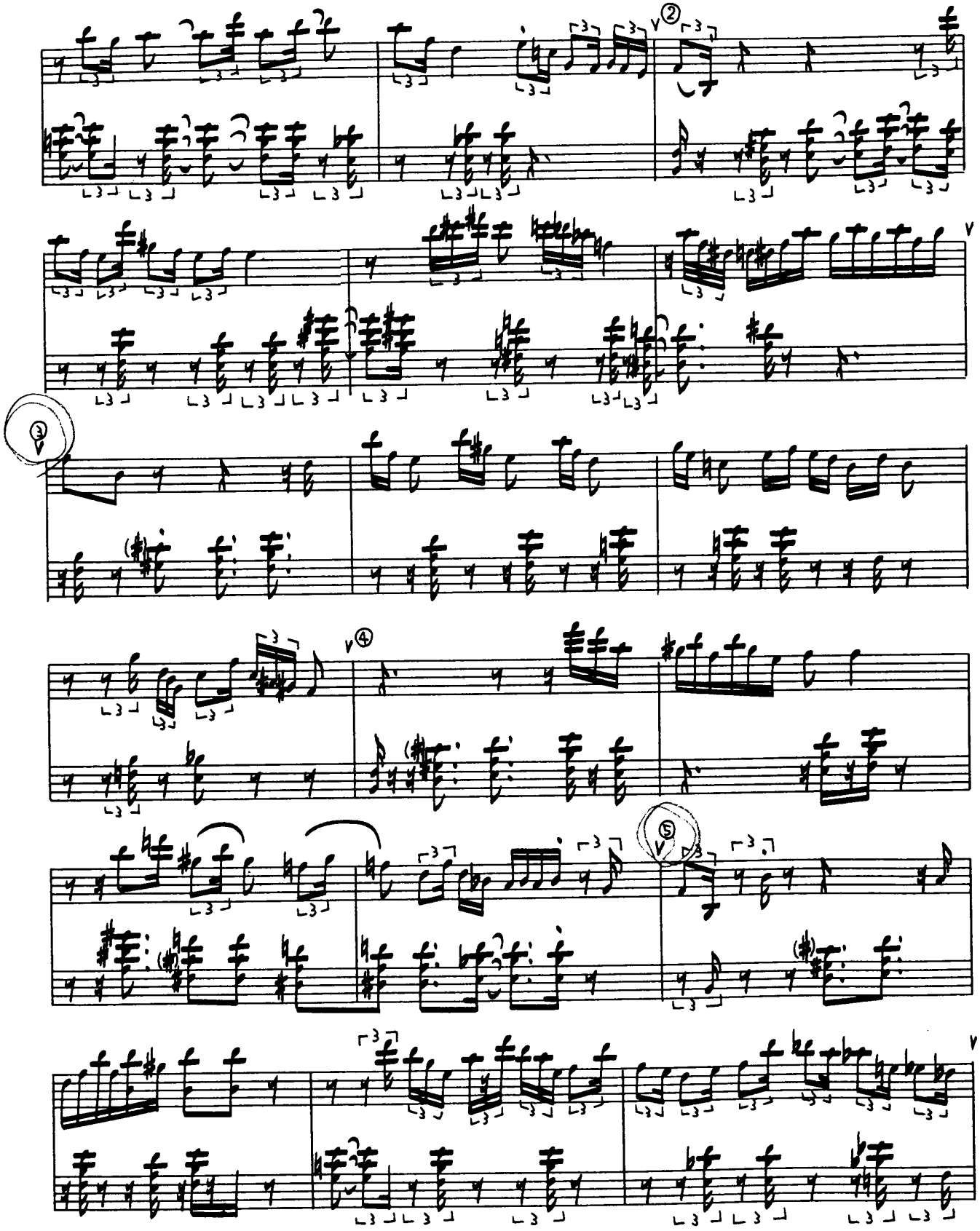
by Chick Corea

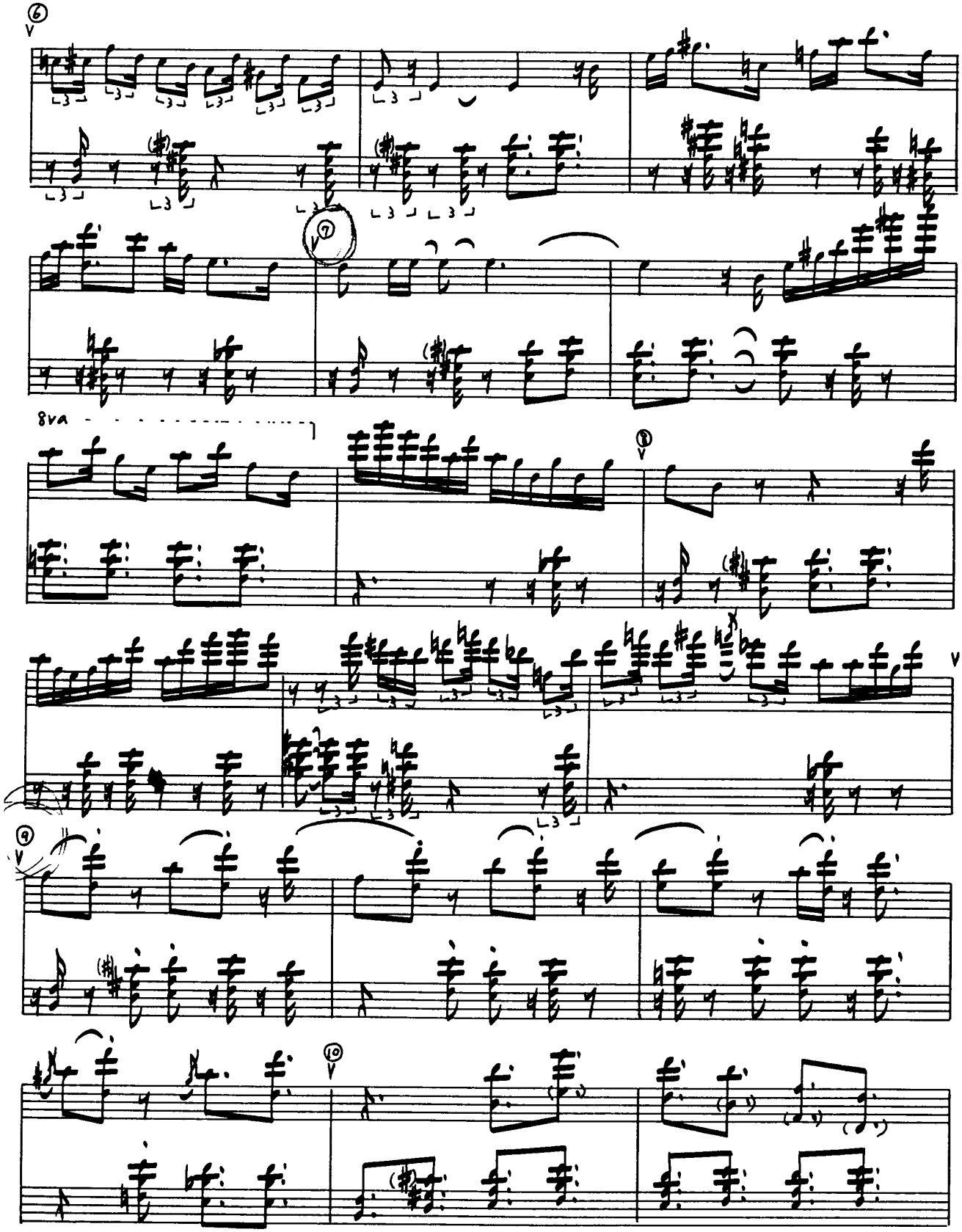
● Record:NOW HE SINGS, NOW HE SOBS/CHICK COREA
(Solid State SS–18039, King LAX–3151)

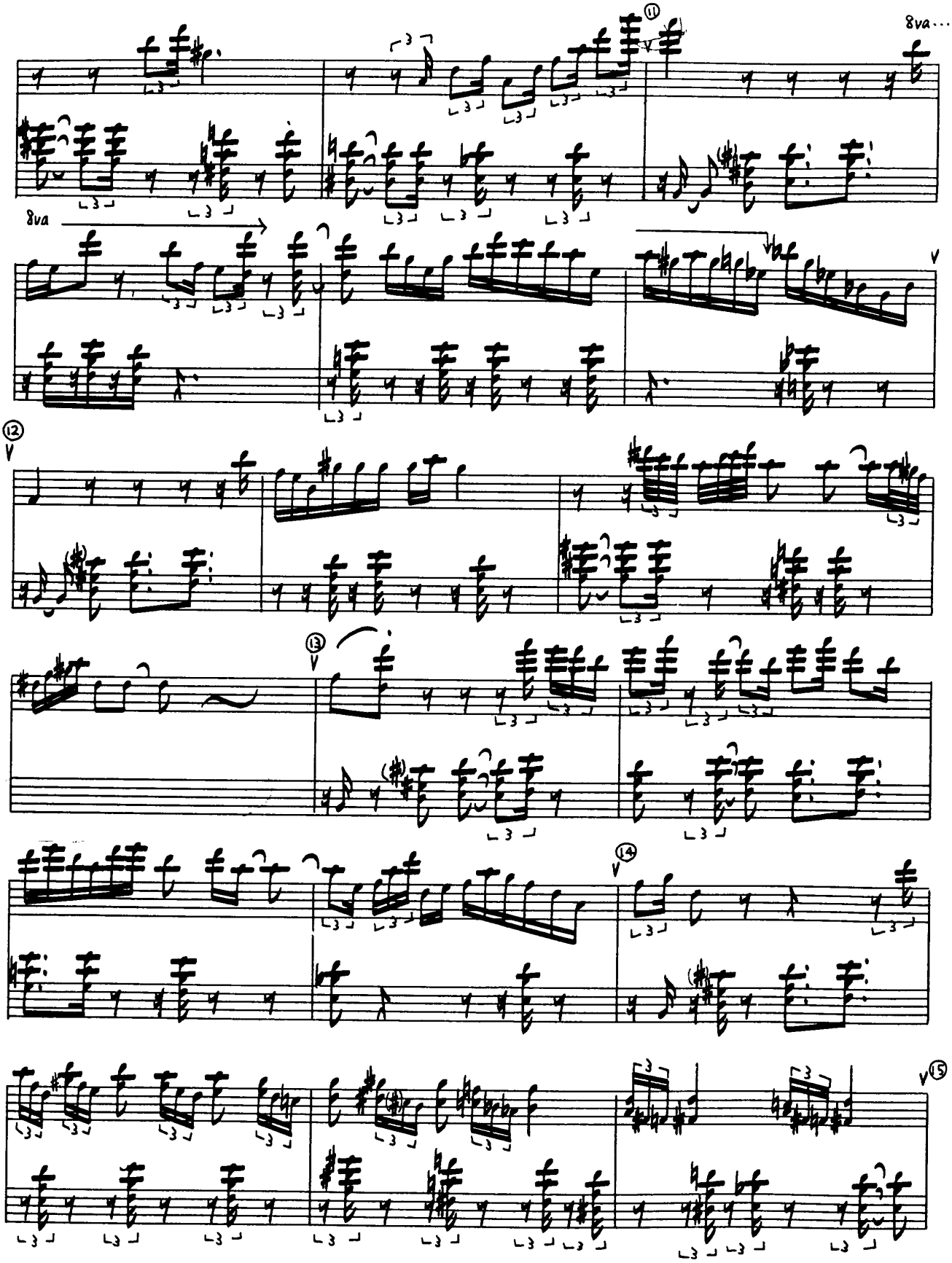


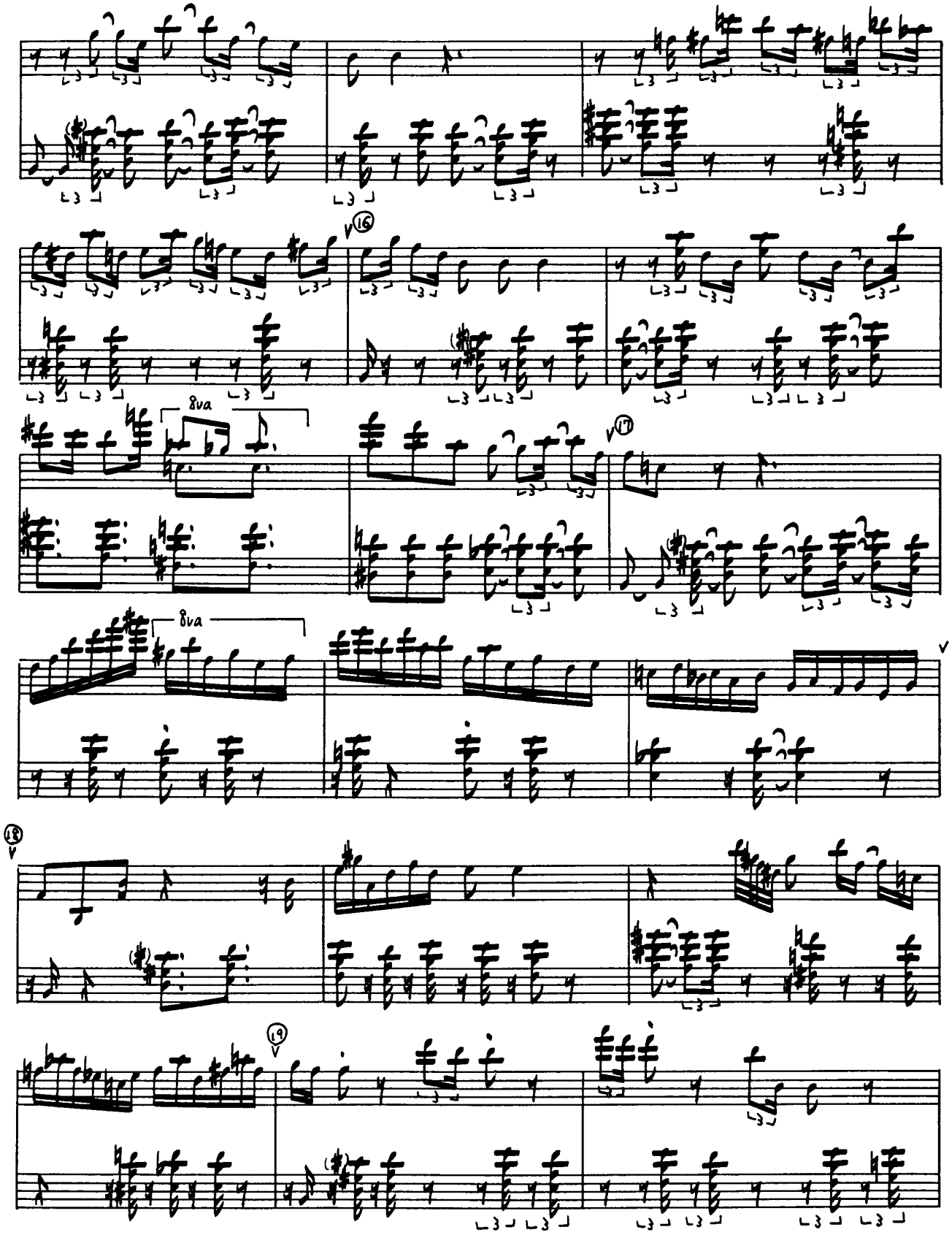
©by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.

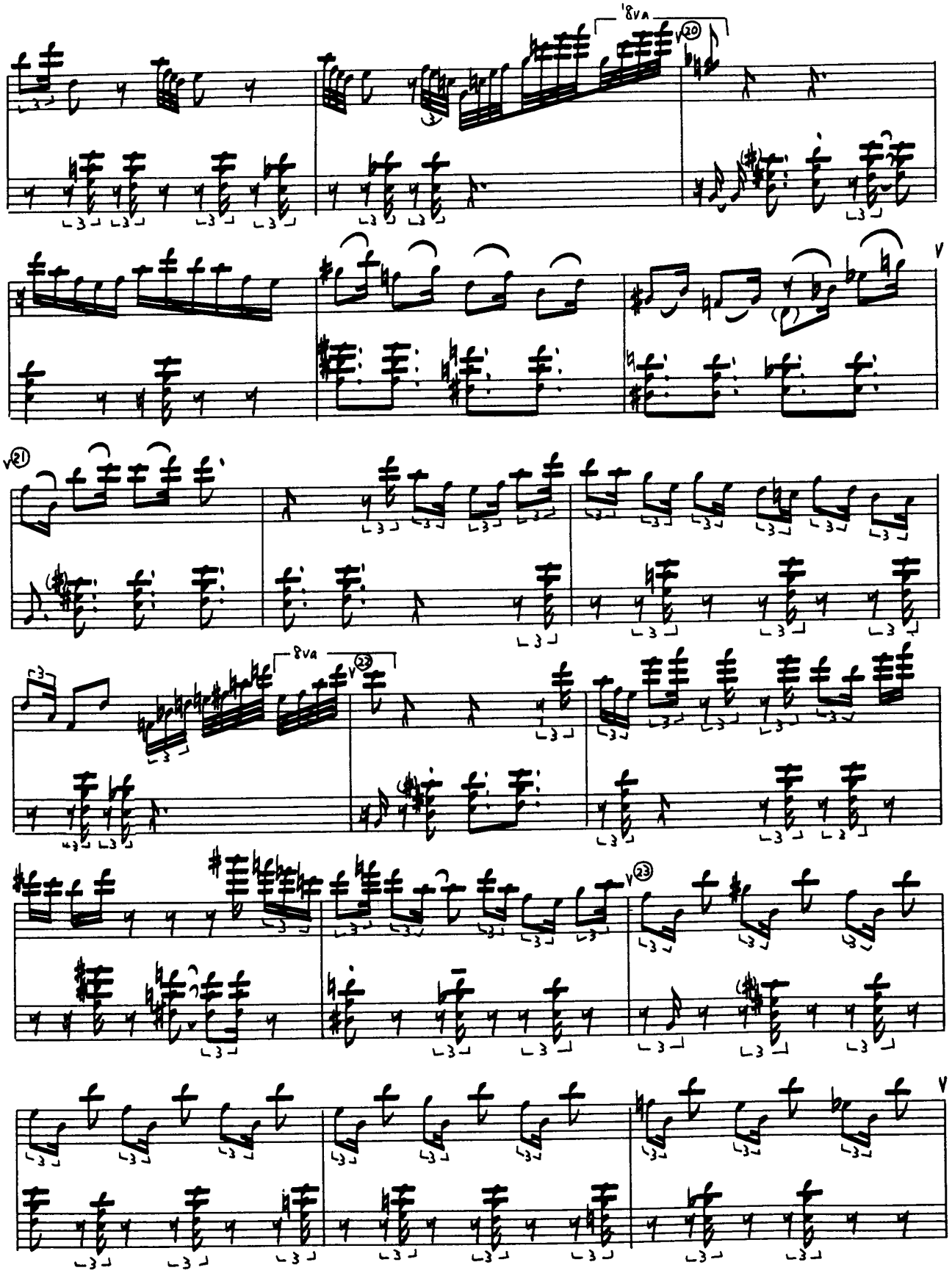

Ad.lib (4 Bars' Pattern)
① Bm (B= dorian)
1.
2.

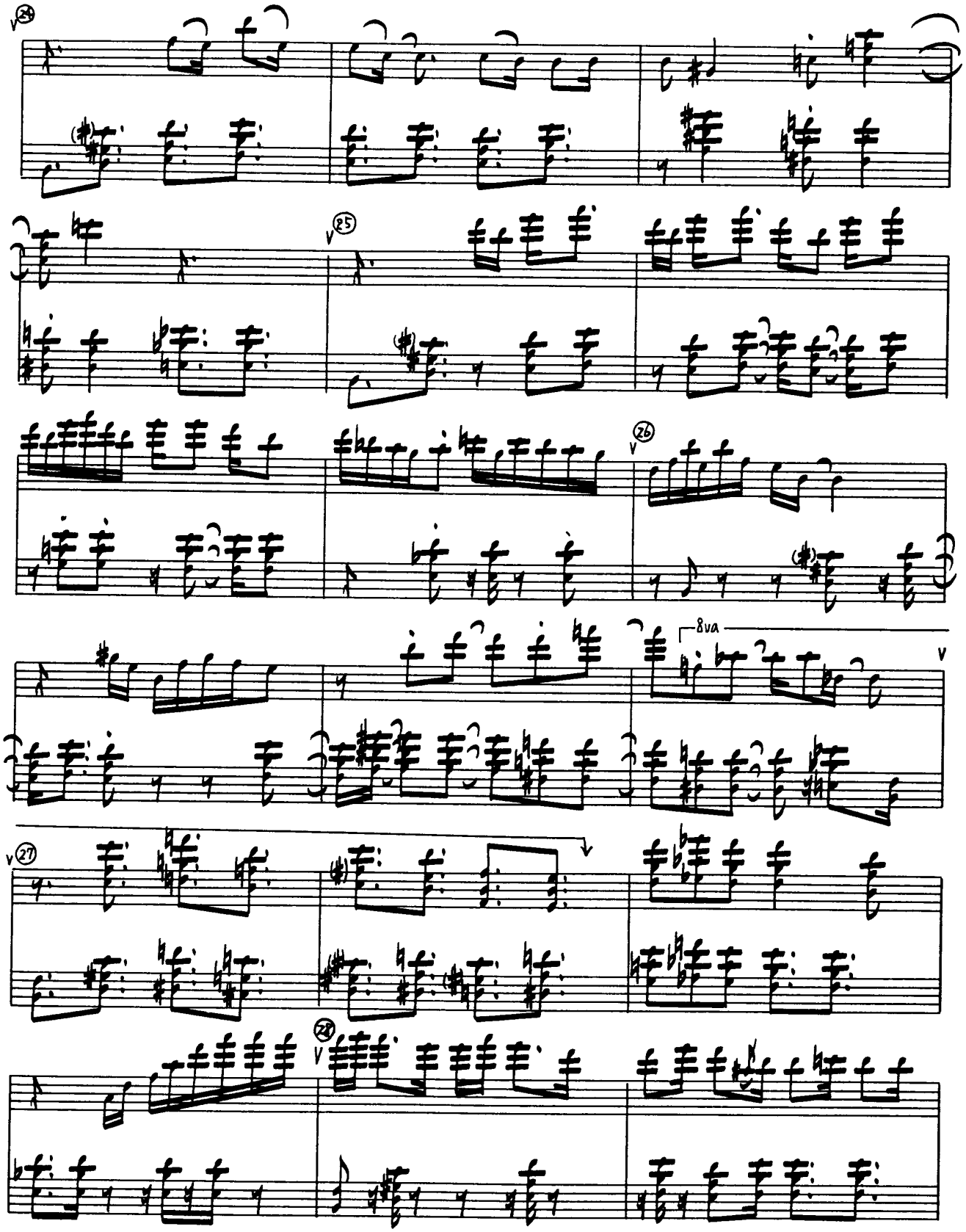

②
③
④
⑤

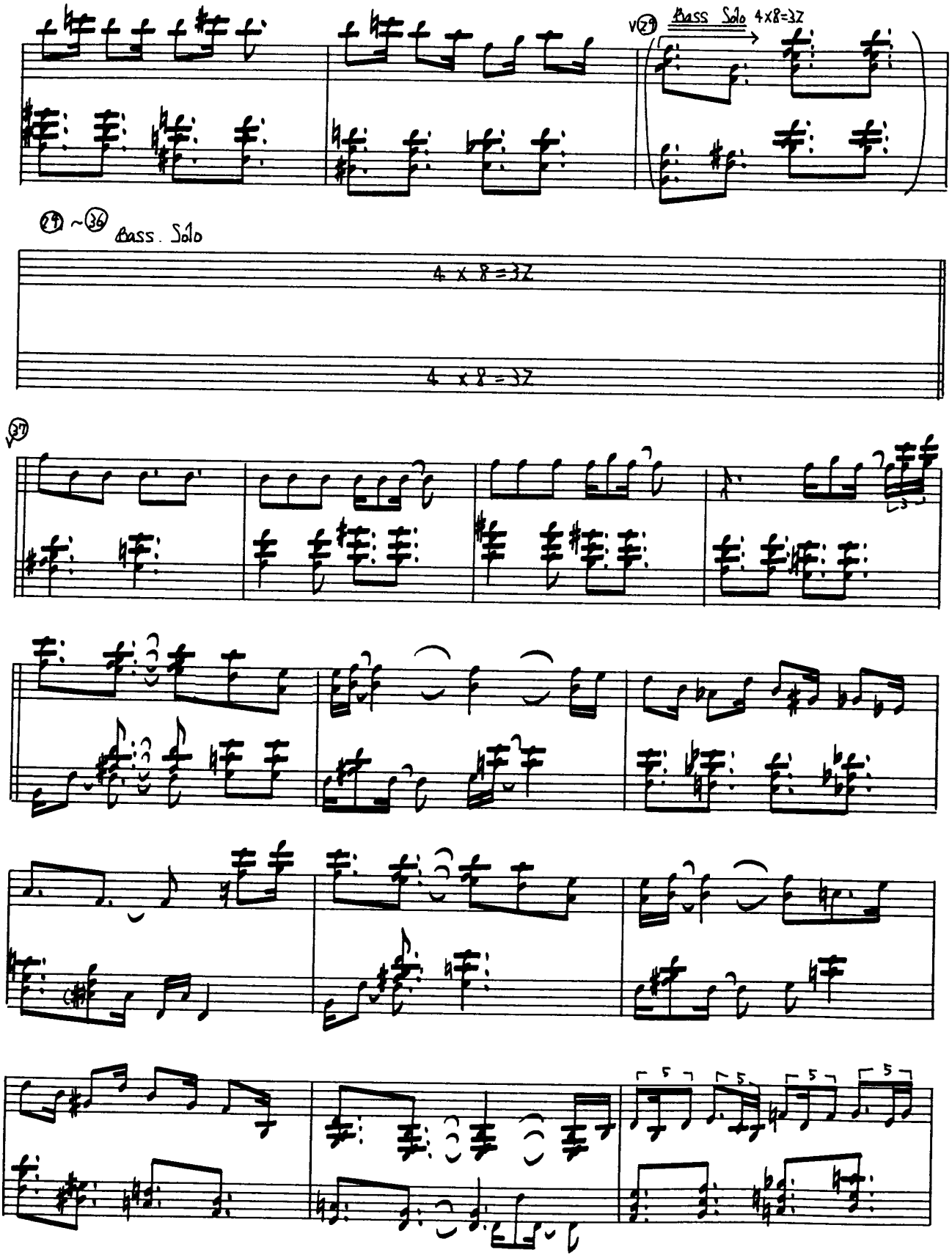

⑥
⑦
8va
⑧
⑨
⑩

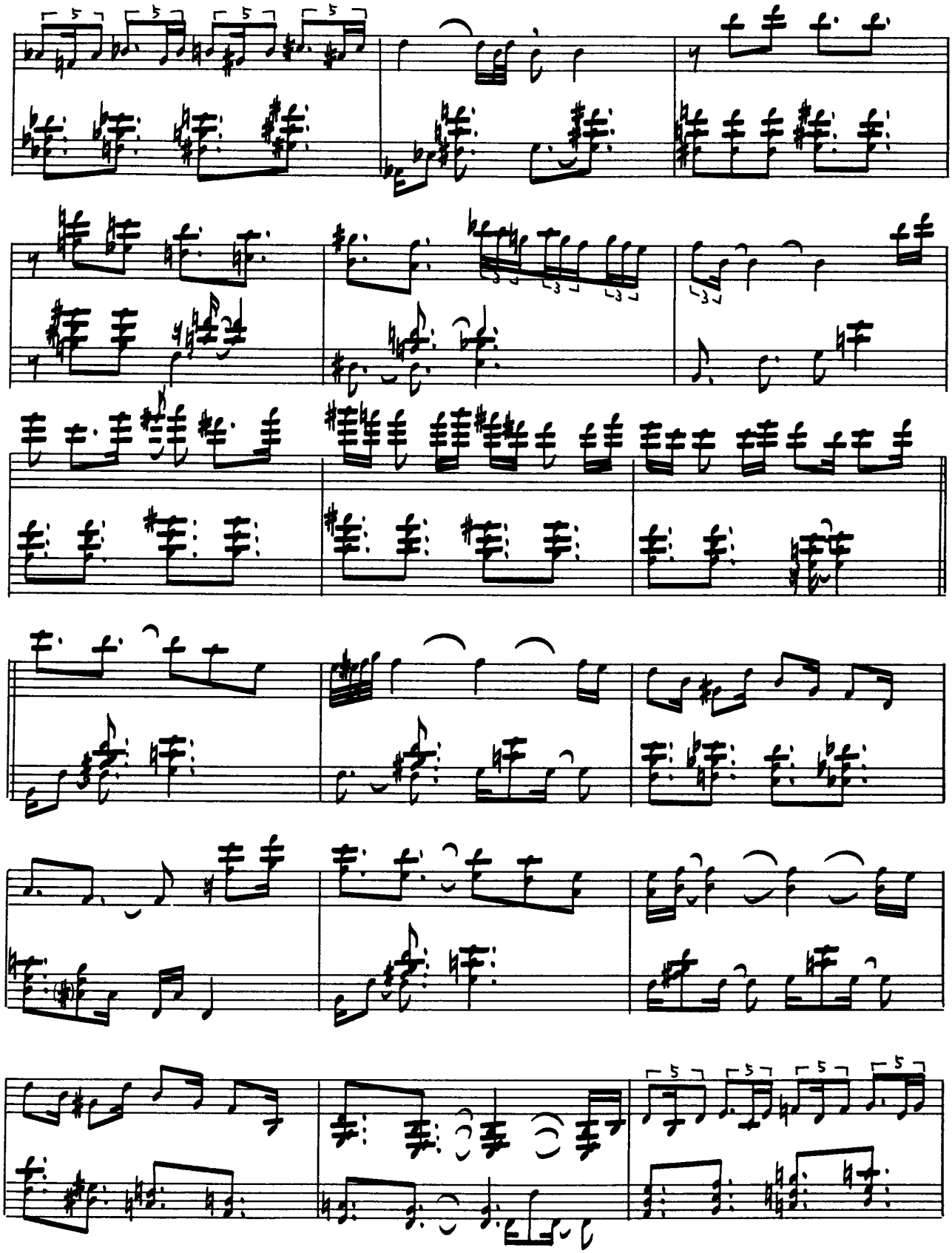

8va
8va...
8va
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮

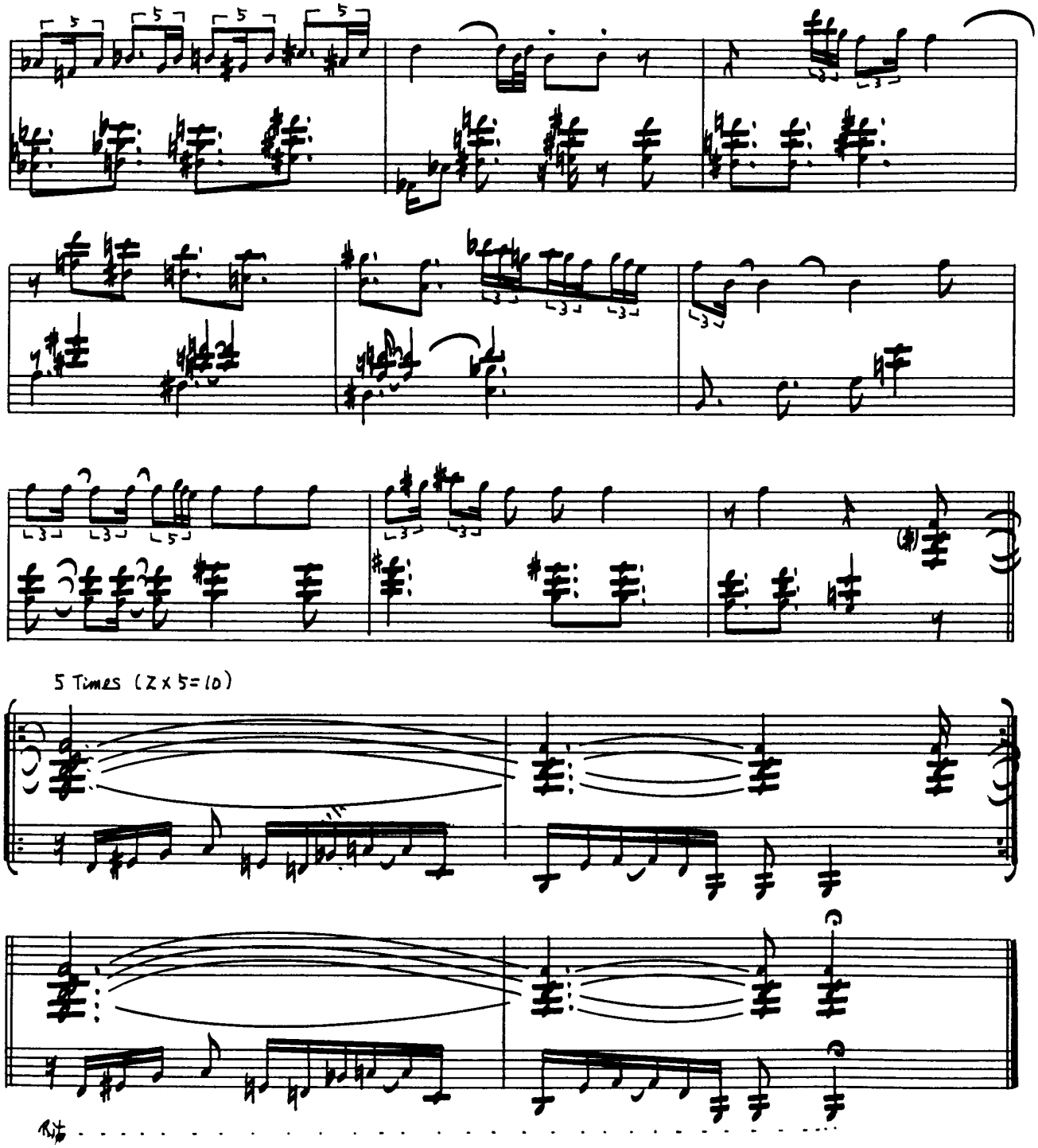

16
8va
17
8va
18
19


8va
20
21
8va
22
23


24
25
26
8va
27
28


Bass Solo 4x8=32
29 ~ 36 Bass. Solo
4 x 8 = 32
4 x 8 = 32
37




5 Times (2 x 5=10)

Noon Song

ヌーン・ソング　by CHICK COREA

IMPROVISATION ADVICE

Dメジャーのピアノ・ソロである。メロディー各音の長さ、音程、強弱、音質などに注意して、演奏者の意図を想像して弾いてほしい。

最近の新主流派のピアニストがおさえる左手のコード・フォームは、昔のスタイルと多少異なり、4度音程の積み重ねがよく使われる。たとえば、この曲のD△ではEx.1のように押えている。

こういう場合は3音で構成されるのが普通である。

EmではEx.2のように押えている。

しかし、この押え方は、ルートまたはベース音の動きによって色々と解釈することができる。Ex.2の場合、ベースがG音を弾くとG△$^{(9)}_{(6)}$になり、A音を弾くとA7SUS4、またはA△SUS4とも解釈することができる。

この曲ではベースがD音であるので、サブドミナントとしてのEm7と考えればよい。

ドミナント・7thでの左手のフォームは、Ex.3のように押えられている。これも4度の積み重ねと解釈してよい。

F♯7では、曲の流れからいくとD△のキーのIII7であるが、アドリブは主にミクソリディアン・スケールが使われている。

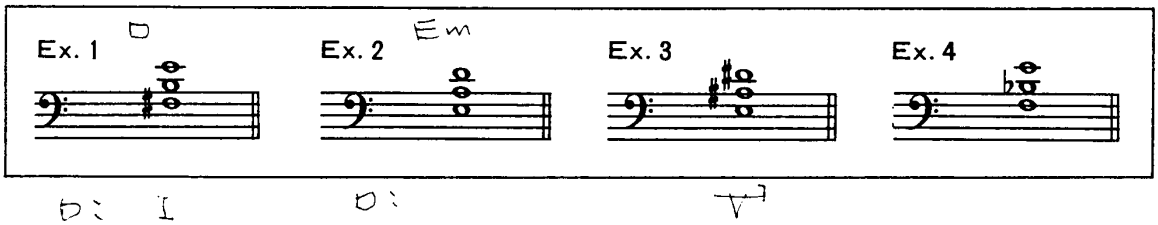
譜面Ⓐ(アドリブ参照)は、サブドミナント・マイナー・メジャー・セブンスのAベースと考えてよいだろう。このコードの響きは、Dに対するドミナントの要素を持っている。

譜面Ⓑは、F♯ミクソリディアンのスケールでダイアトニックに動いている。

最後の部分でF△が続くが、そのコードの中でEx.4のように押えているのはF△に対するサブドミナント機能としてのB♭△7^{+11}のサウンドである。

この曲を練習する場合、左手の和音をとりだして、その響きを聴きわけてほしい。また、和音を弾いて、どんなメロディーか声を出して歌うのもひとつの方法である。

ペダルはサウンドをにごらせないよう注意し、*rit* はあせらず各音をていねいに弾いてほしい。



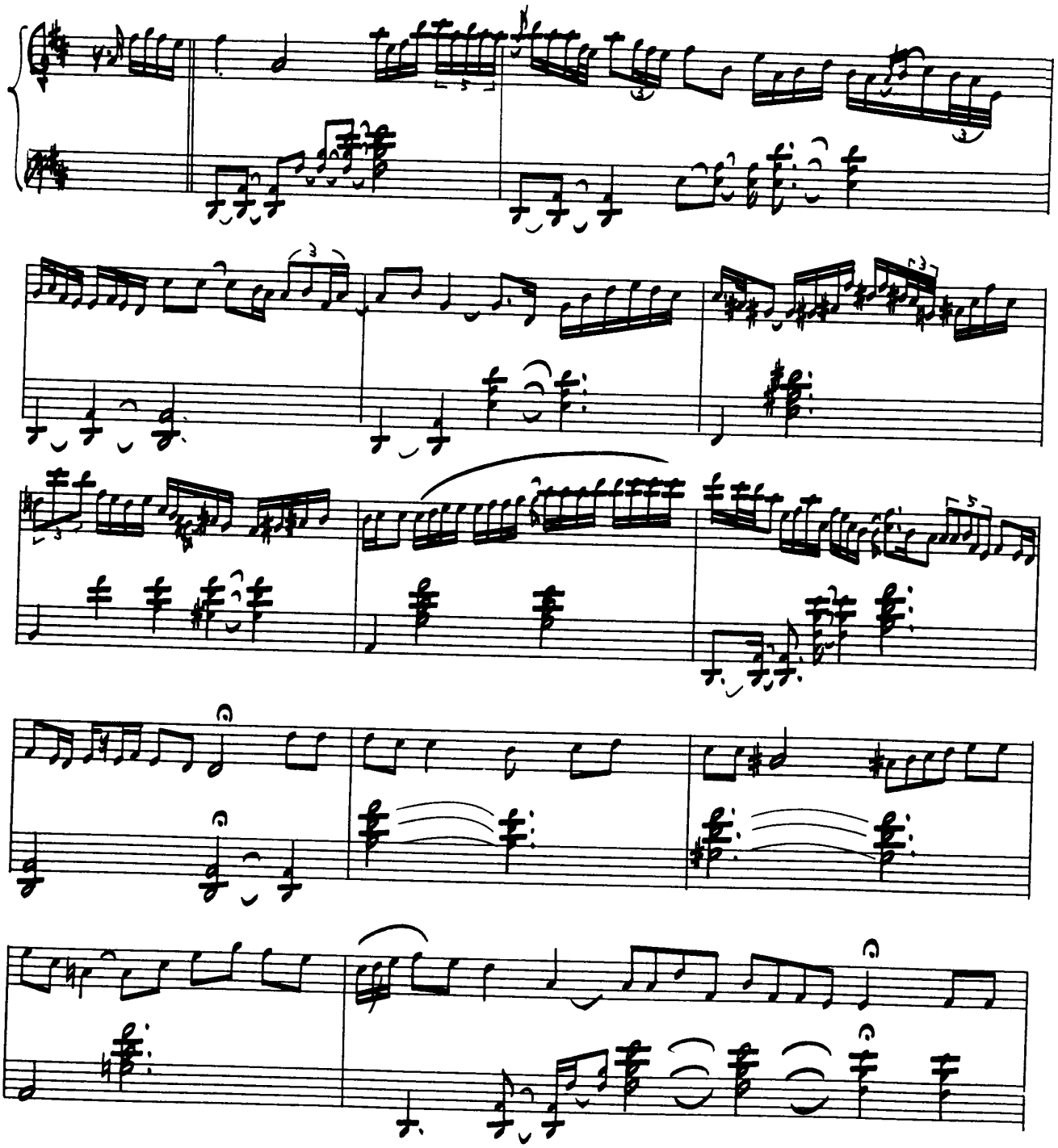
IMPROVISATION

Chick Corea (p)

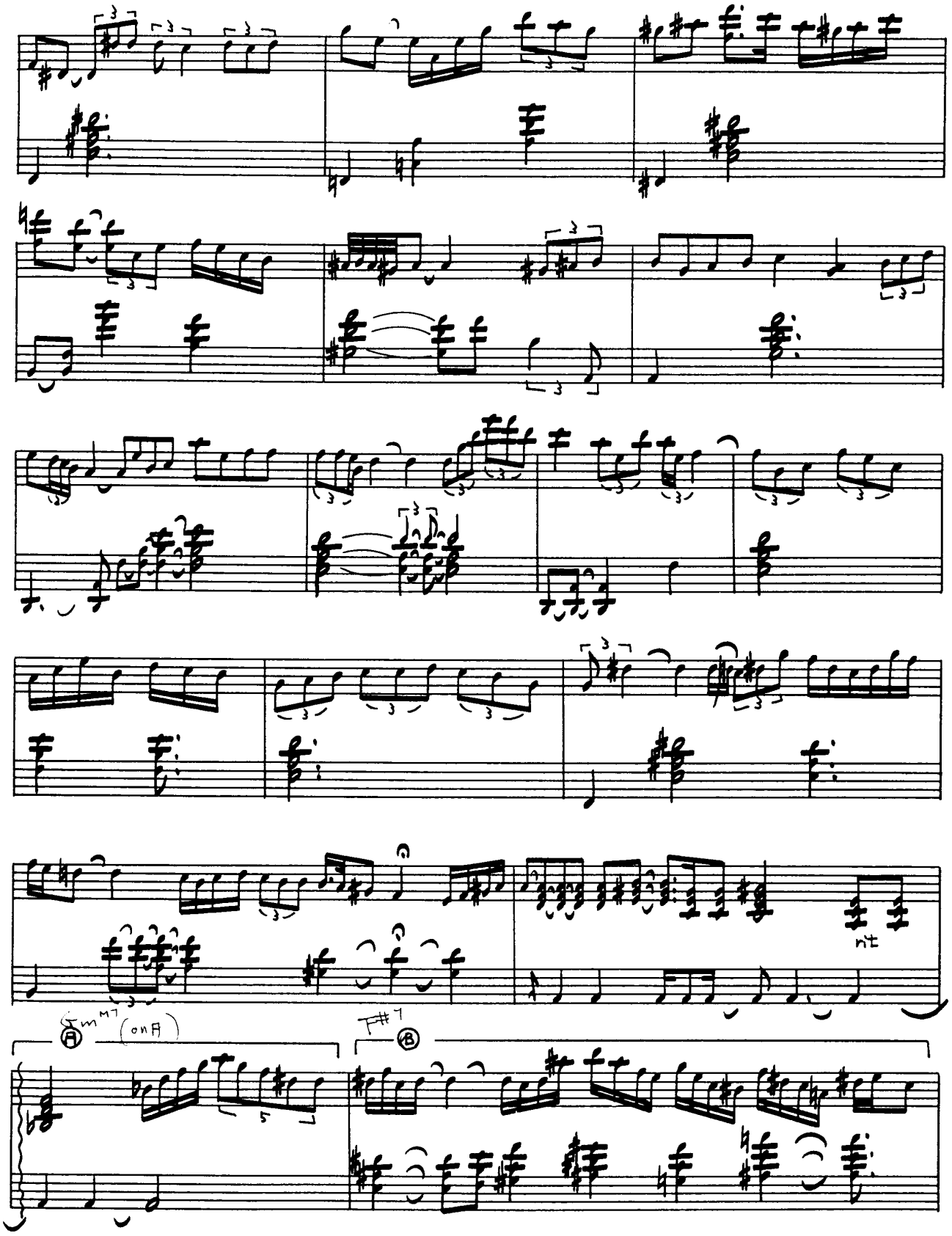
「Noon Song」

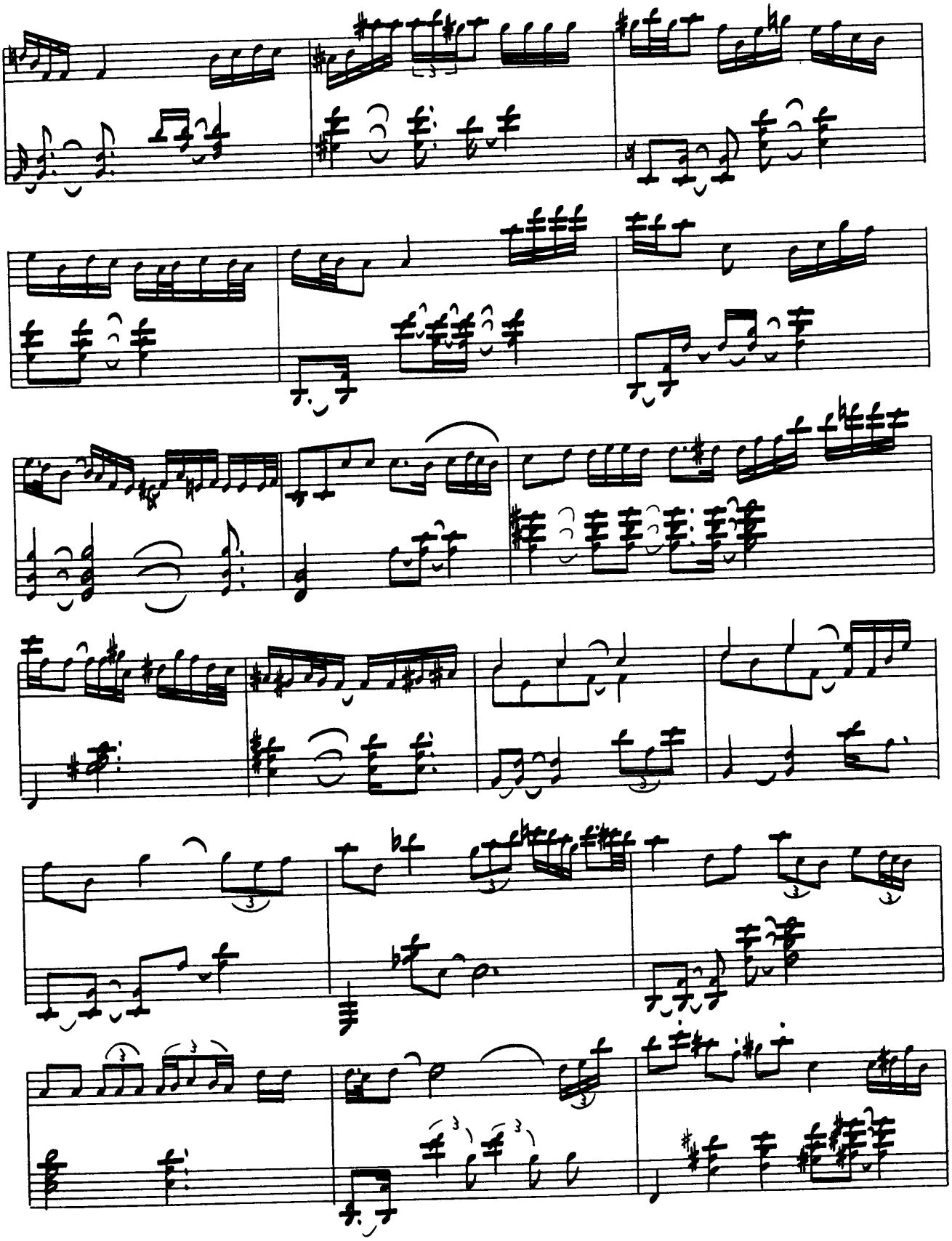
by Chick Corea

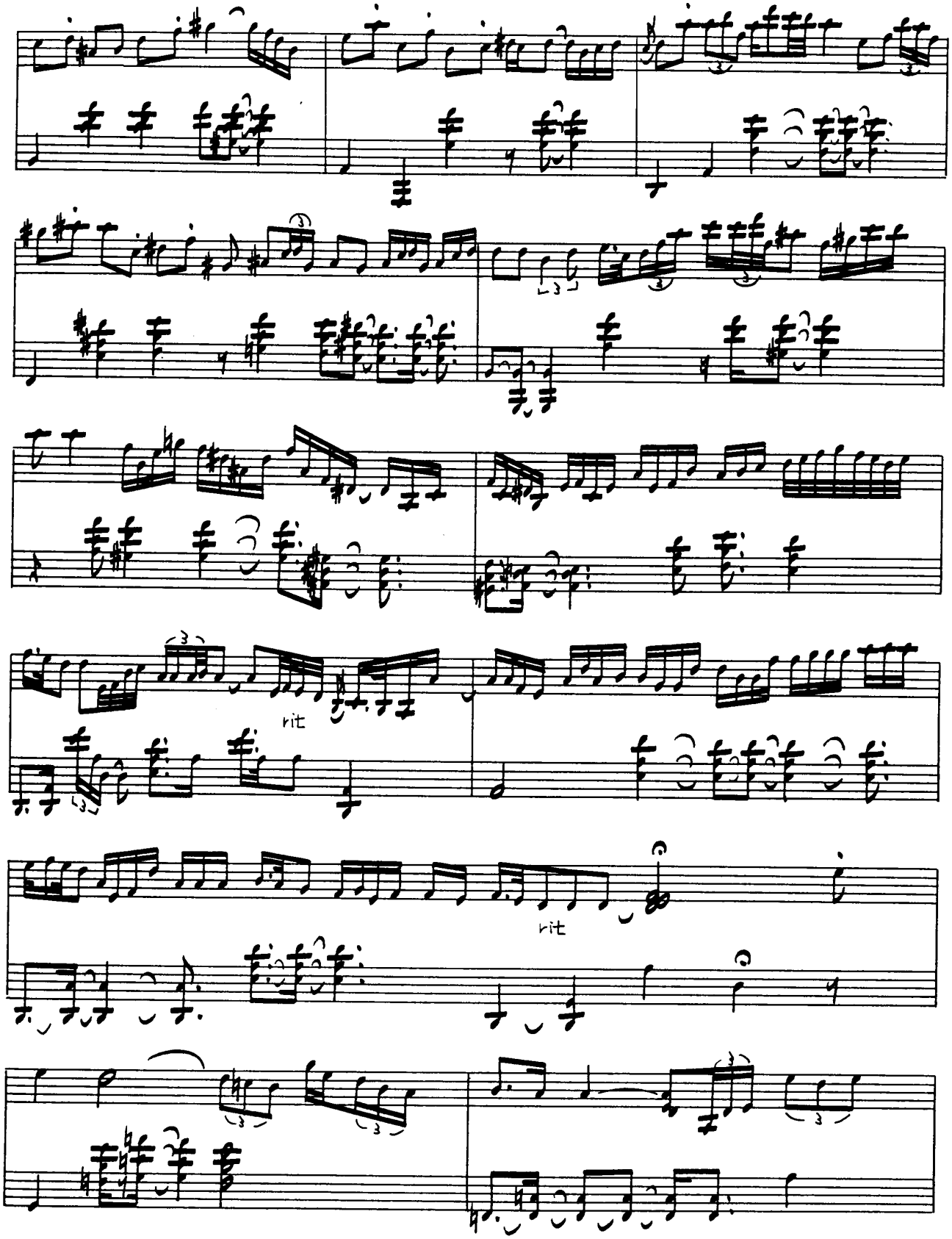
● Record:PIANO IMPROVISATIONS Vol. 1
(ECM−1014, Polydor MP−2223)

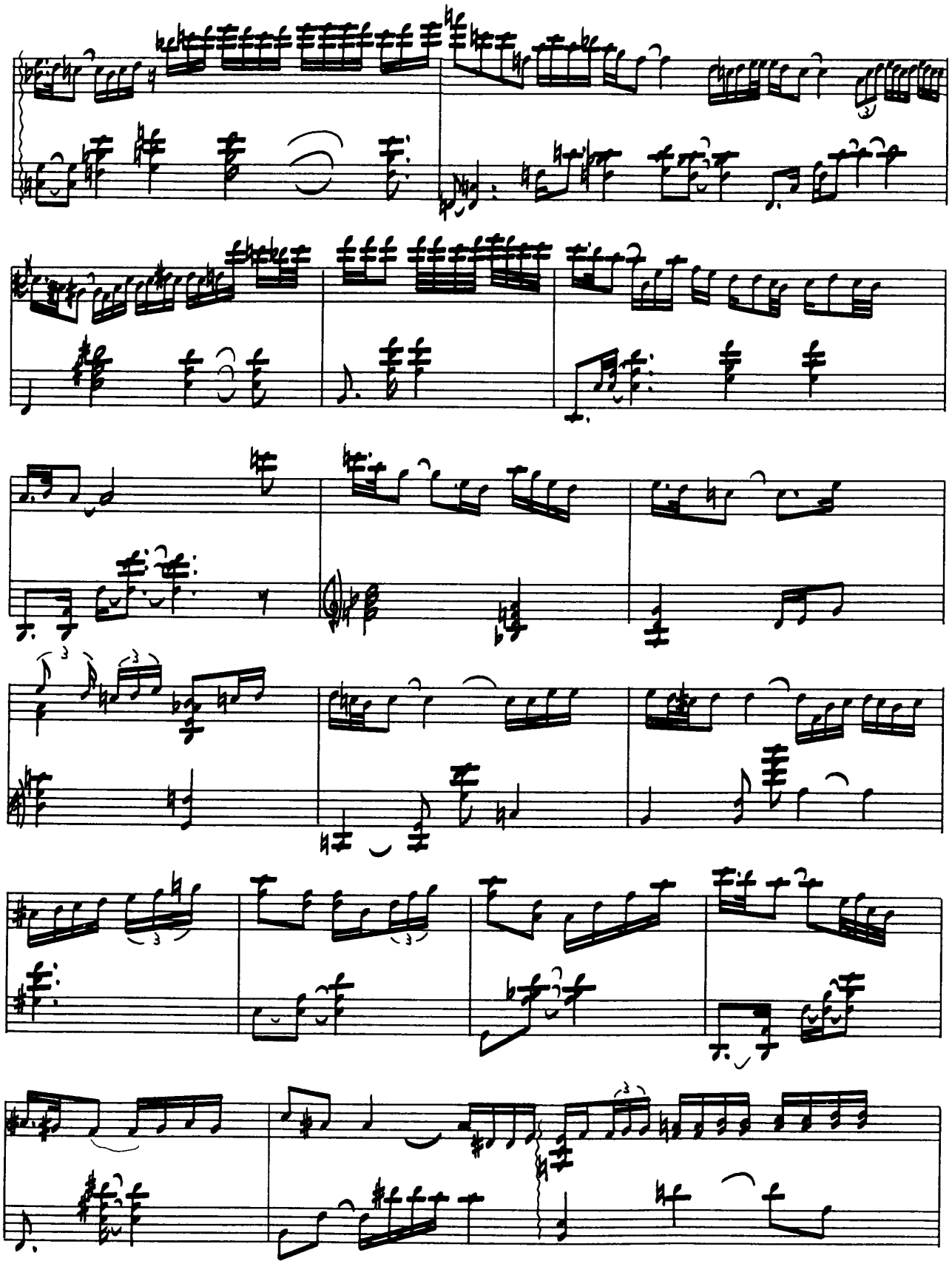


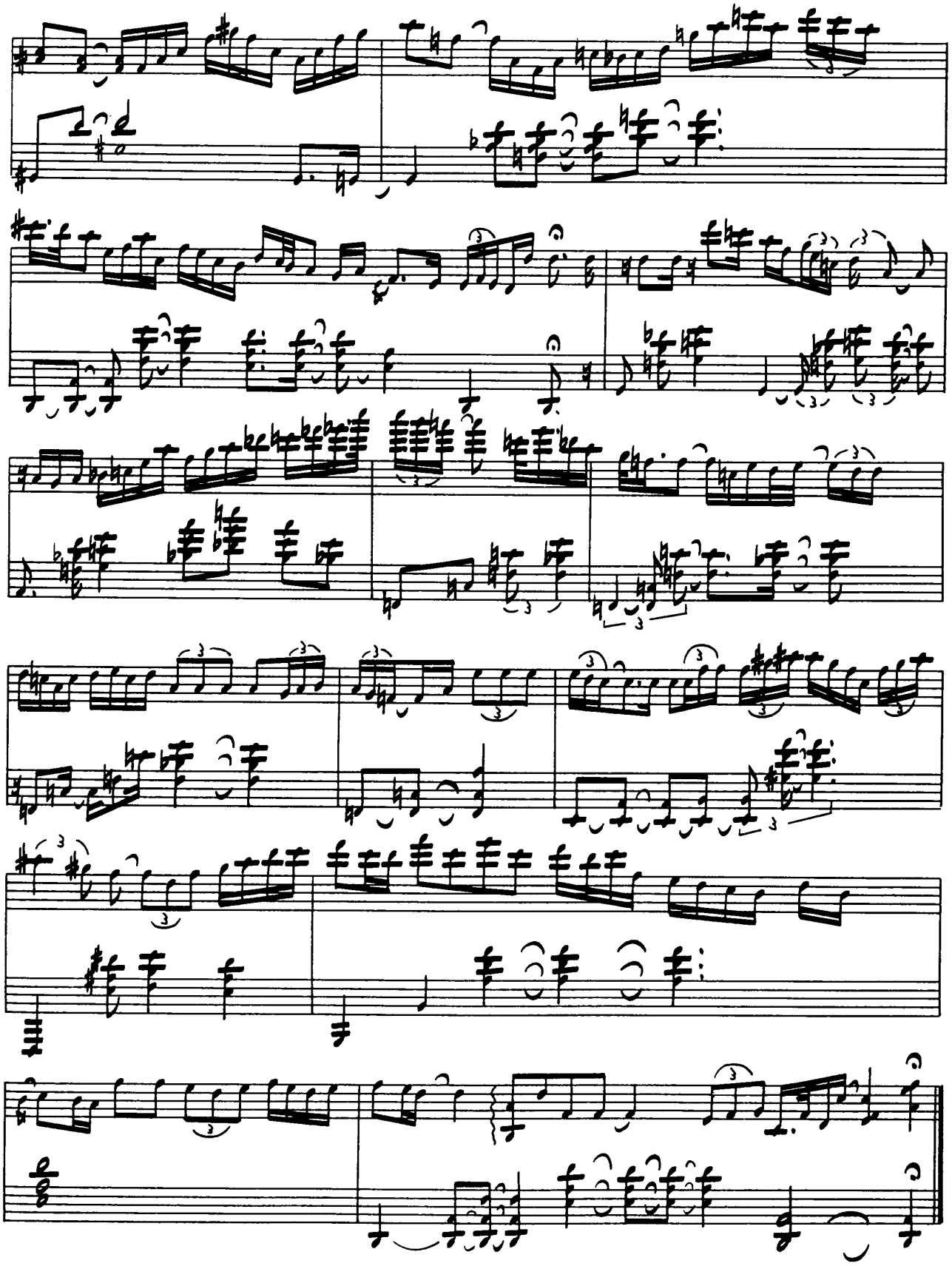
©by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.






rit
rit





五木音

Ballad For Anna

バラード・フォア・アンナ　by CHICK COREA

IMPROVISATION ADVICE

この曲も前曲に続きソロ・ピアノの演奏で、メロディーの流れがきれいなE♭マイナーのインプロヴィゼイションである。

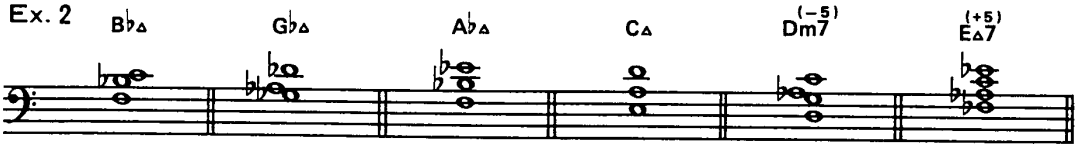
最初の5小節目までのメロディーが、この曲全体の骨組みとなるメロディーである。

Ex. 1

この曲全体をみた場合、和音進行としての流れを重視するよりは、むしろ、右手のメロディーと左手のサウンドが相互に影響し合って、微妙なニュアンスの音楽が生まれていると考えた方がよいだろう。

この曲でも、4度の積み重ねなど、変化に富んだ3声、4声の和音がみられる。

Ex. 2



練習する場合はテンポにこだわらず、流れを大事に弾くことを心掛けてほしい。

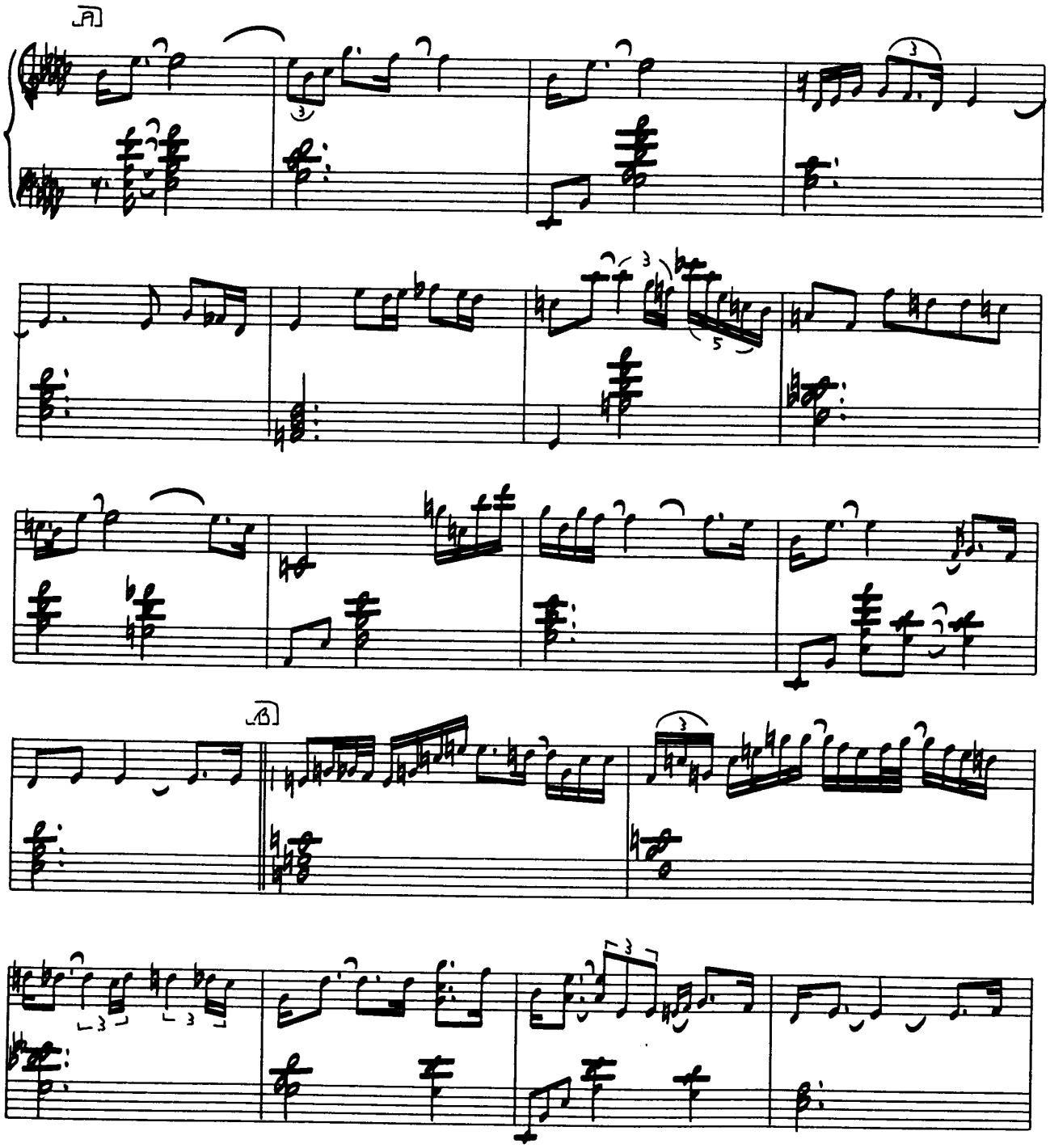
IMPROVISATION

Chick Cores (p)

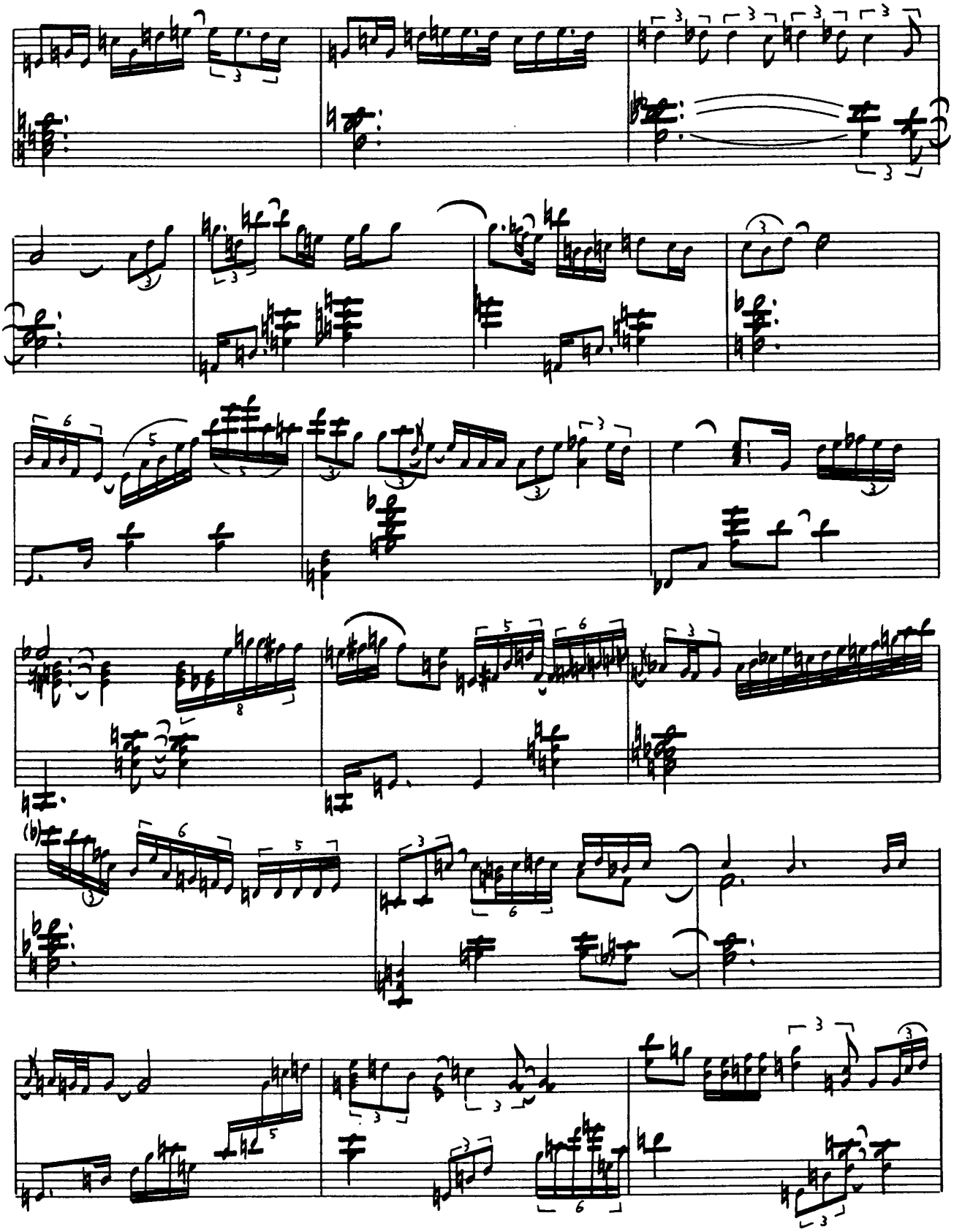
「Ballad For Anna」

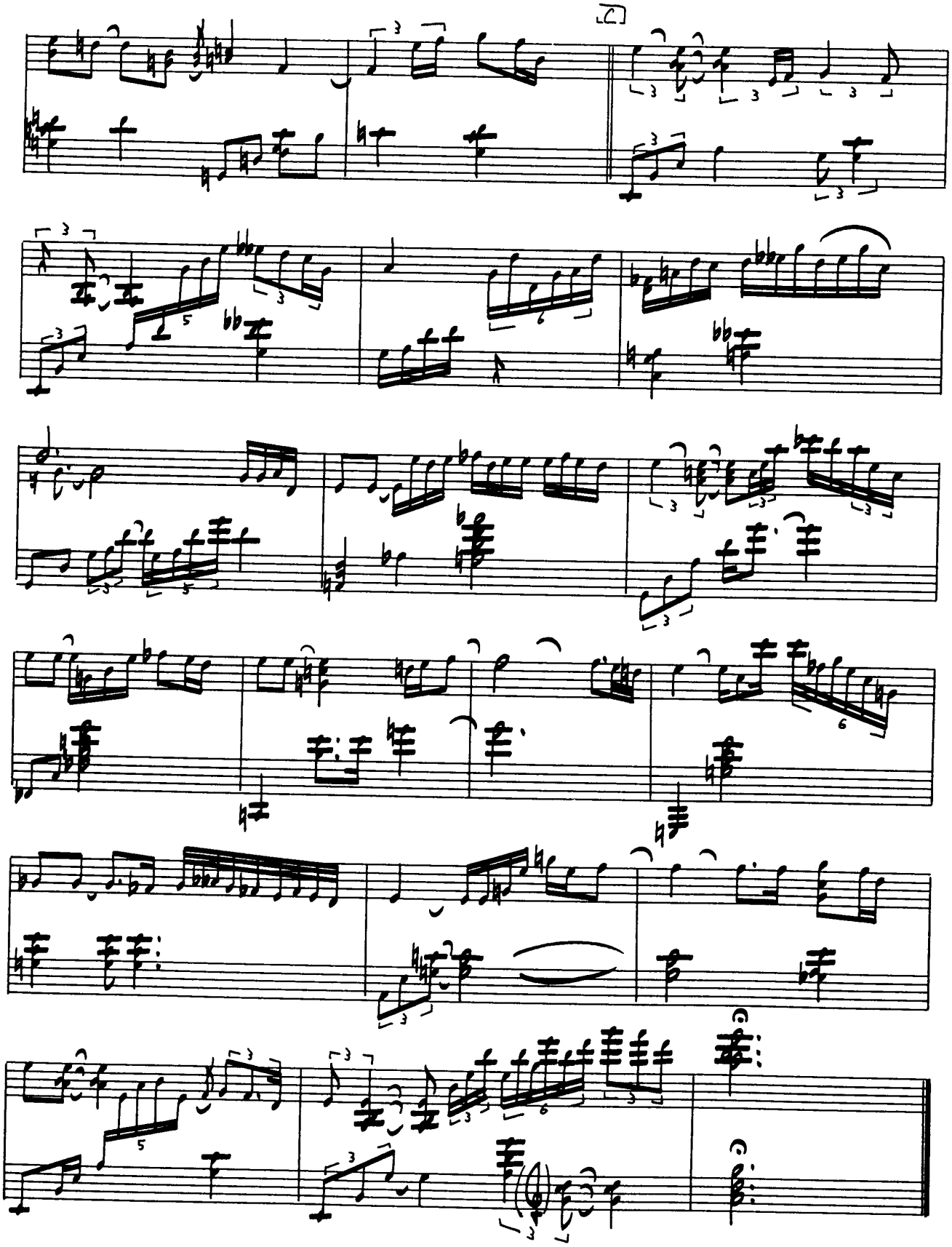
● Record:PIANO IMPROVISATIONS Vol. 1
(ECM−1014, Polydor MP−2223)

by Chick Corea



©by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.





Sometime Ago

サムタイム・アゴー　by CHICK COREA

IMPROVISATION ADVICE

シンプルなラテン・ロック調の曲である。

テーマのメロディーは6度のインターバルを中心としたハーモナイズがしてあって、キュートな感じがでている。

AメジャーからAマイナーに転調する部分は効果的にできているので、その雰囲気をよくつかんでほしい。

この曲の特徴となっている点は、左手で繰返されるリズム(♩. ♪♩ ♩)が右手のメロディーを浮き上がらせていい効果を出していることで、これがこの曲全体のリズムの骨組みにもなっている。また、アドリブ中では、リズミックなフィル・インで4度と全音の組み合わせの和音が多いのが特徴である。そして、2オクターブのユニゾン・ハーモニーが、シンプルなサウンド・カラーとなっている。練習する場合、できるだけふたつの音がひとつになるよう心掛けるように。途中に出てくる左手と右手の交差した3連符の弾き方は注意してほしい。

余裕のある人は、テーマのメロディーを6度、3度、トライアッド、2オクターブを使ってハーモナイズしてみよう。

アドリブではAmが中心にインプロヴィゼイションが行なわれているが、この曲で使われるアヴェイラヴル・ノート・スケールを次に示す。

A△7 → A Ionian Scale

D△7 (on A) → D Ionian Scale

Am → A Aeorian Scale

※Am+5 (Dm(on A)) → A Aeorian Scale

※このコードは、トニックAmに対してサブドミナントの機能を持ったコードである。

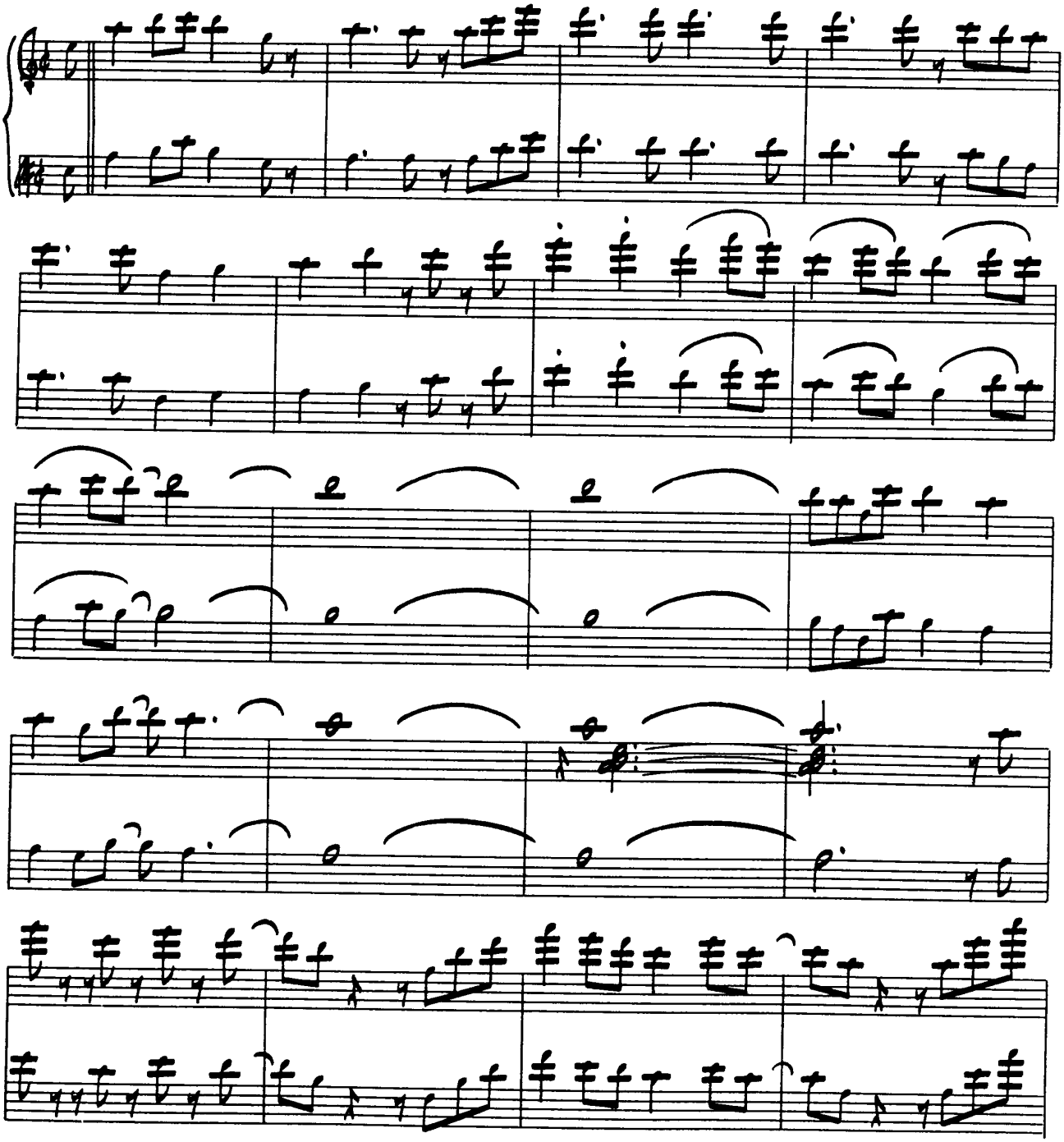
IMPROVISATION

「Sometime Ago」

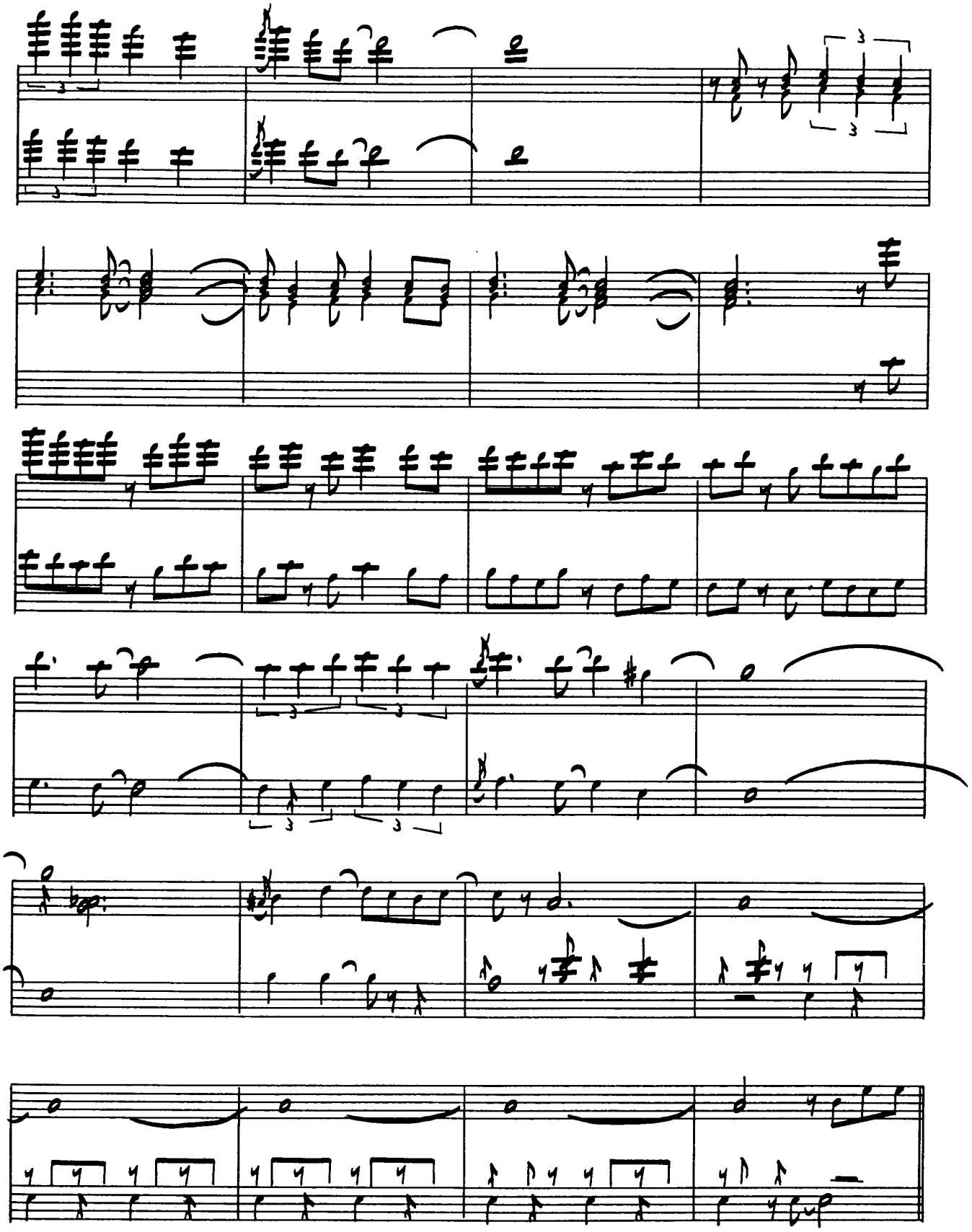
by Chick Corea

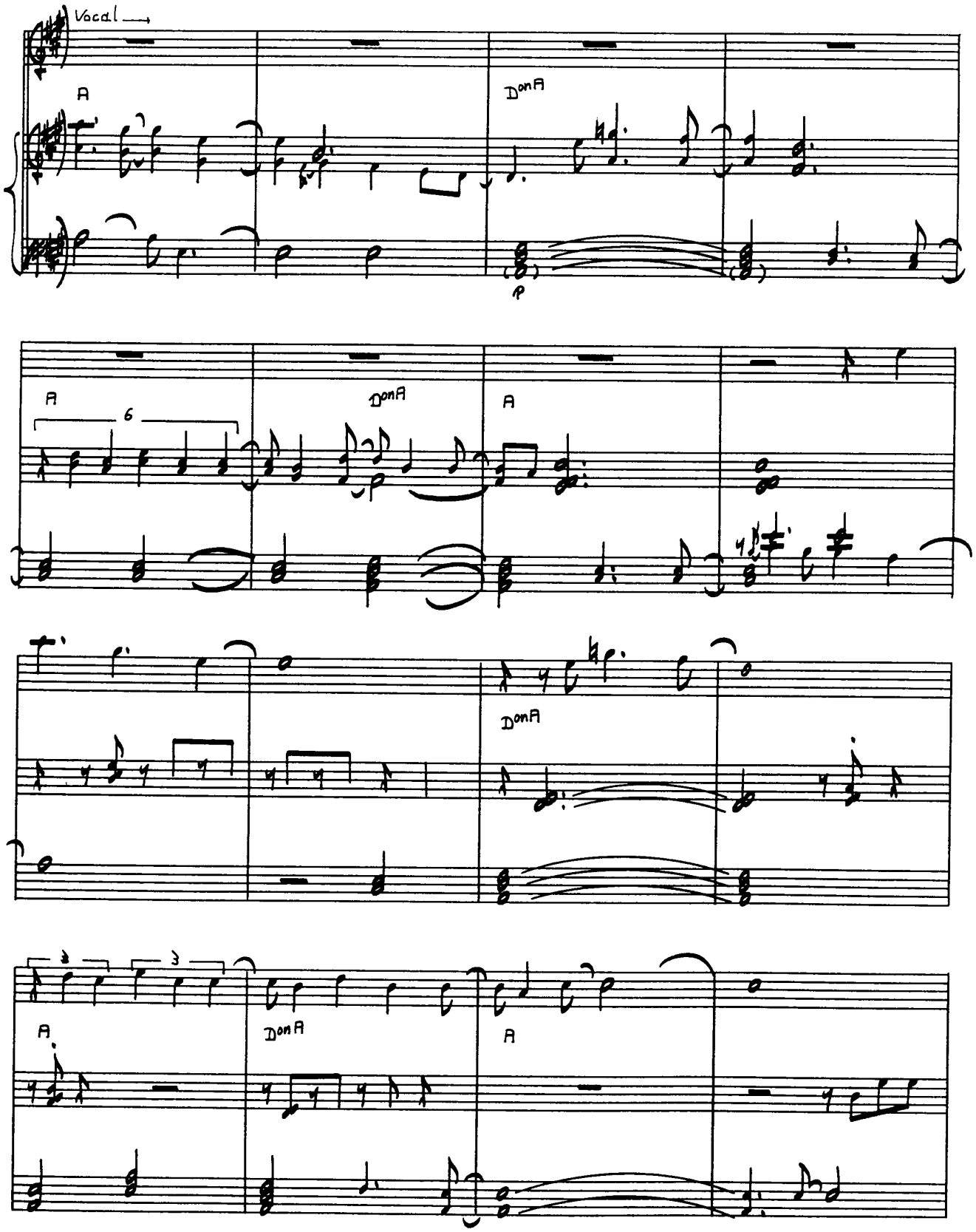
Chick Corea (el-p)
Joe Farrell (fl, ss)
Flora Purim (vcl, perc)
Stanley Clarke (b)
Airto Moreila (perc)

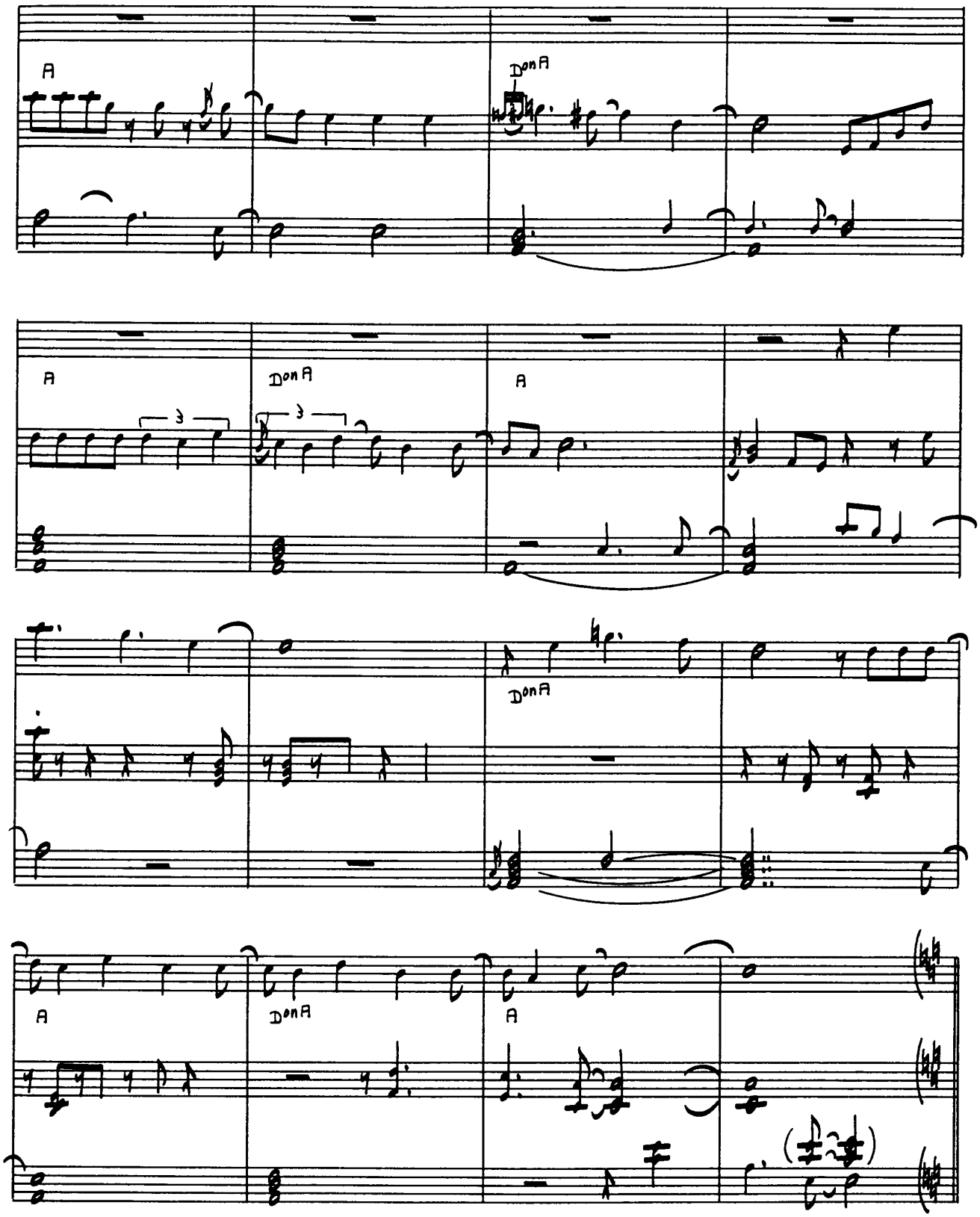
● Record: RETURN TO FOREVER/CHICK COREA
(ECM–1022, Polydor MPF–1136)
Date: Feb. 2nd–3rd 1972

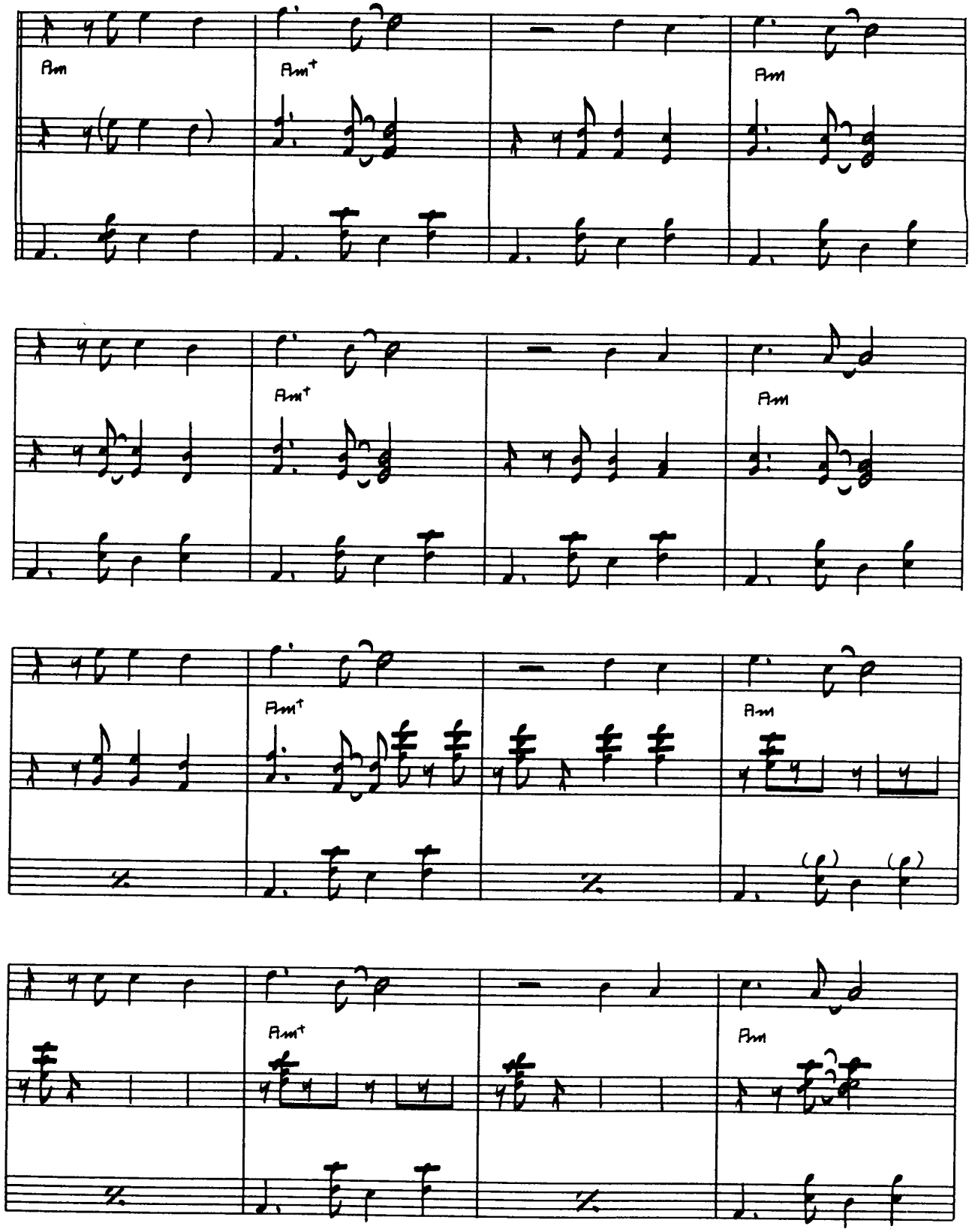


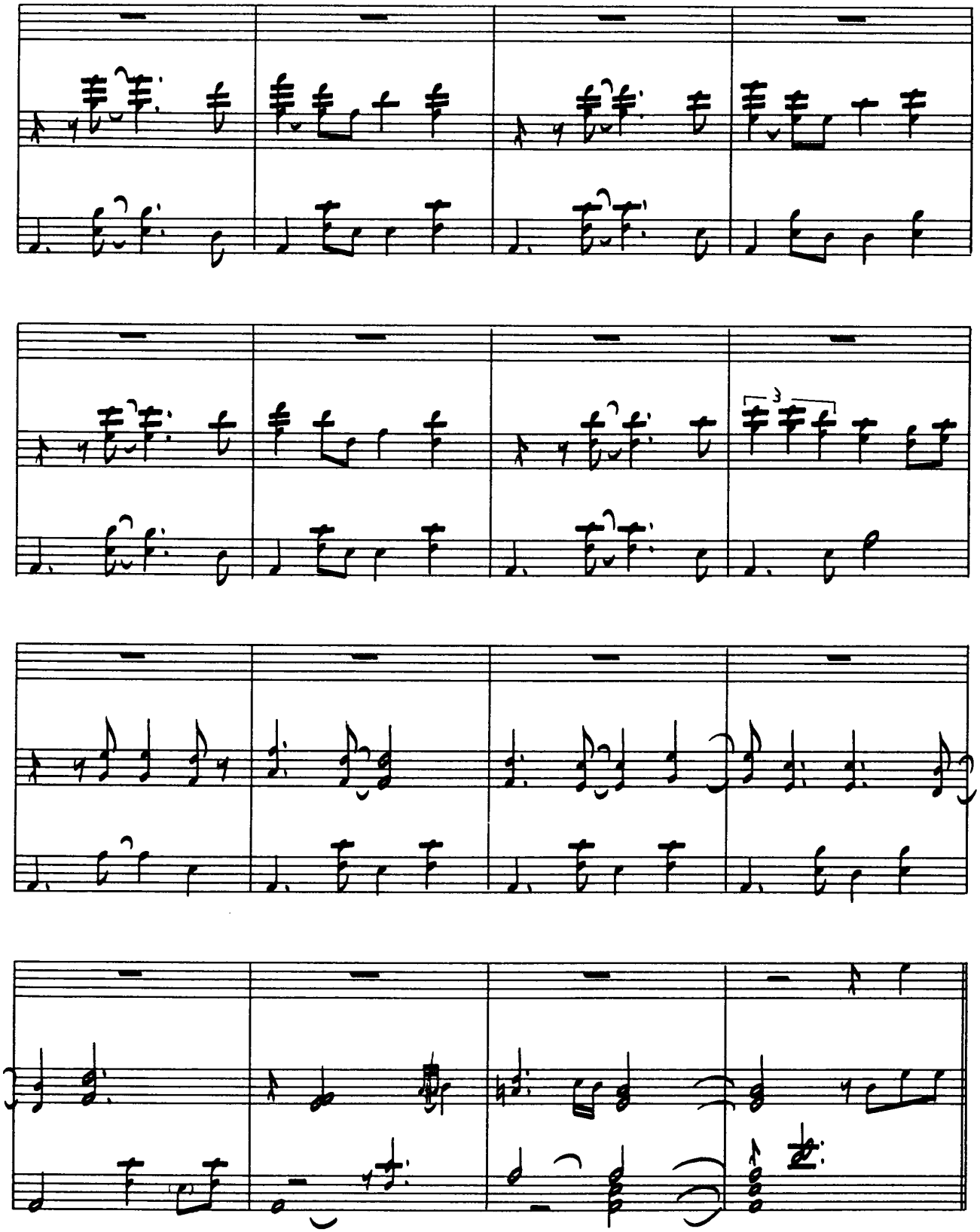
© by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.

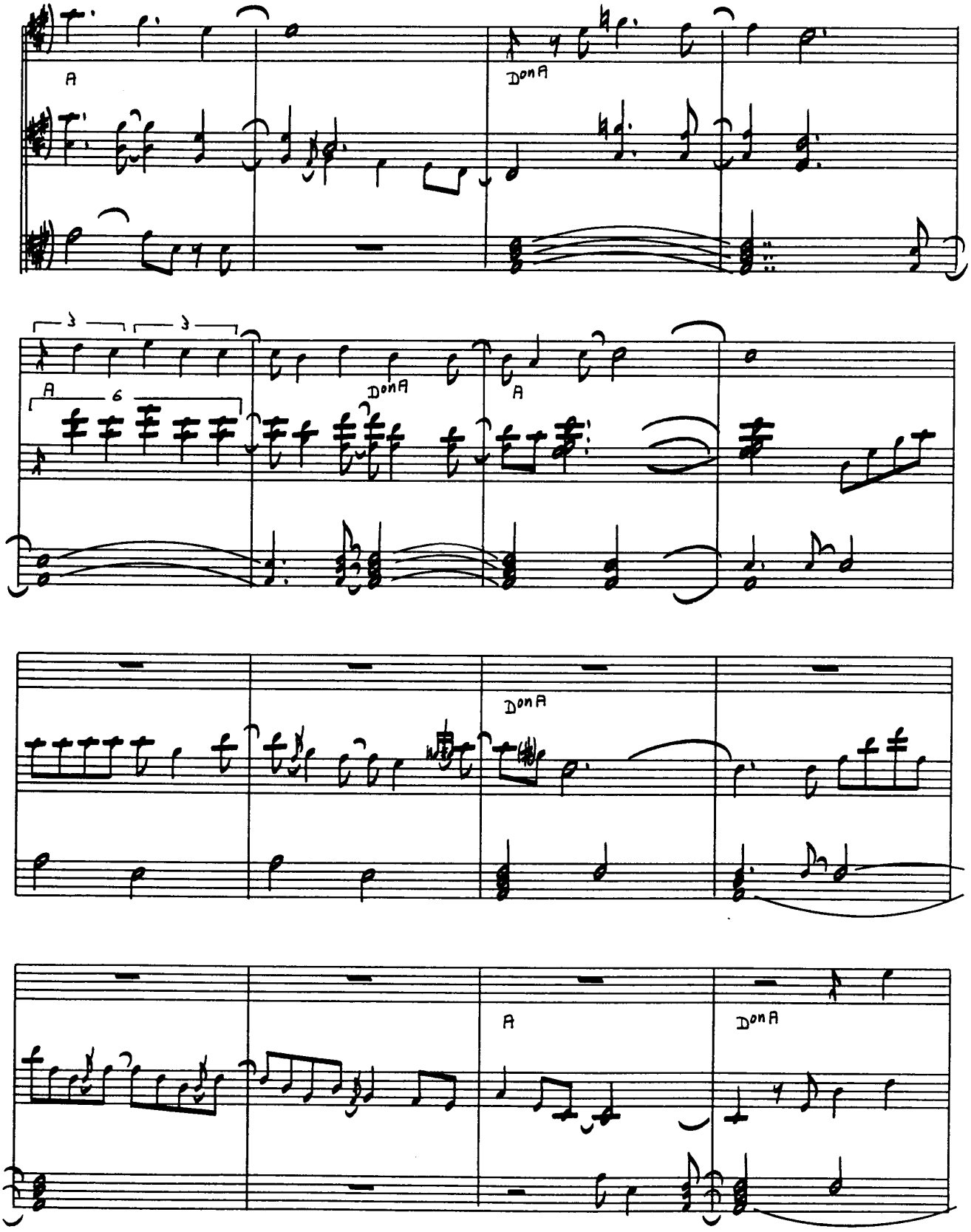


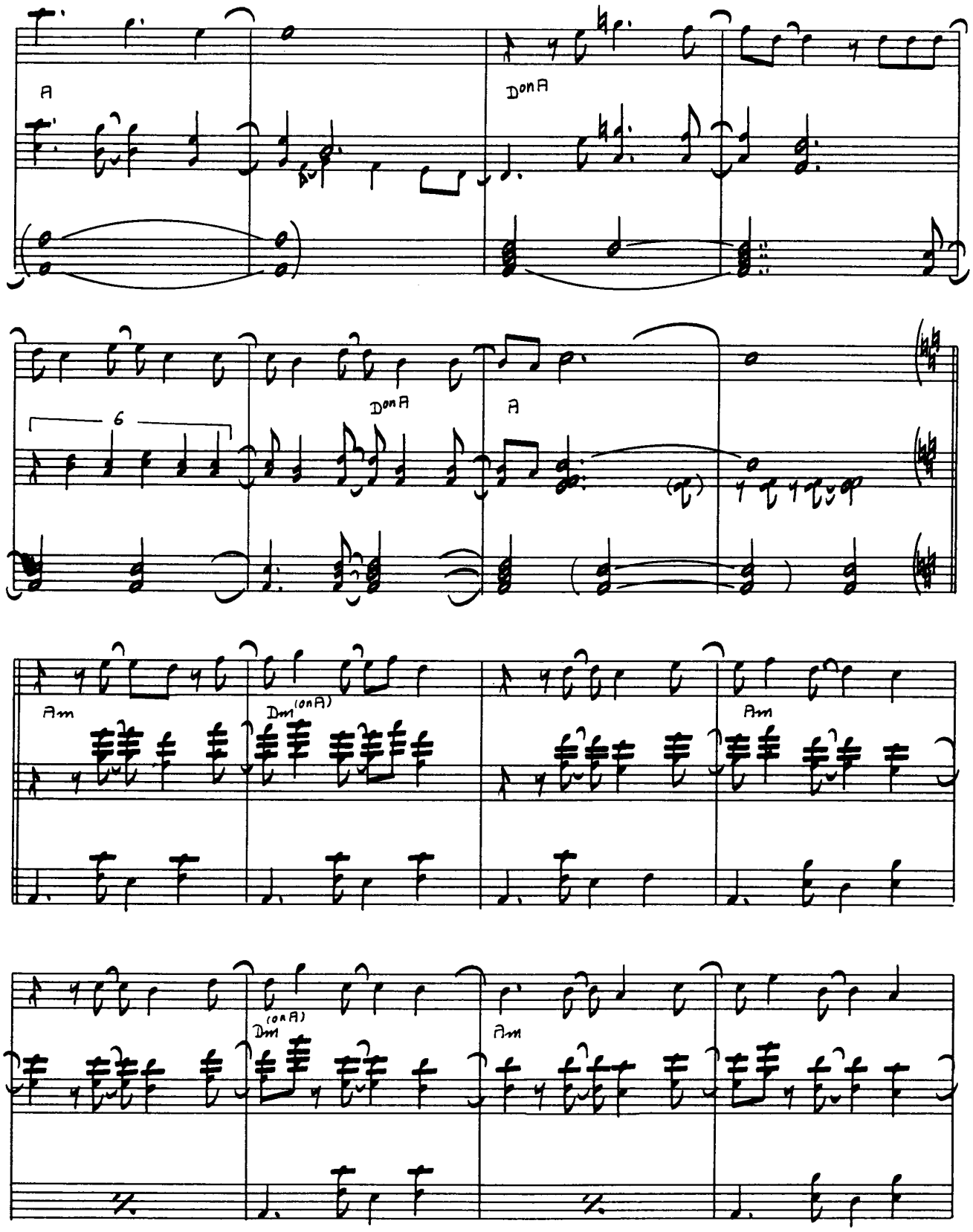

Vocal
A
DonA
p
A
6
DonA
A
DonA
A
DonA
A

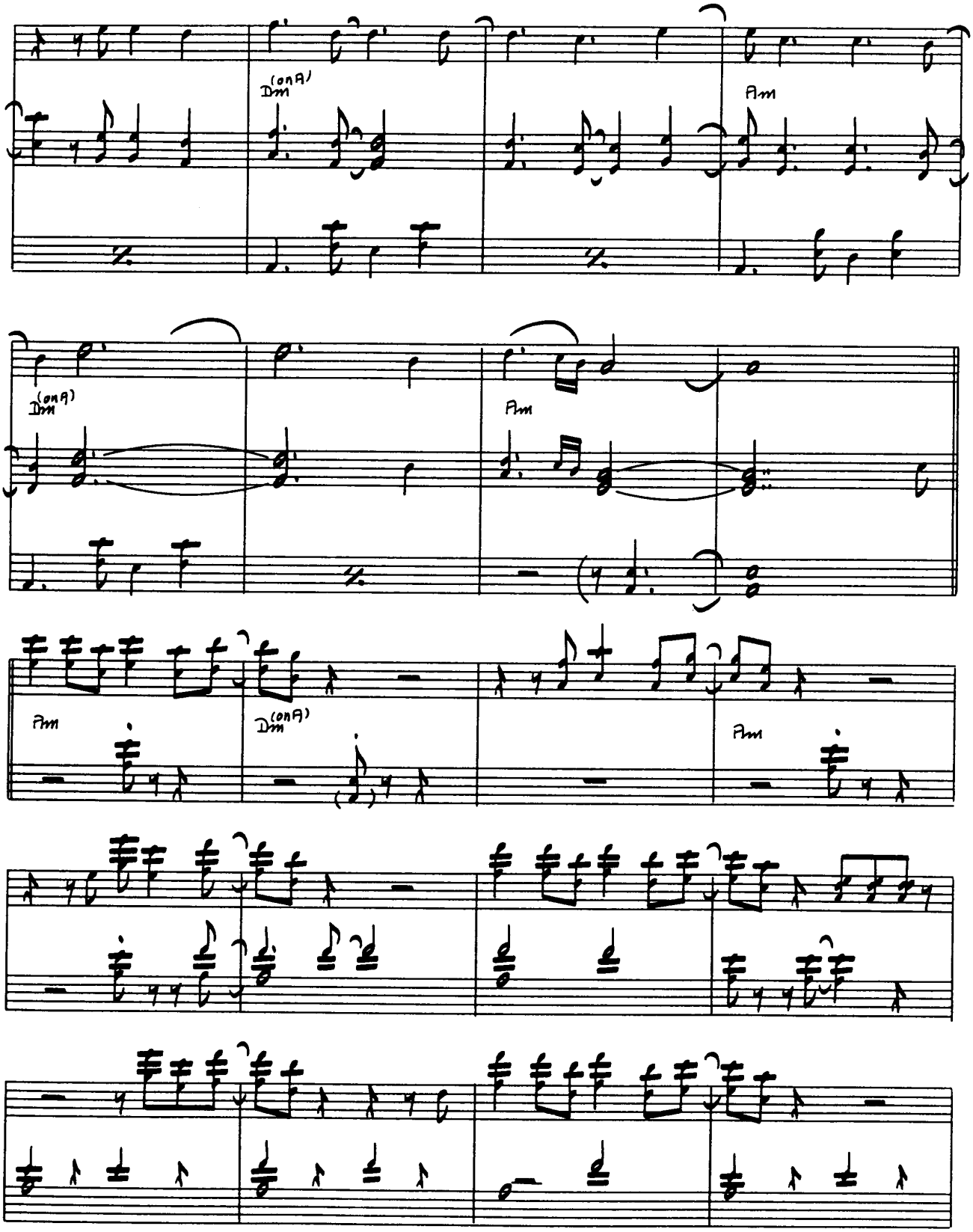

A
Don A
A
Don A
A
Don A
A
Don A
A

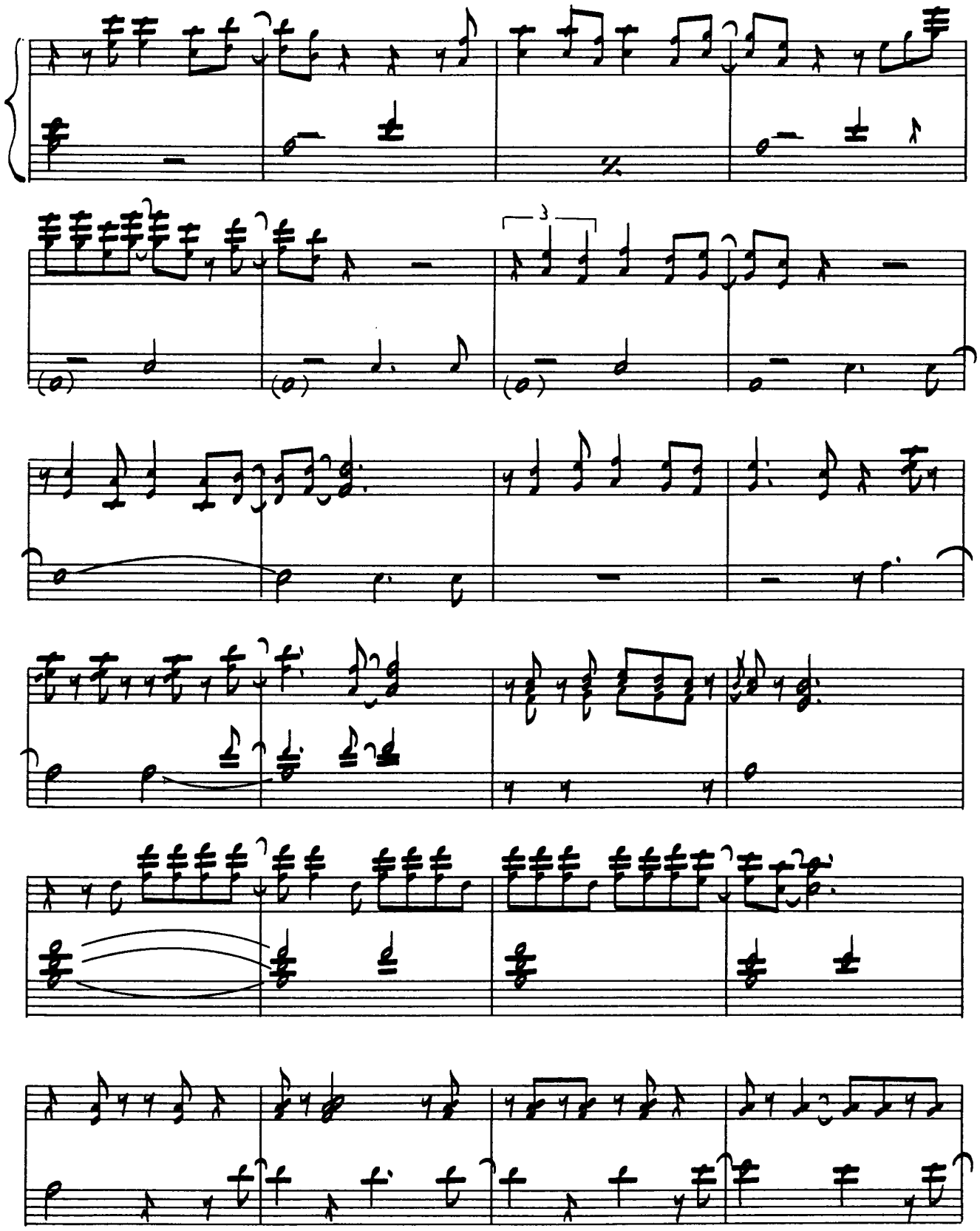

Am
Am+
Am
Am+
Am
Am+
Am
Am+
Am

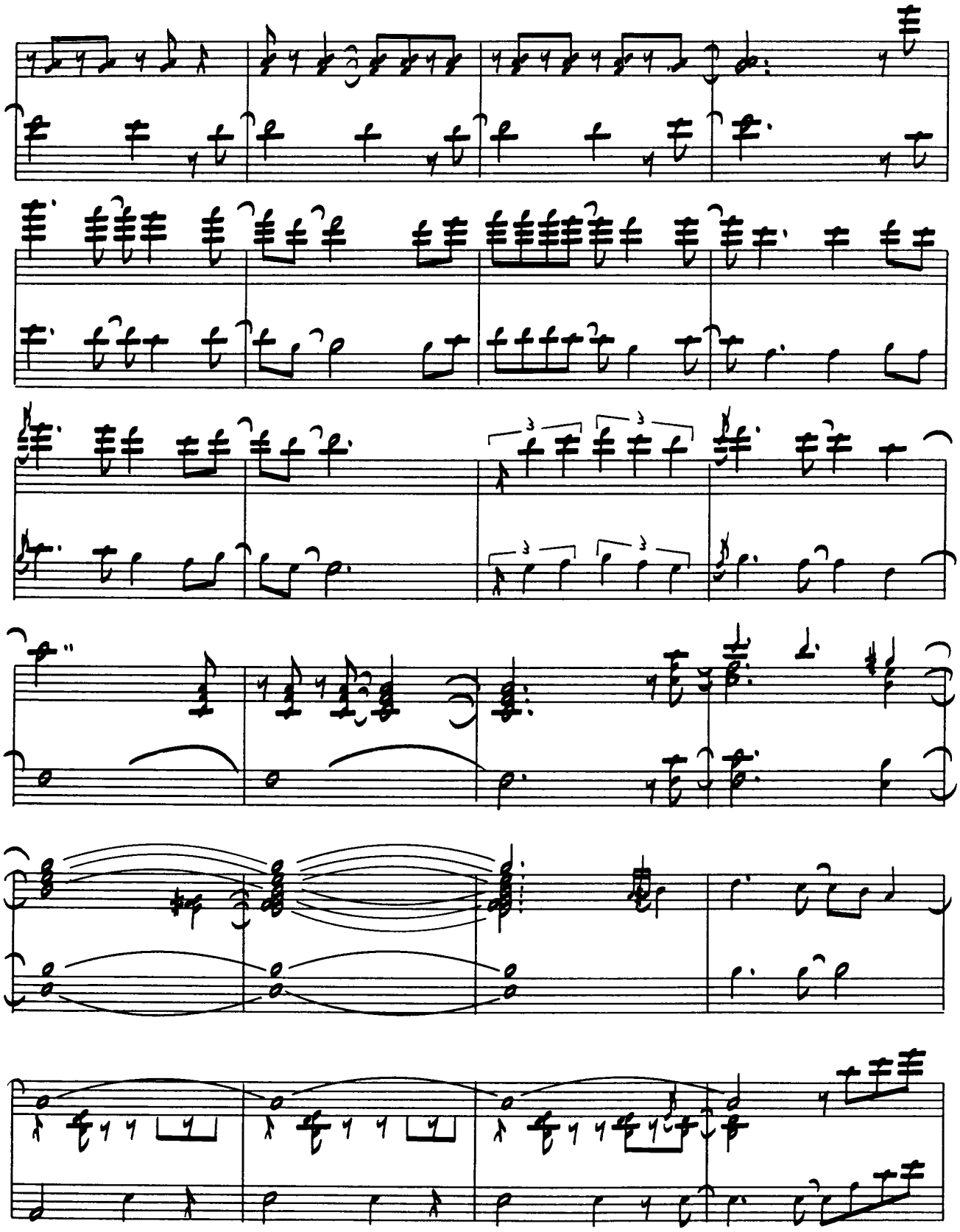


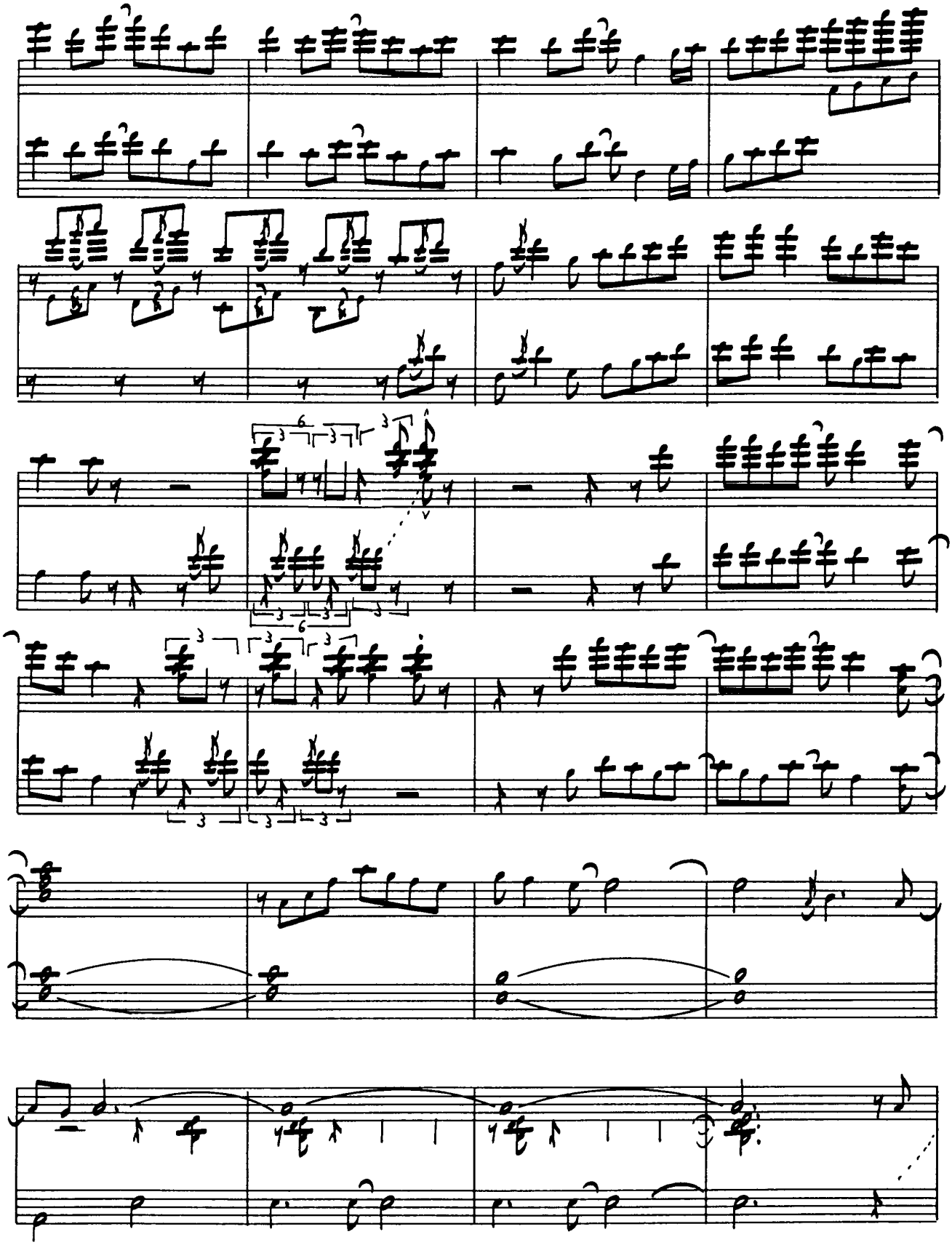

A
D on A
A
D on A
A
D on A
A
D on A

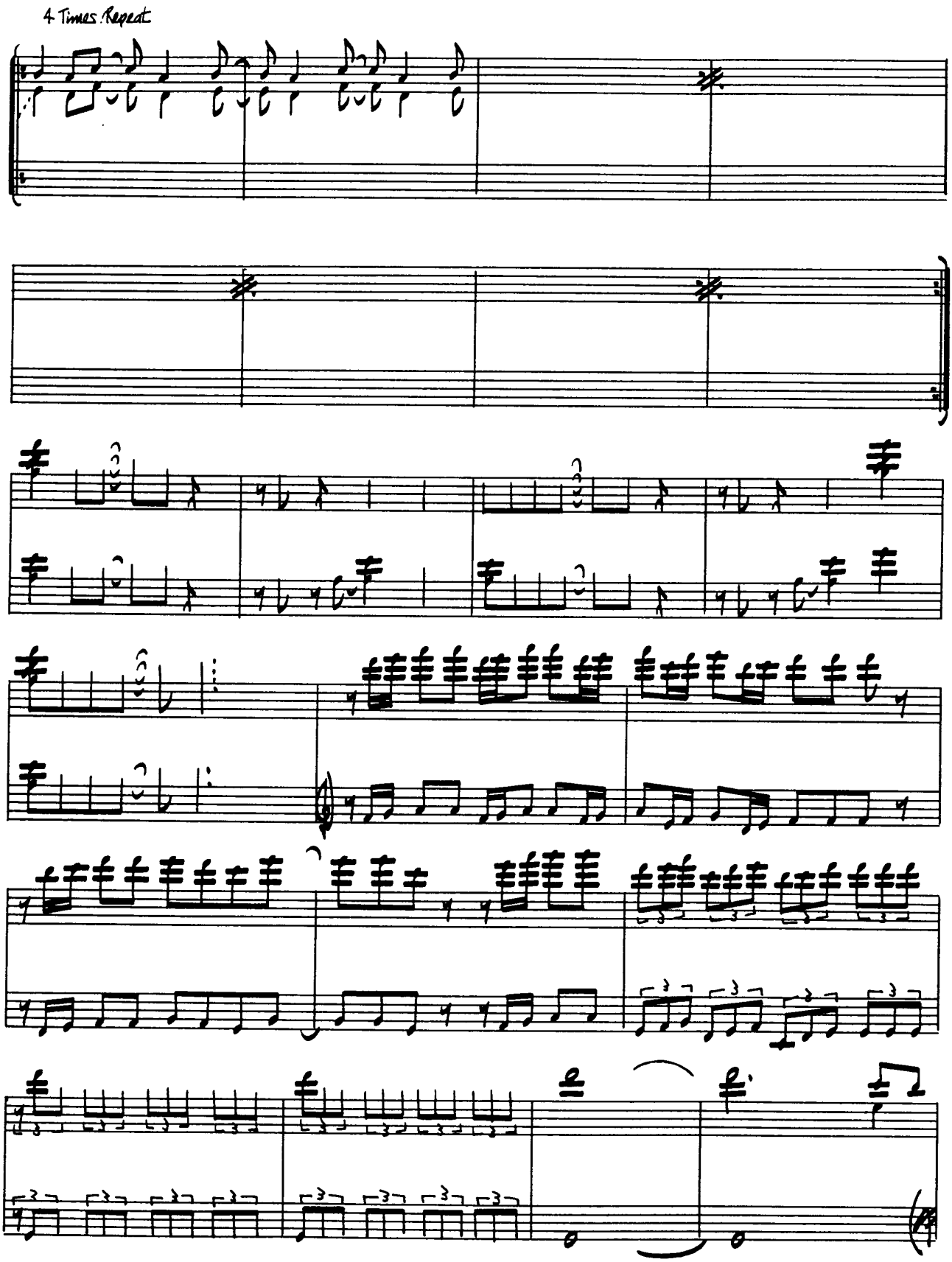

A
D on A
6
D on A
A
Am
Dm (on A)
Am
Dm (on A)
Am

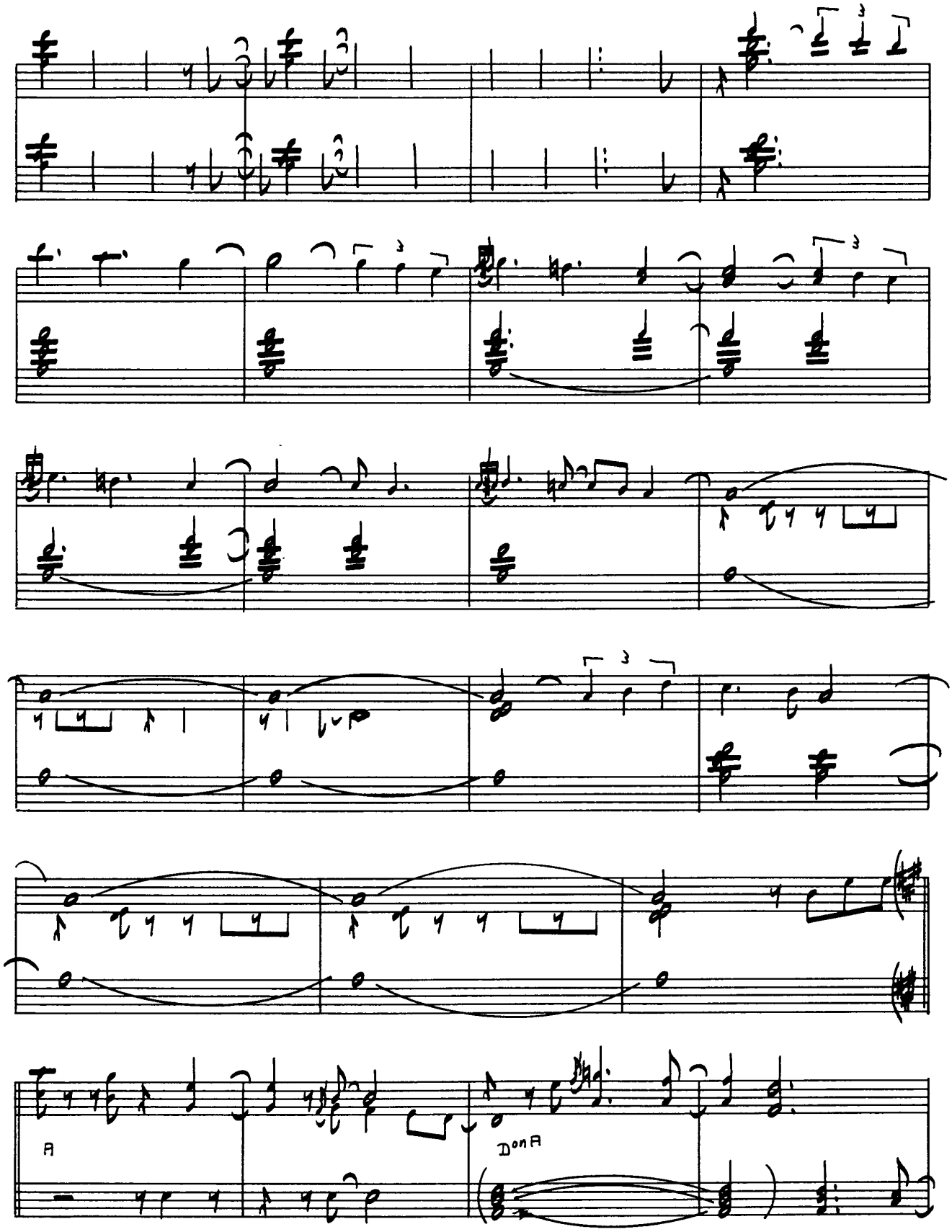

Dm (on A)
Am
Dm (on A)
Am
Am
Dm (on A)
Am

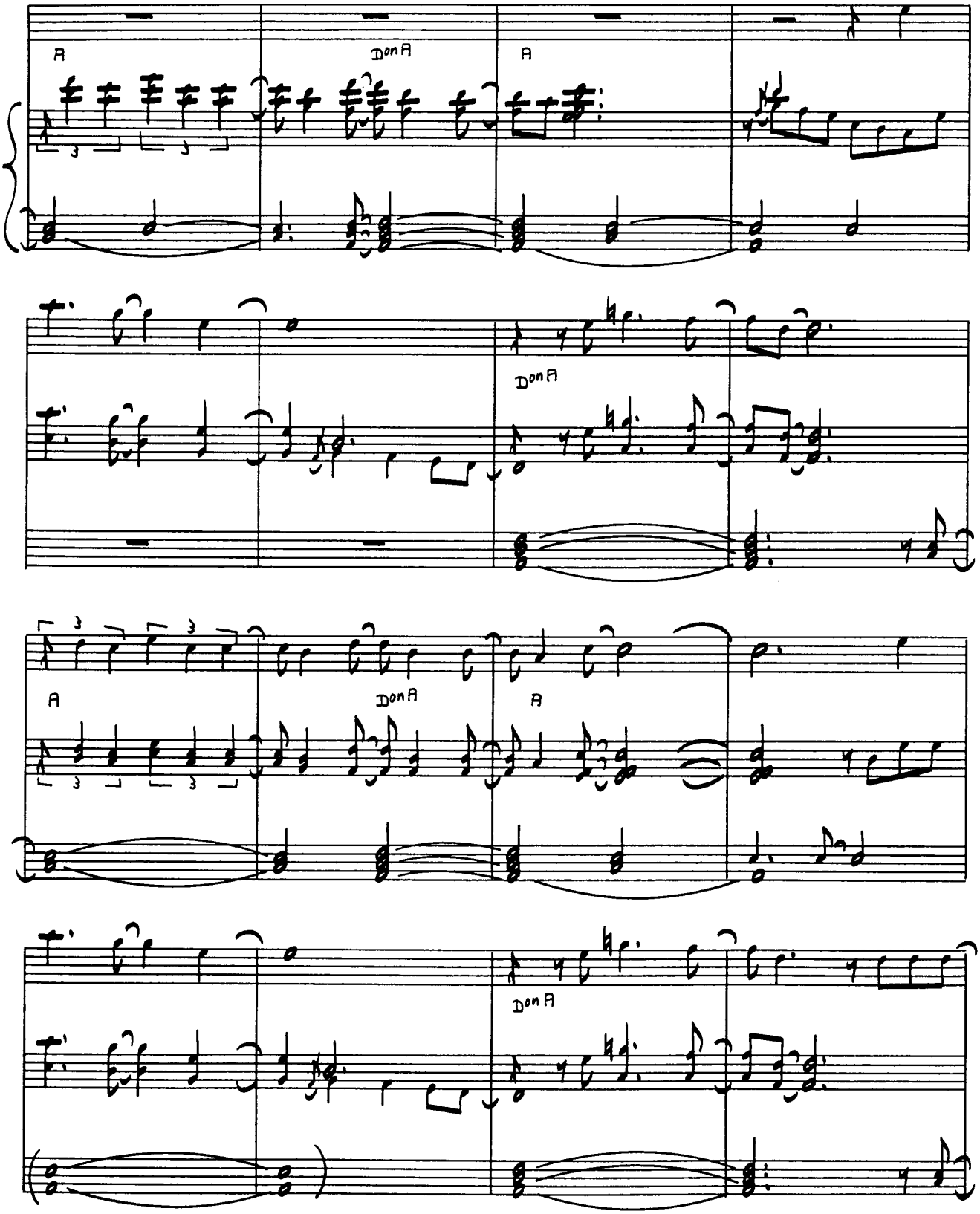


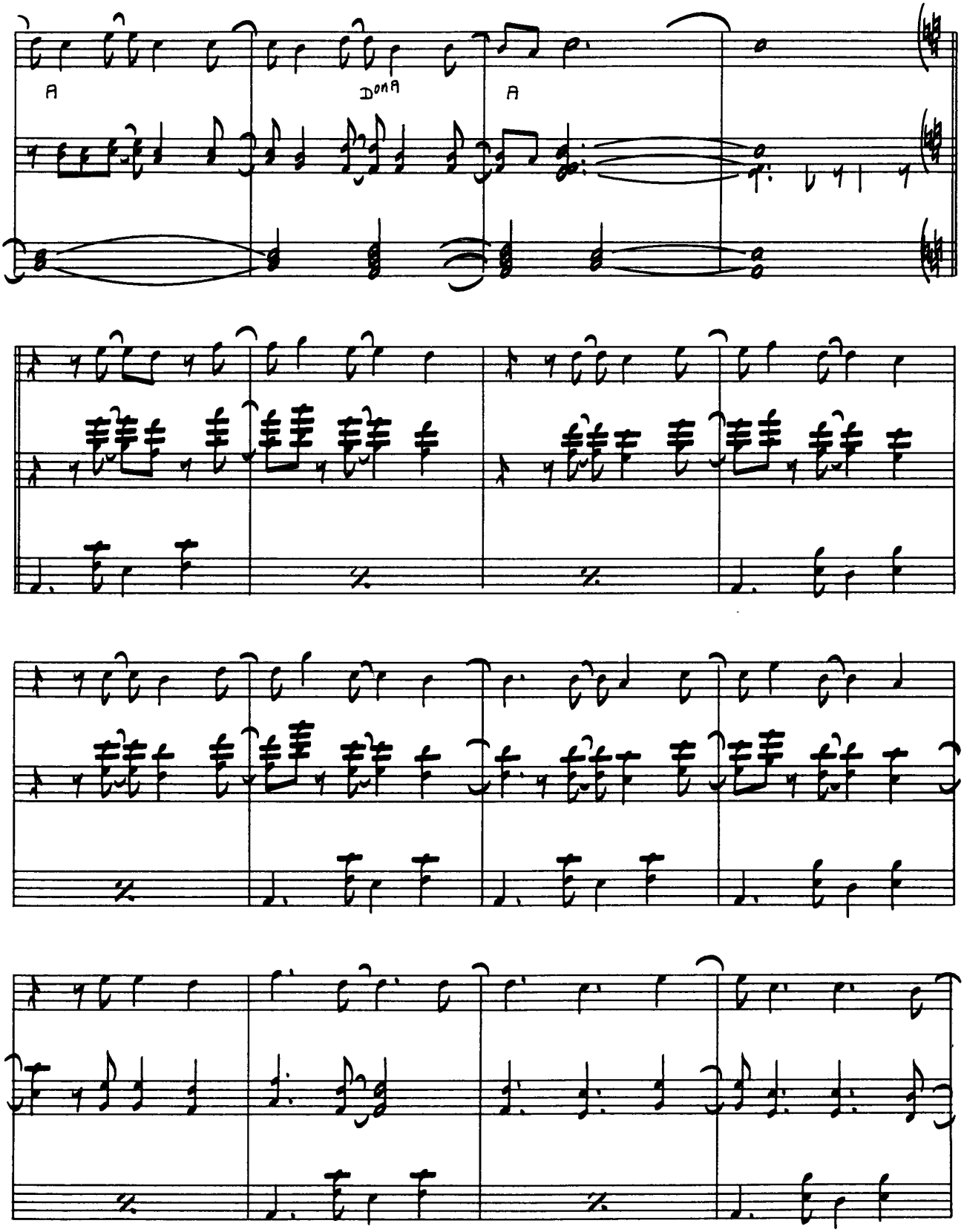


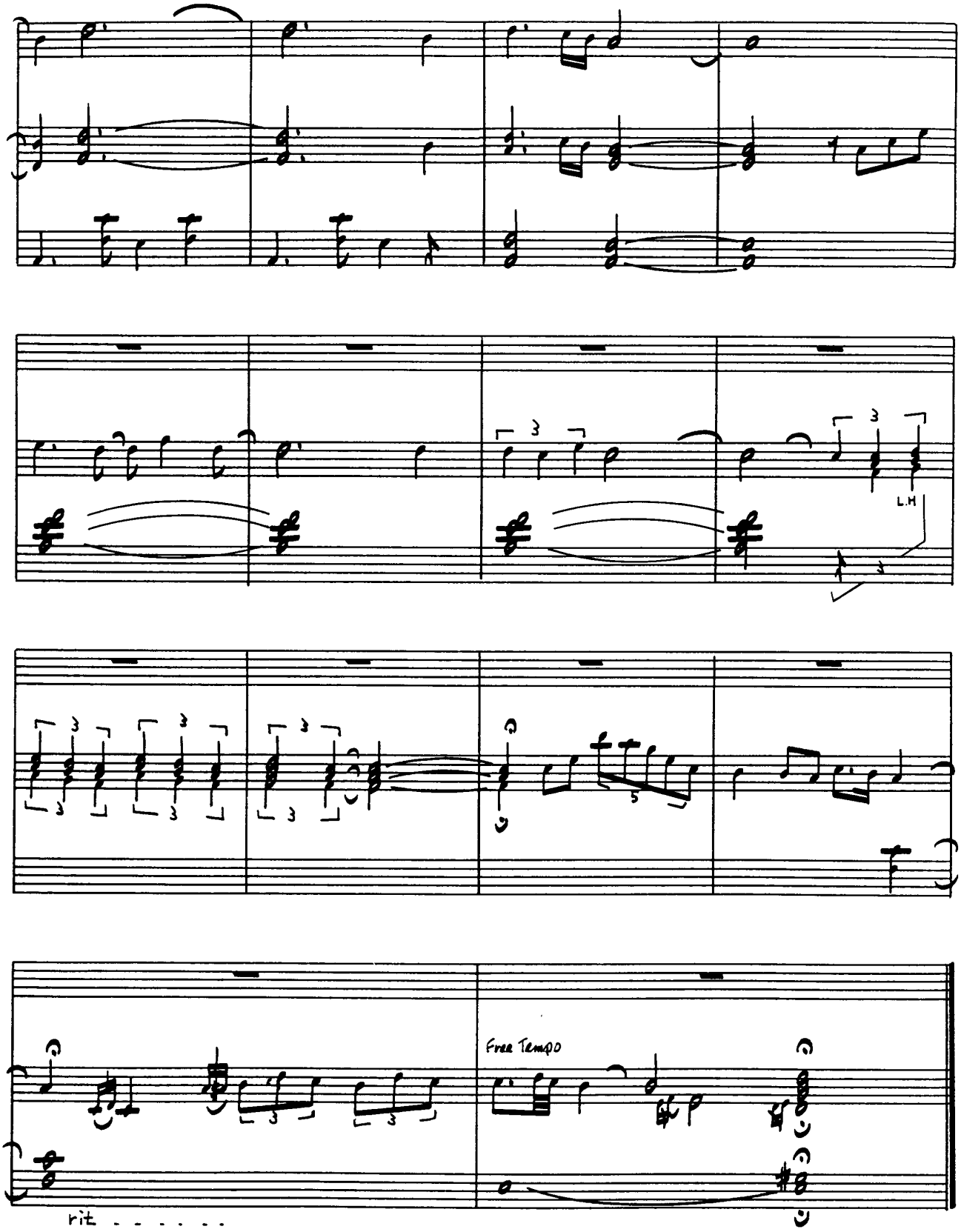



4 Times Repeat


A
D on A


A
Don A
A
Don A
A
Don A
A
Don A


A
DonA
A


L.H
Free Tempo
rit. . . . . .

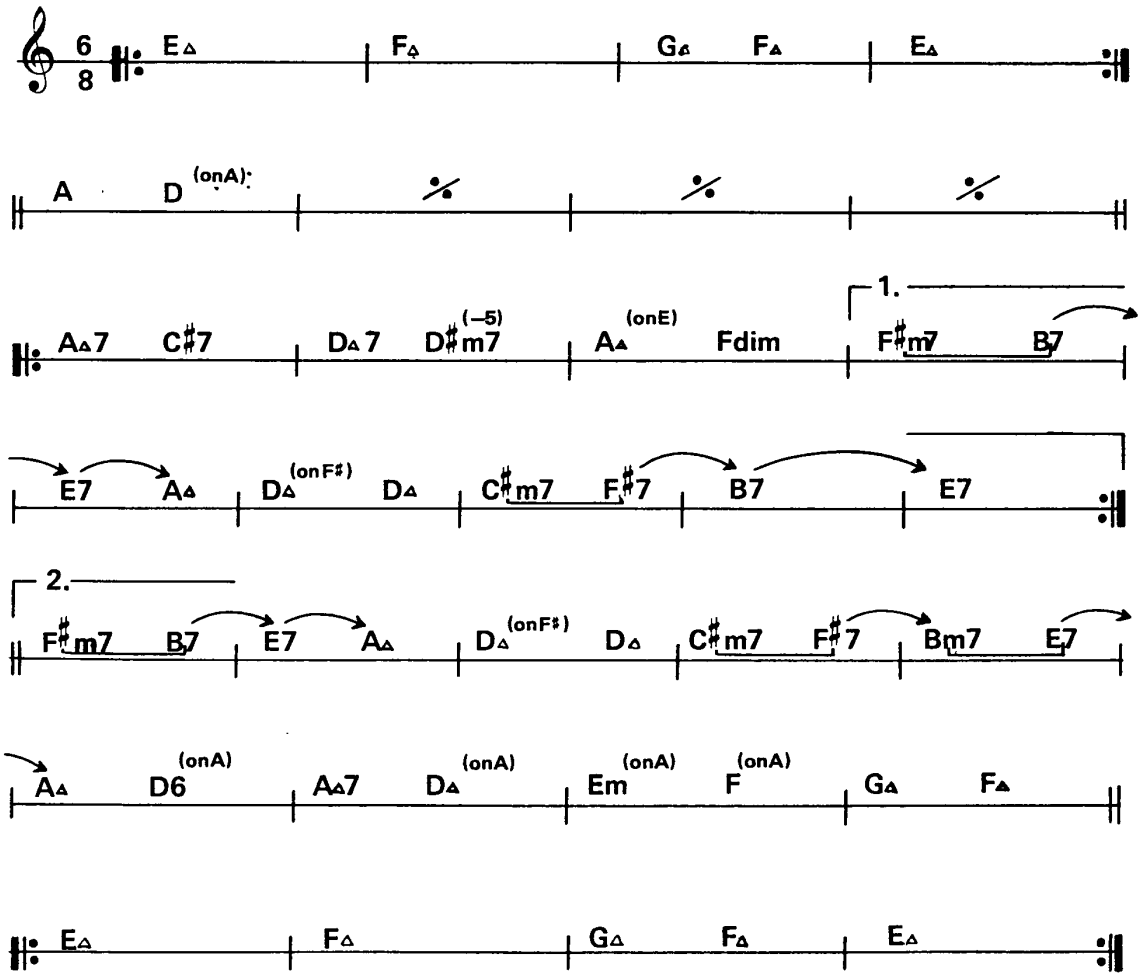
La Fiesta

ラ・フィエスタ by CHICK COREA

CHORD PROGRESSION ANALYZE

●Chord Progression & Scales

Many Times



IMPROVISATION ADVICE

軽快なラテン調の$\frac{6}{8}$拍子の曲である。頭の部分は、よくクリシェとして使われるコード・パターンである。練習する場合、左手と右手のコンビネーションに気をつけて何度も練習するようにしよう。

‖: E△ | F△ | G△ F△ | E△ :‖
I△ ♭II△ ♭III△ ♭II△ I△

サビの部分は、ベース・ラインが最初にアイデアとしてあって、その上にメロディーが作られたようである。そのため、流れが整然としていて、メロディーが実によくできている。

譜面上には記譜されてはいないが、スタンリー・クラークのベース・ソロ部分でのチック・コリアのカンピング(伴奏)に注目してほしい。流れているリズムの最も大事な要素のみを伴奏しており、ベース・ソロを充分に理解している。

アドリブは、イントロの4小節のコード進行の繰返しで行なわれている。このコード・パターンにおけるアドリブの方法は次に示す。

‖: E△ | F△ | G△ F△ | E△ :‖

○E△……イオニアン・スケール、または、メジャー3度の音(G♯)が入っているEスケールなら何でもよい。

○F△、G△、F△

これらのコードでは、次のようなバリエイションが考えられる。

① $F_{\triangle 7} \rightarrow G_7 \rightarrow F_{\triangle 7}$

② $F_7 \rightarrow G_7 \rightarrow F_7$

③ $F_7^{+9} \rightarrow G_7^{+9} \rightarrow F_7^{+9}$

$F_7^{+11} \rightarrow G_7^{+11} \rightarrow F_7^{+11}$

etc.(全ての7thの和音)

④ $Fm_7 \rightarrow Gm_7 \rightarrow Fm_7$

⑤ 上記の和音のバリエイション

Ex. $F_{\triangle 7} \rightarrow G_7^{+9} \rightarrow Fm_7$

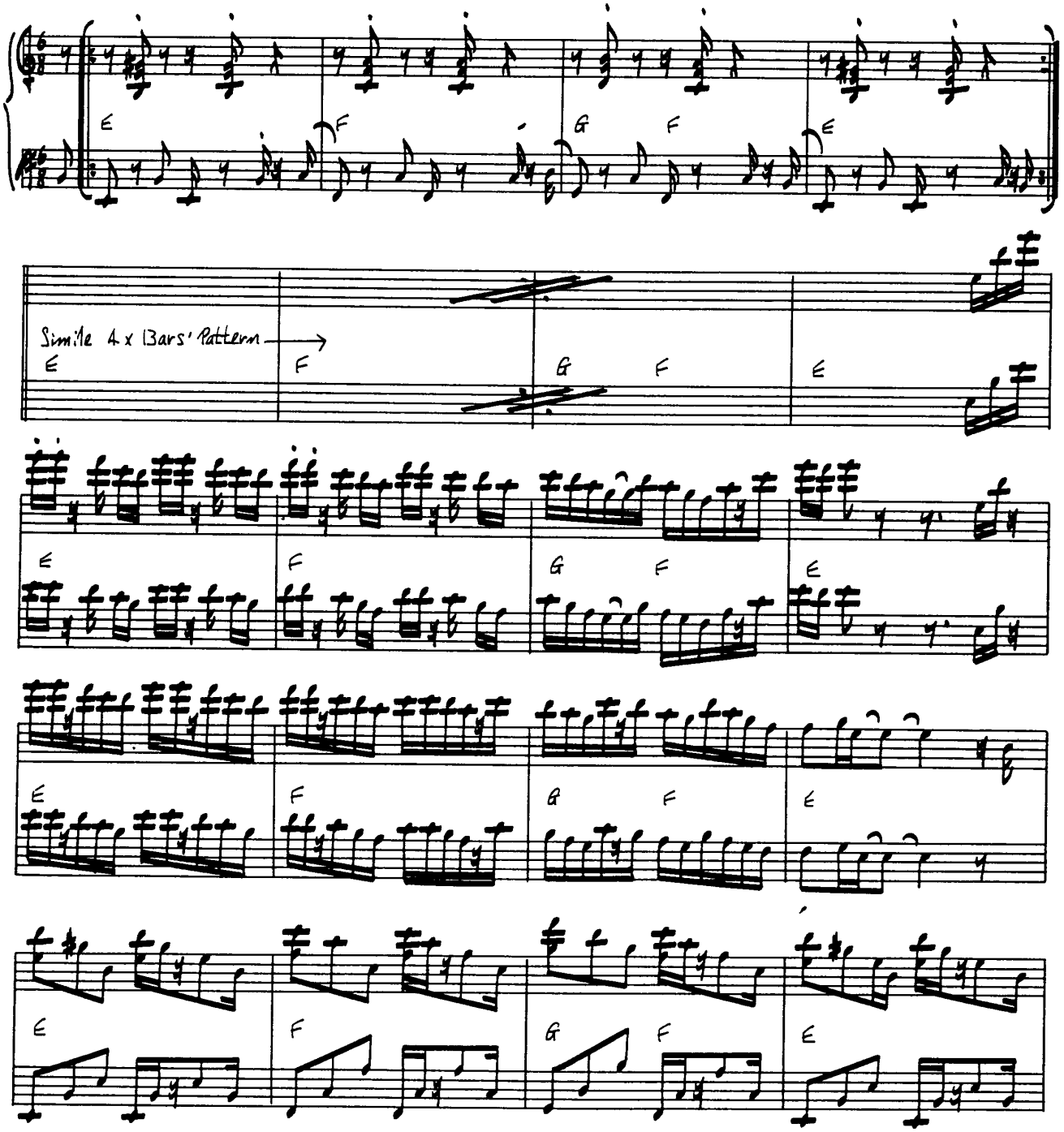
IMPROVISATION

「La Fiesta」

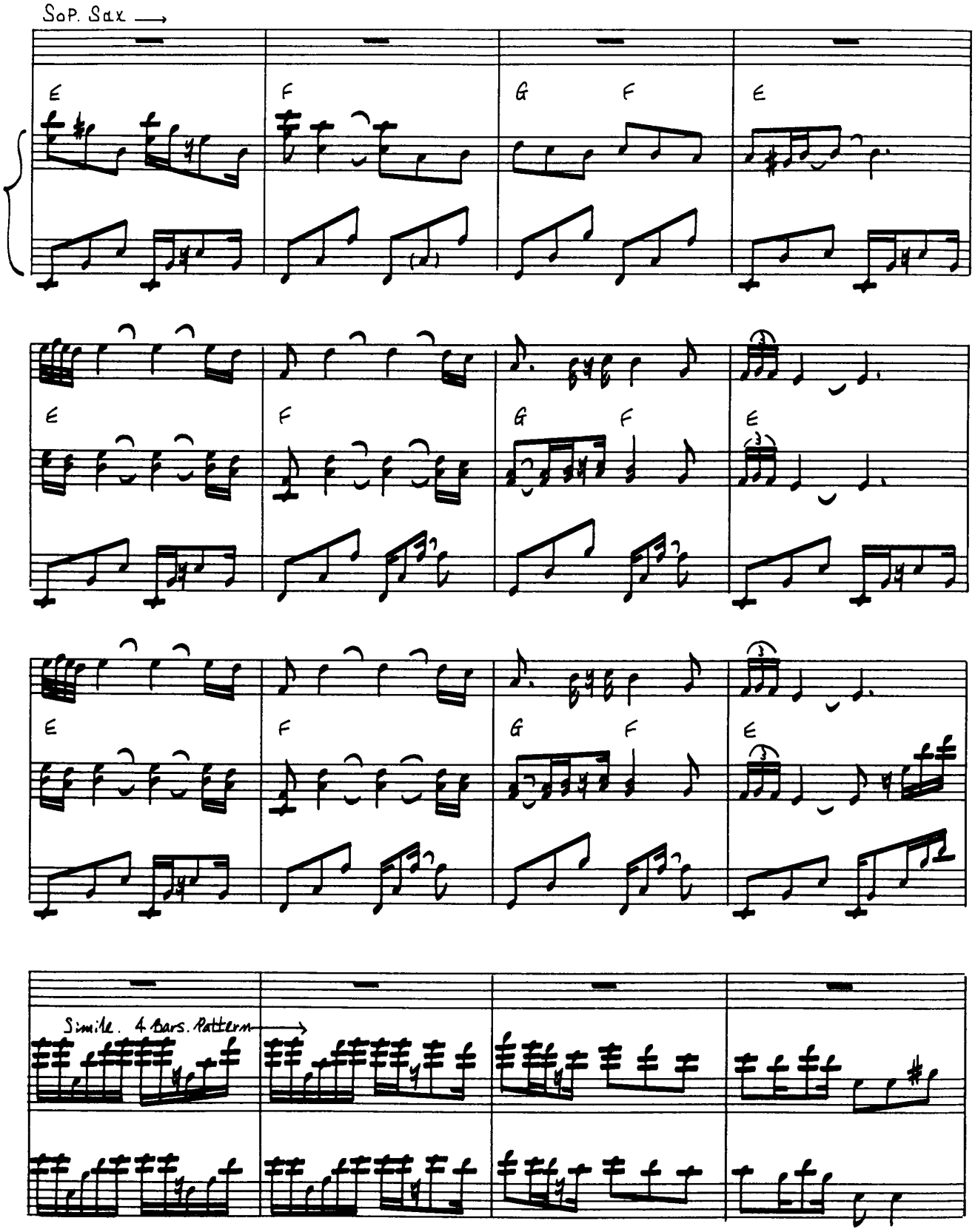
by Chick Corea

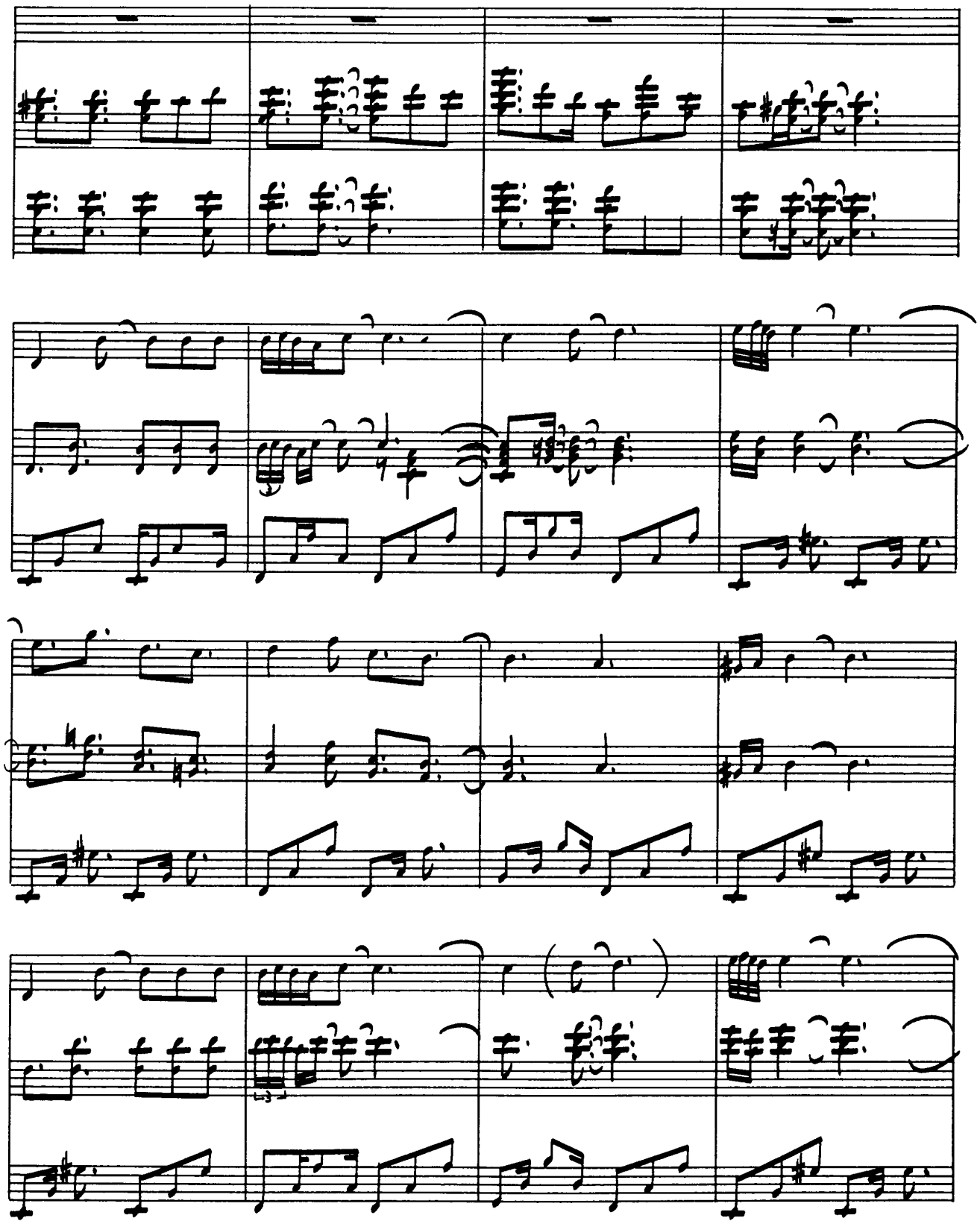
Chick Corea (el-p)
Joe Farrell (fl, ss)
Flora Purim (vcl, perc)
Stanley Clarke (b)
Airto Moreila (perc)

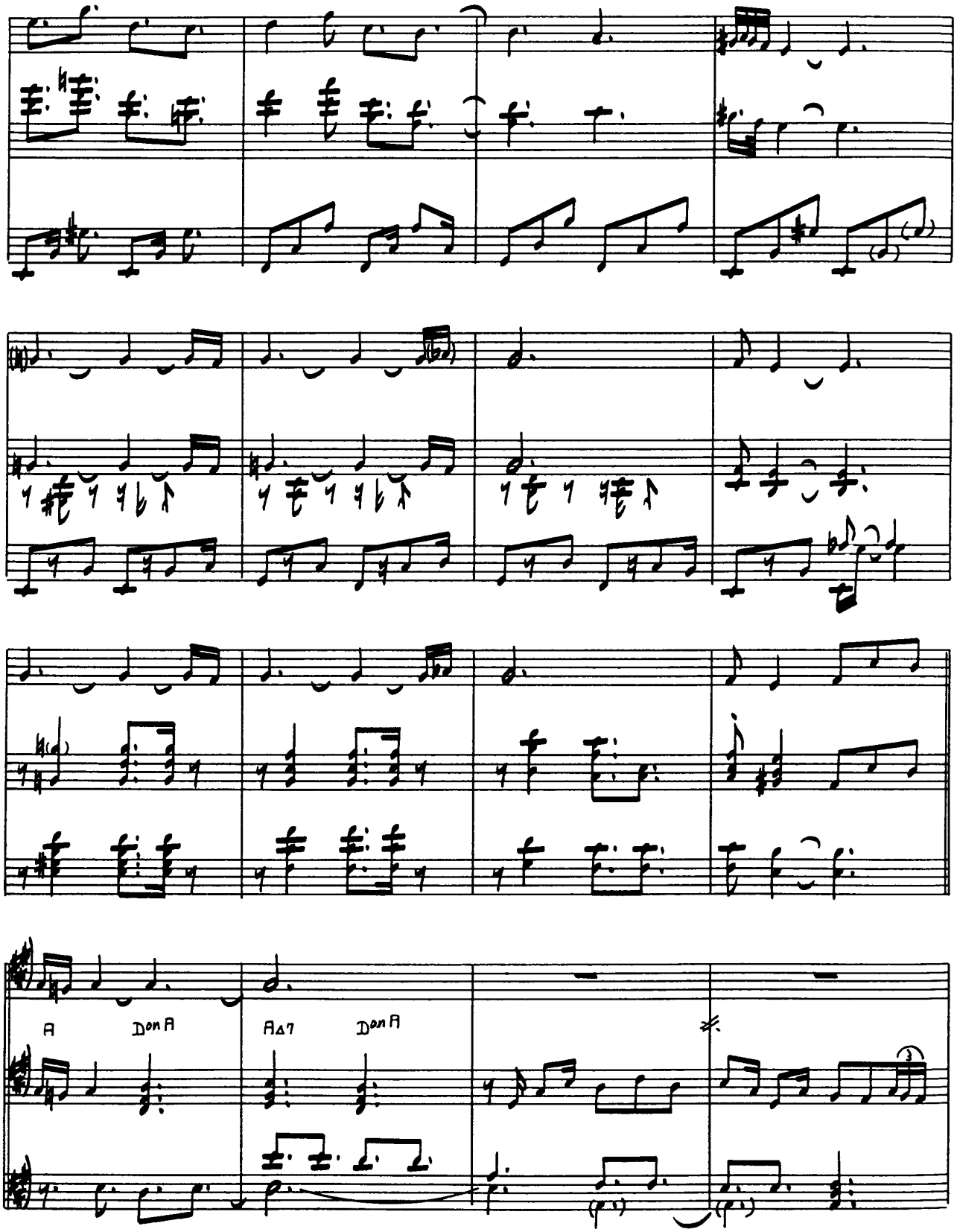
● Record: RETURN TO FOREVER/CHICK COREA
(ECM–1022, Polydor MPF–1136)
Date: Feb. 2nd–3rd 1972

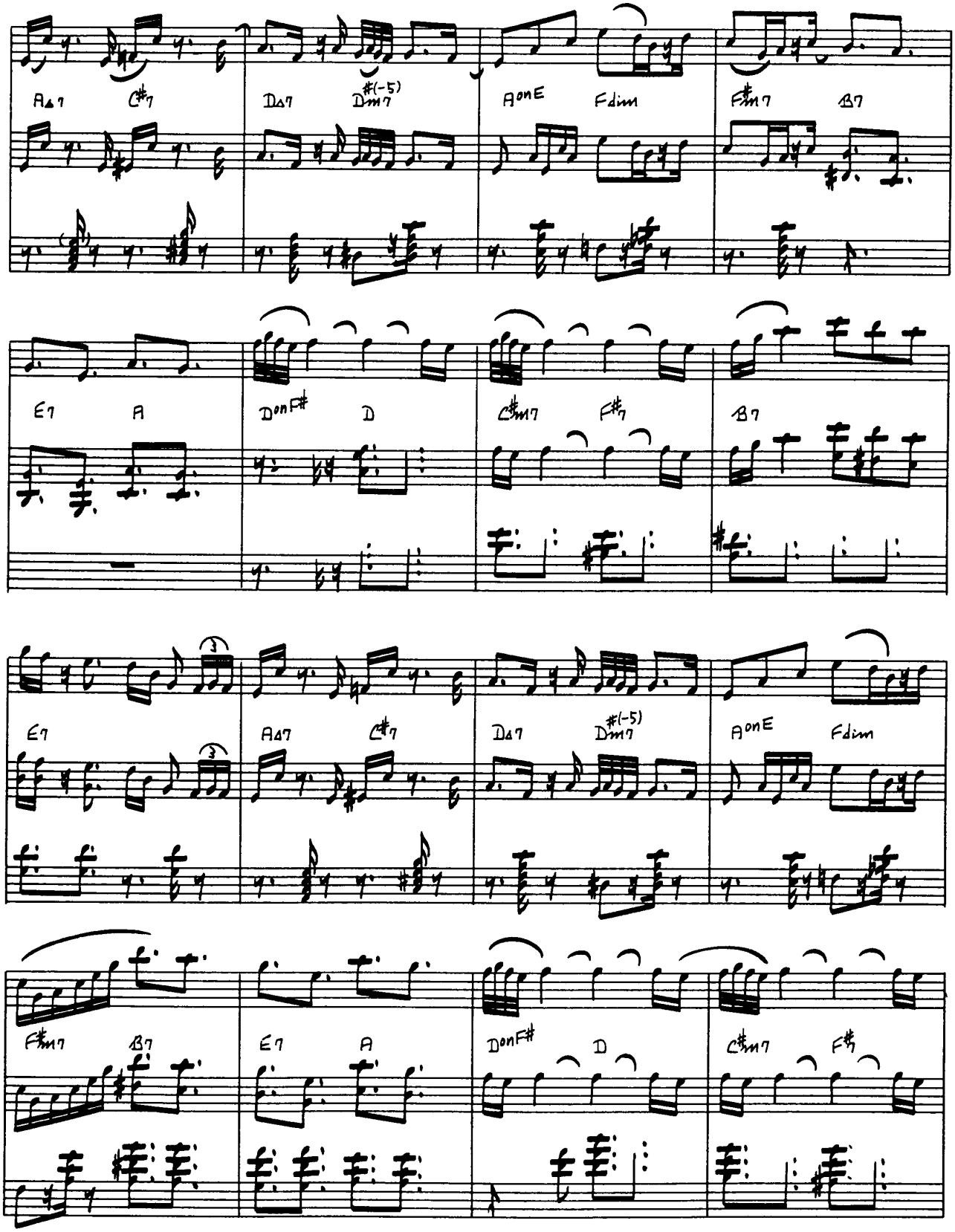


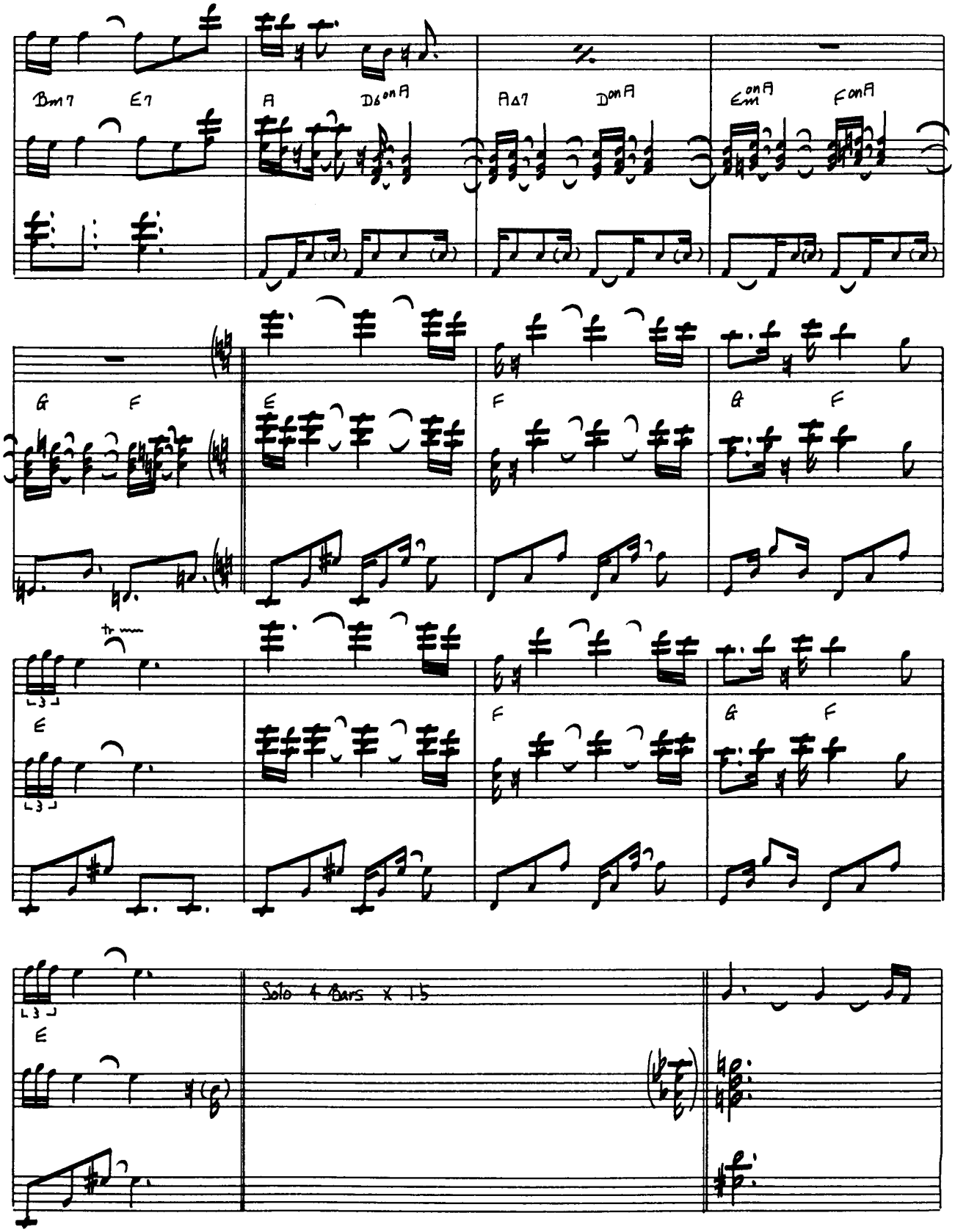
©1972, 1976 by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.

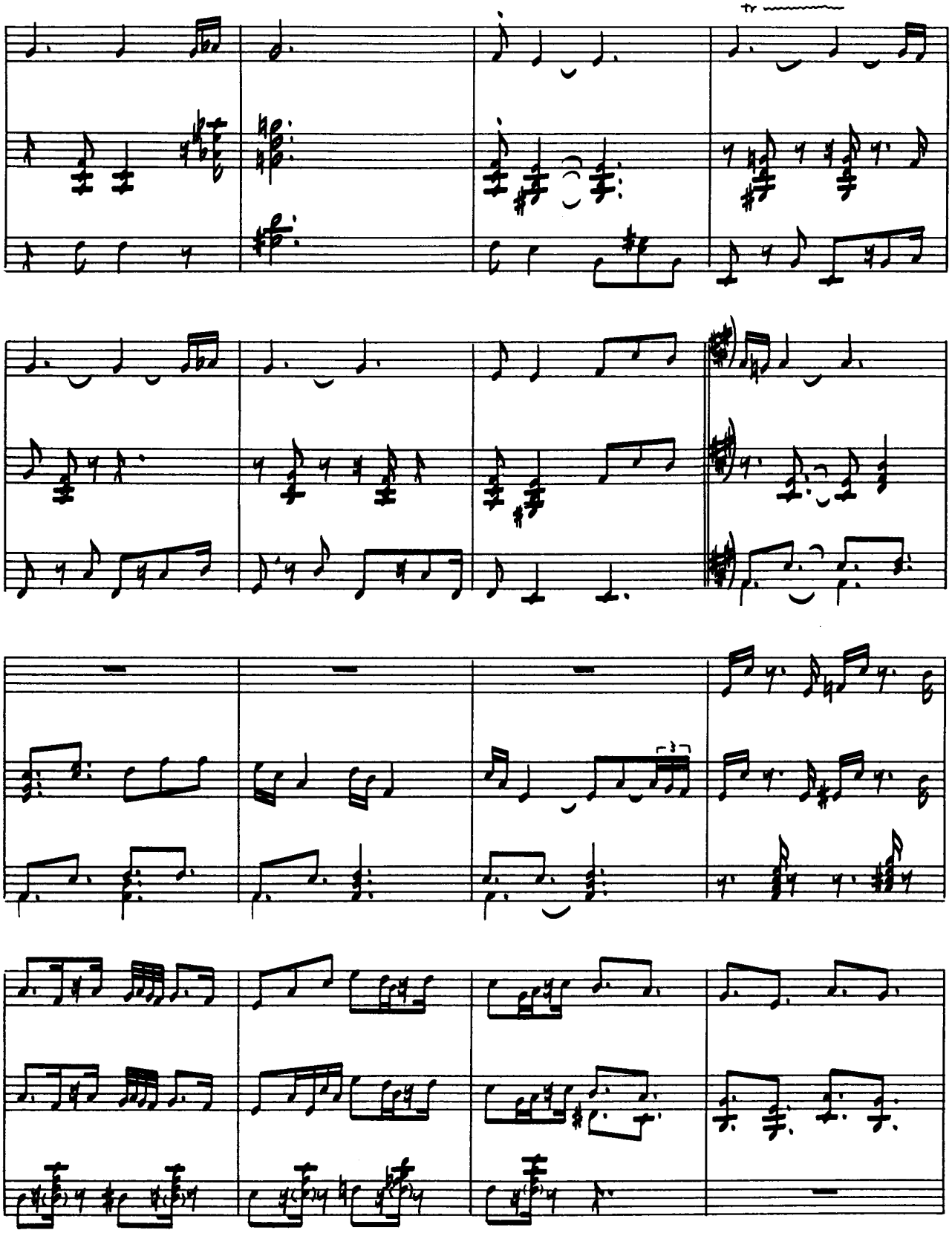

SoP. Sax
E
F
G
F
E
Simile. 4 Bars. Pattern

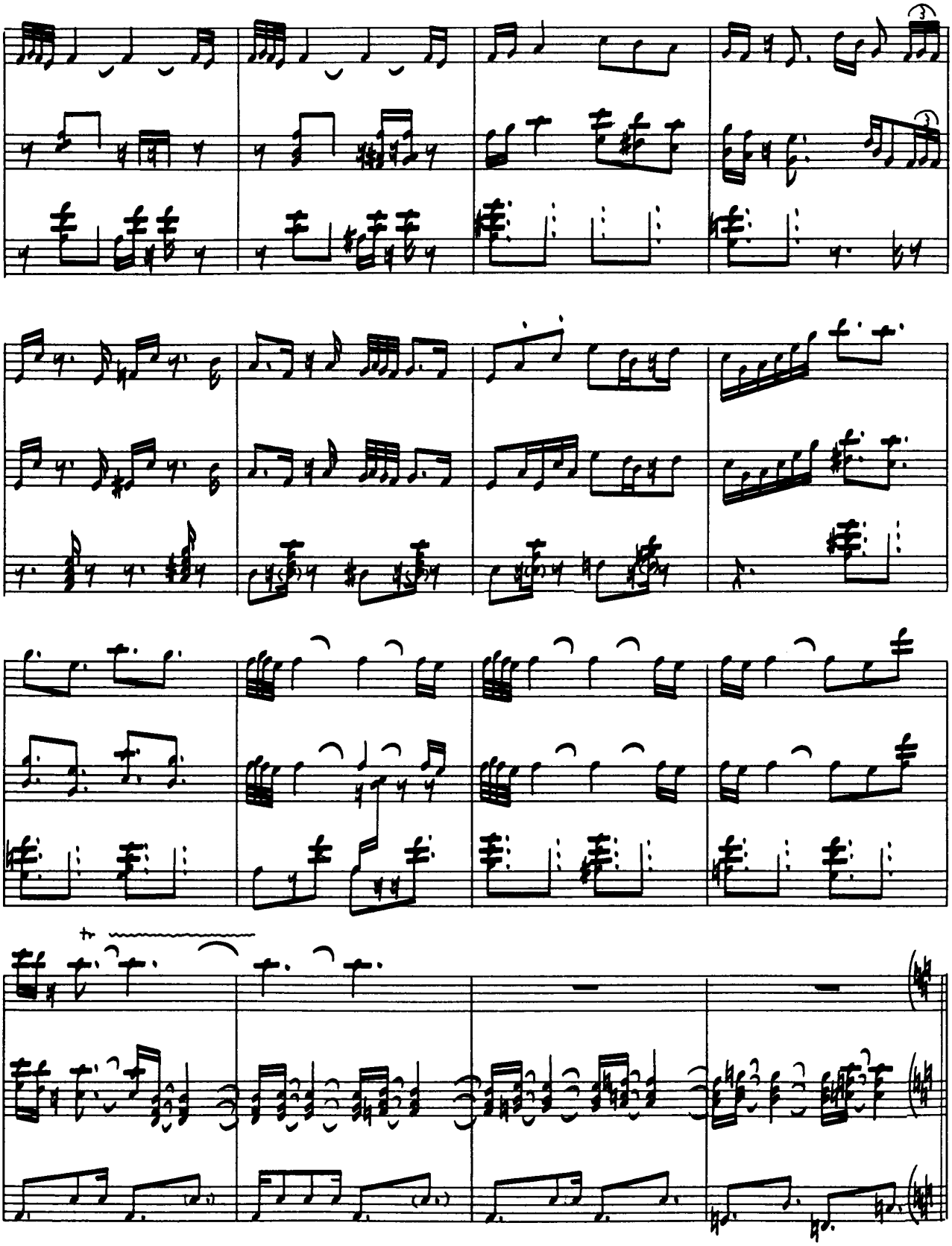


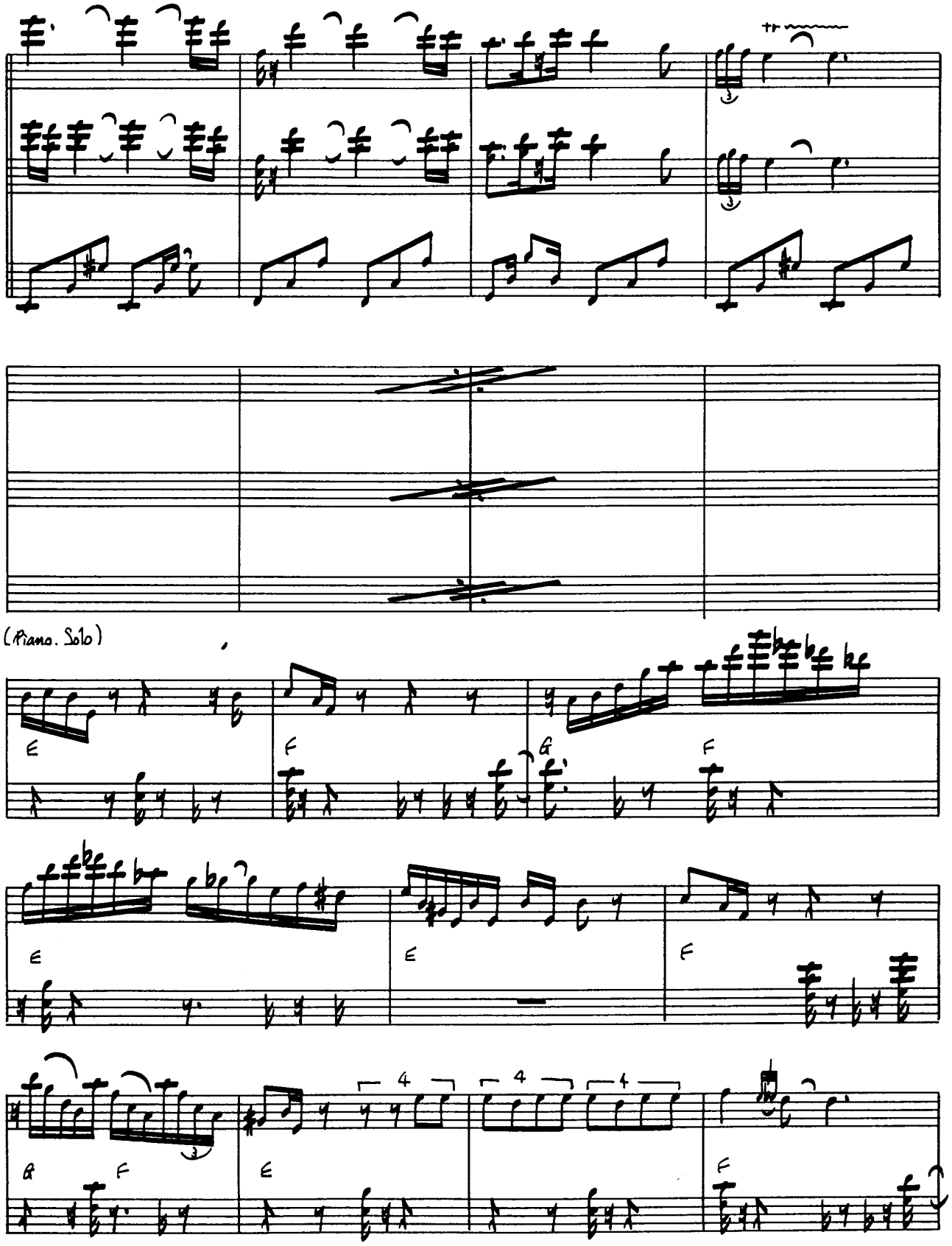

A
D on A
A△7
D on A

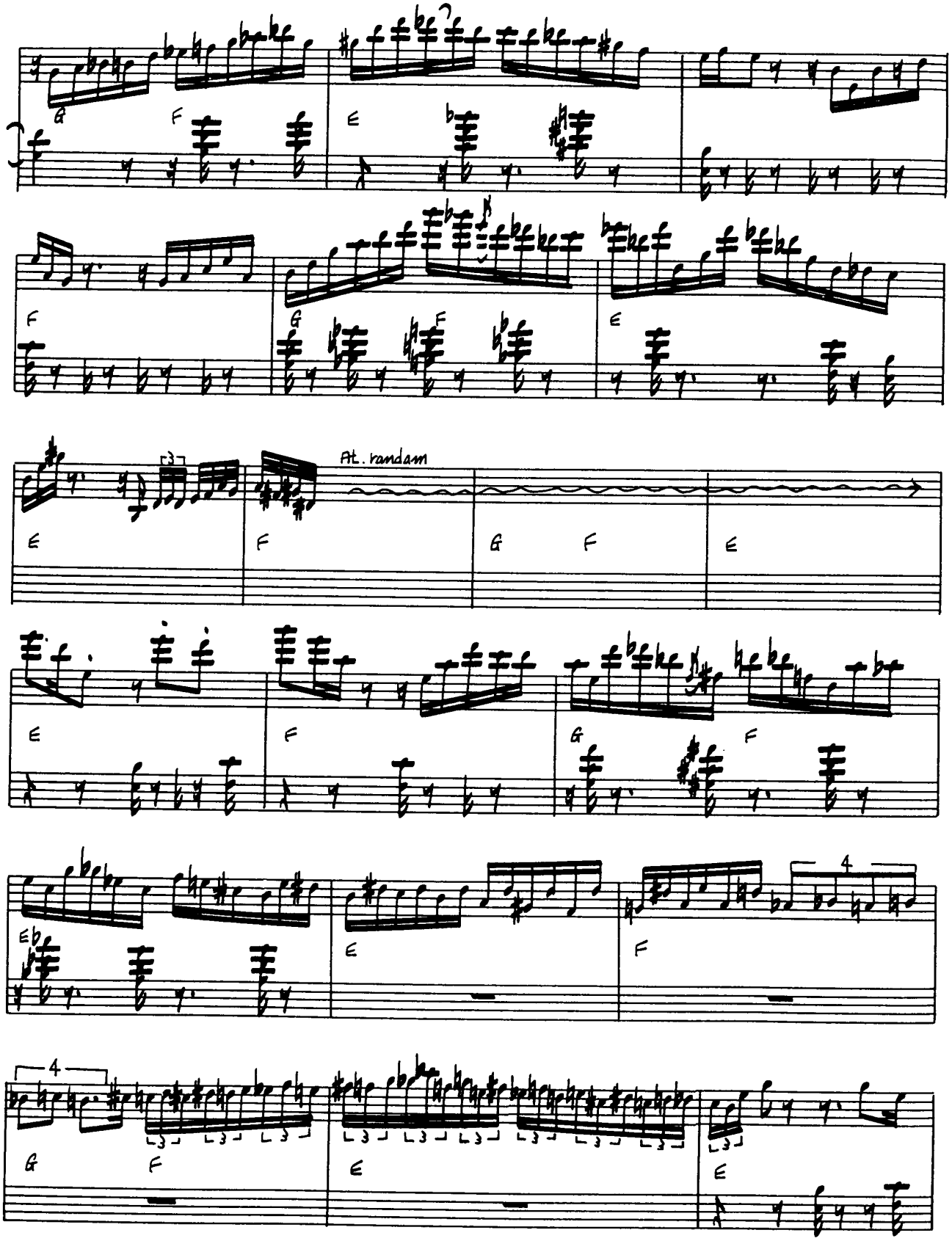

A△7
C#7
D△7
D#(-5)m7
A onE
Fdim
F#m7
B7
E7
A
D onF#
D
C#m7
F#7
B7
E7
A△7
C#7
D△7
D#(-5)m7
A onE
Fdim
F#m7
B7
E7
A
D onF#
D
C#m7
F#7

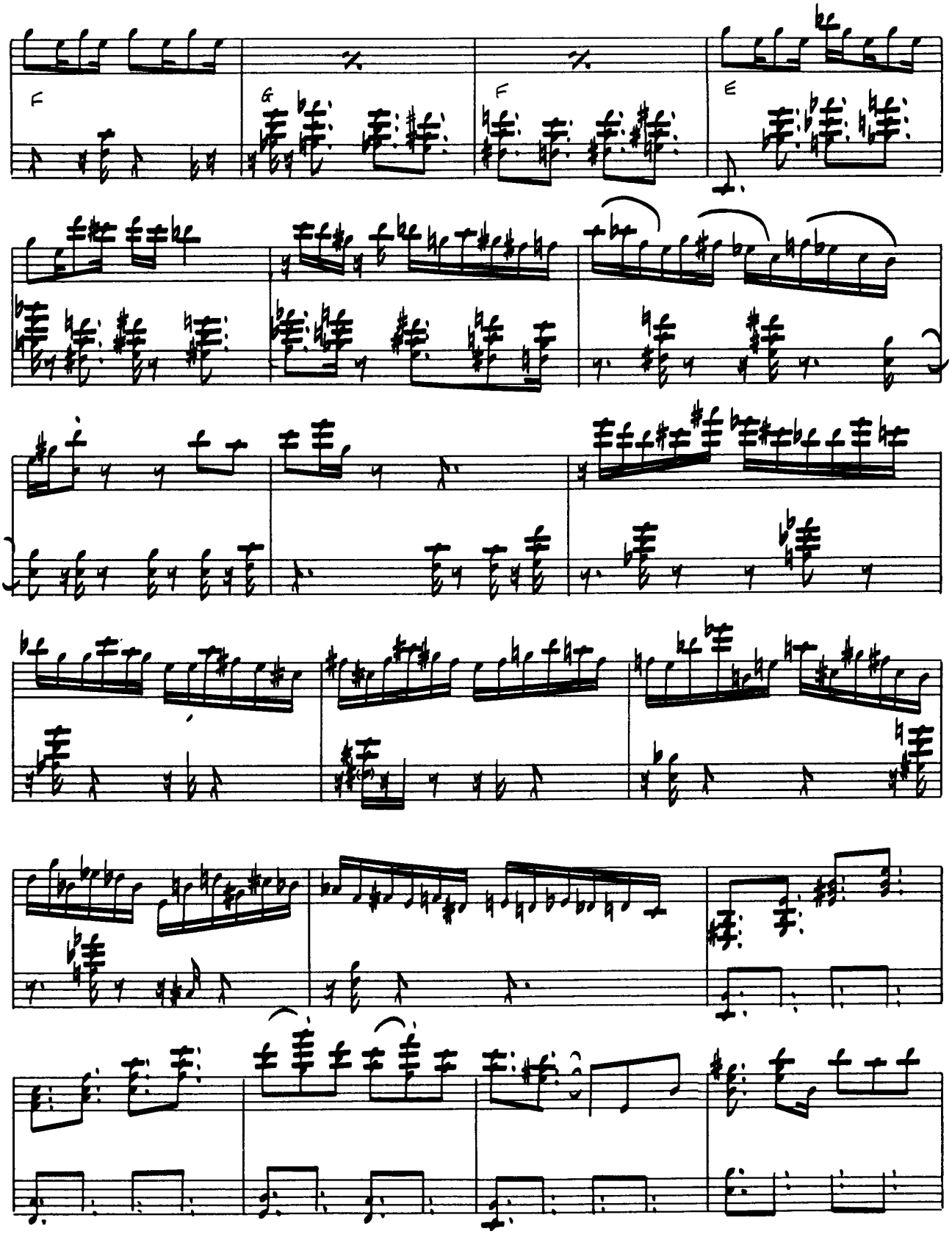

Bm7
E7
A
D6 on A
A△7
D on A
Em on A
F on A
G
F
E
F
G
F
E
F
G
F
E
Solo 4 Bars x 15

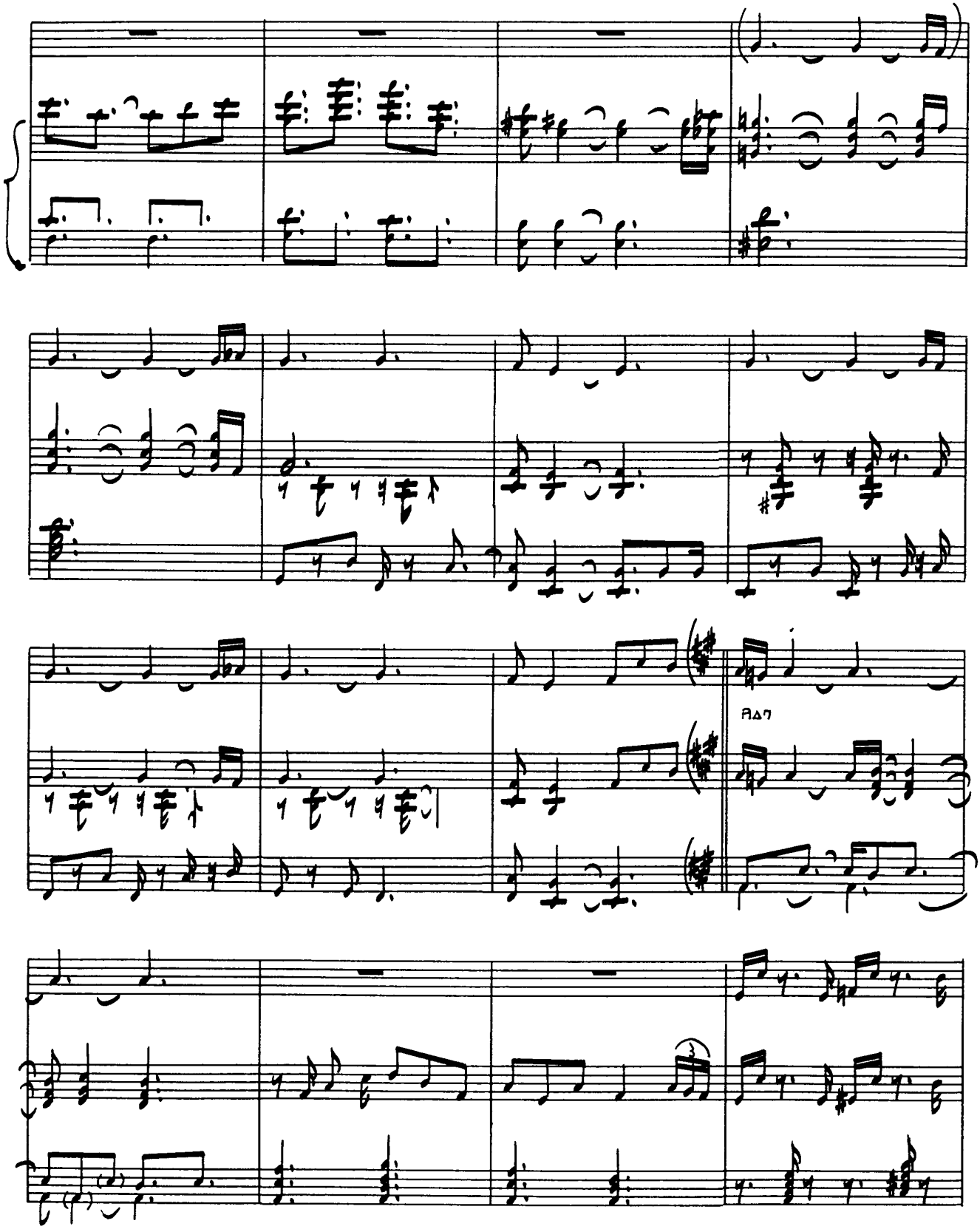

tr

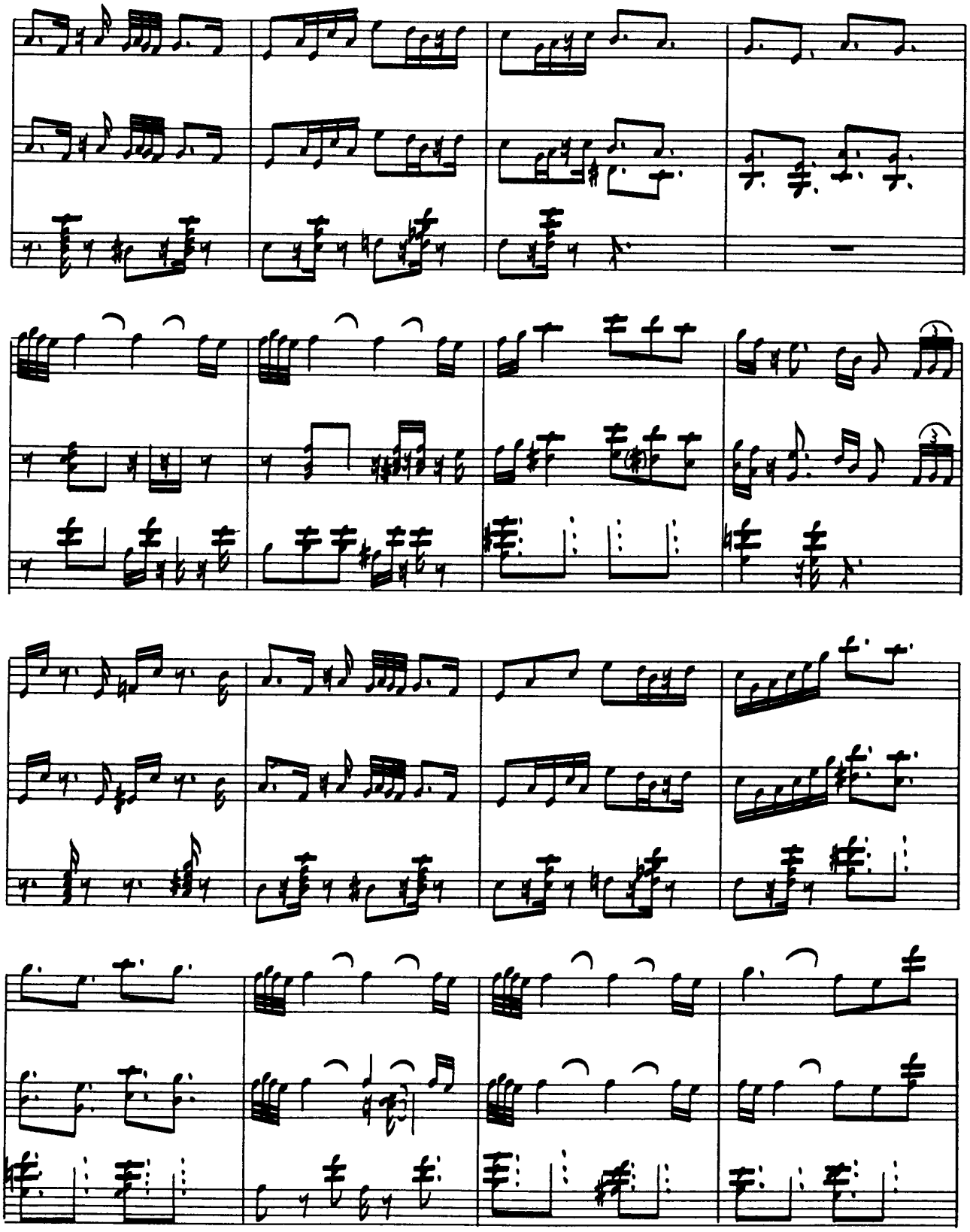


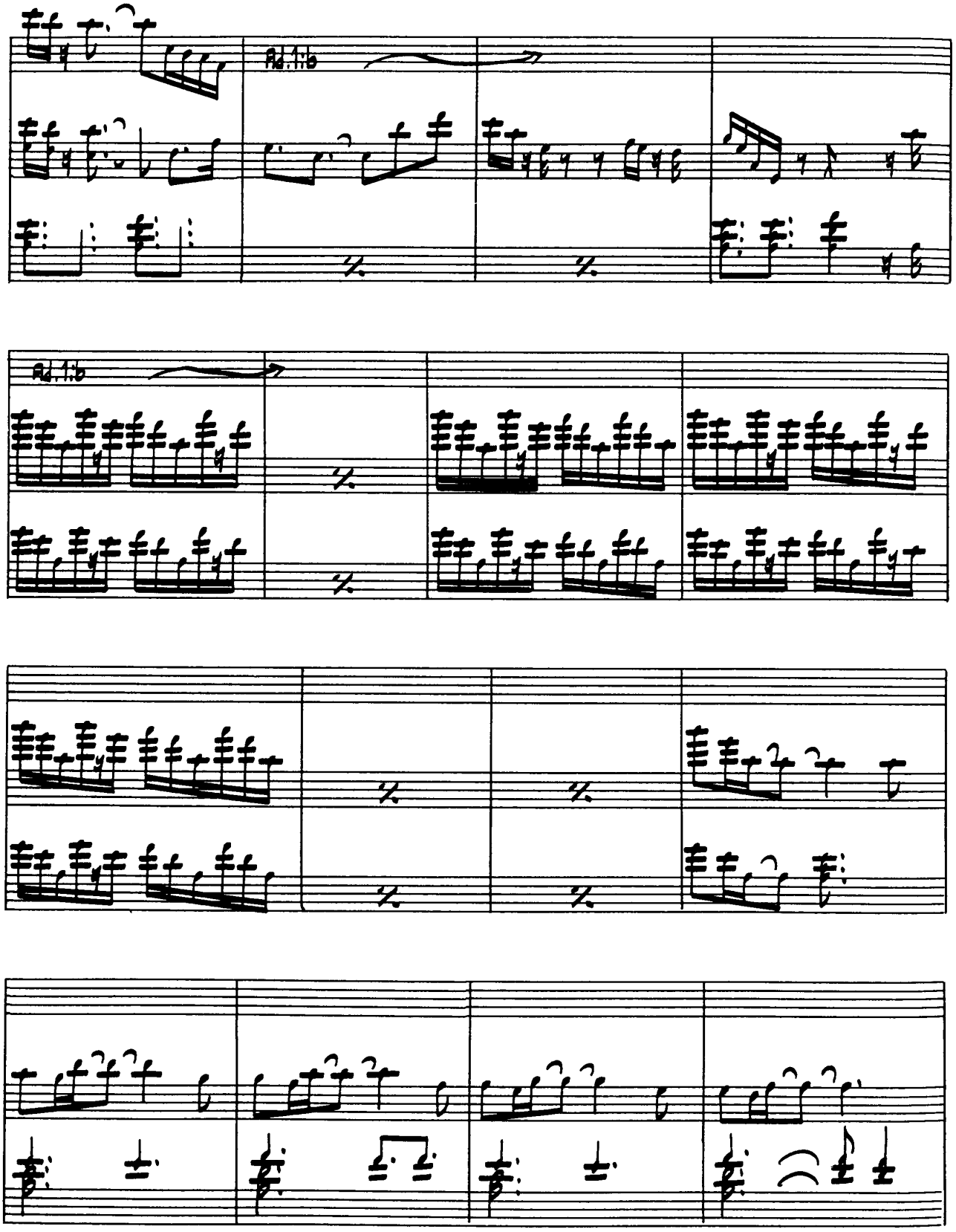

(Piano. Solo)
E
F
G
F
E
E
F
G
F
E
F

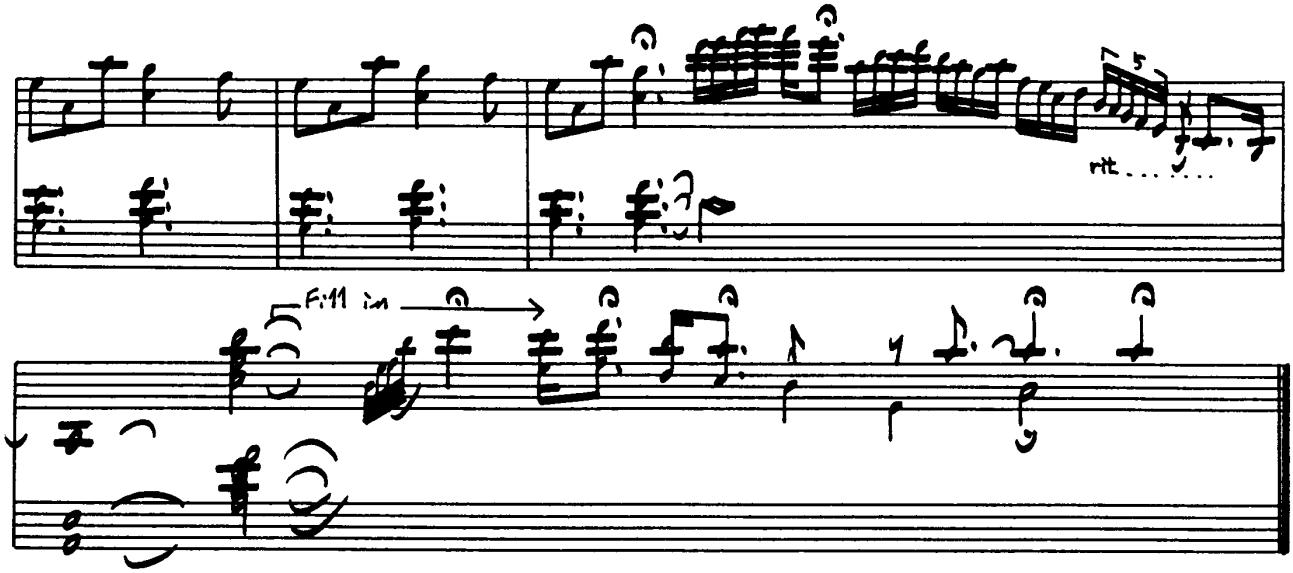

At. randam


F
G
F
E


A△7




Ped.1/b
Ped.1/b


5
rit.
Fill in

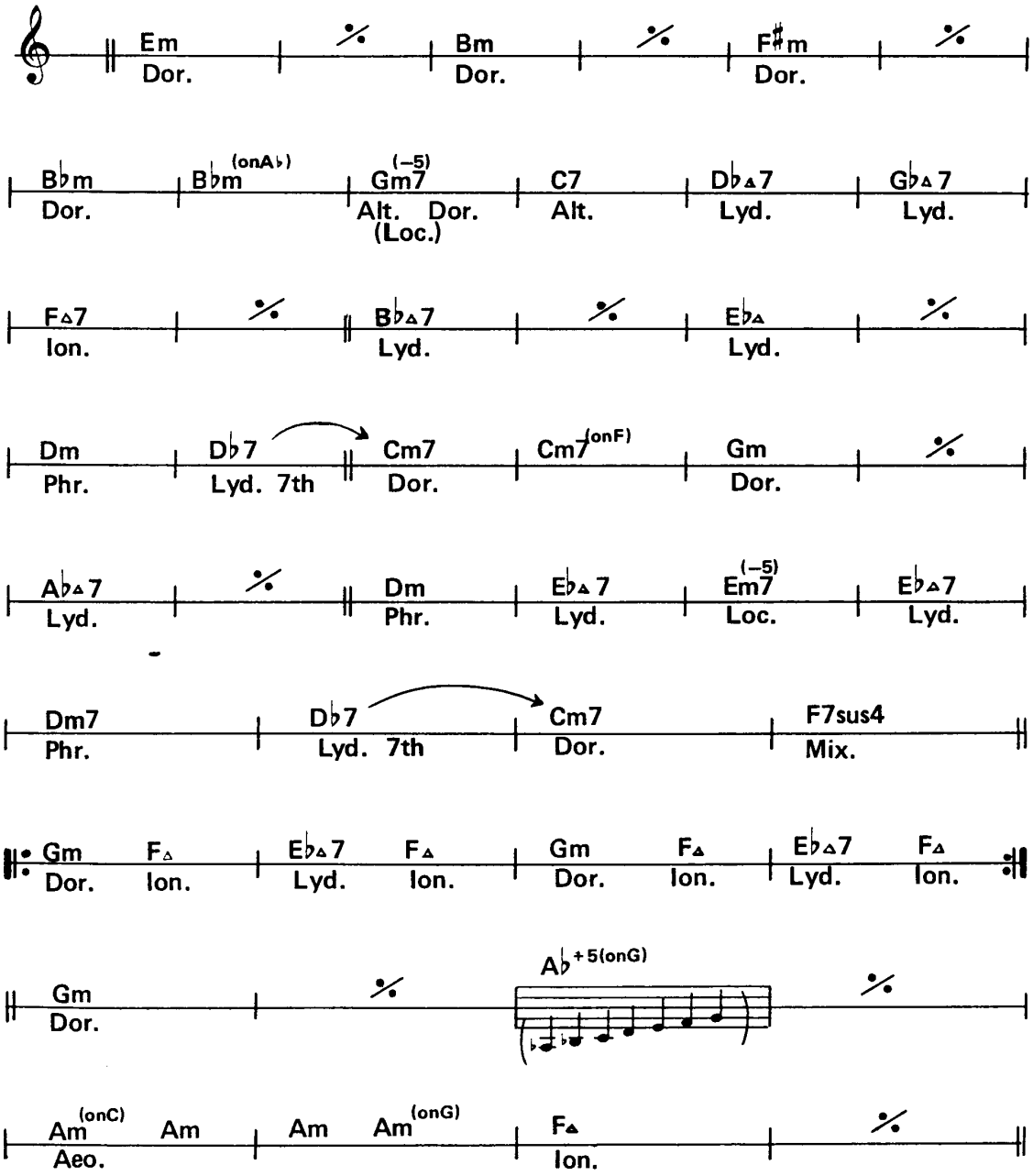
五木音

Captain Marvel

キャプテン・マーヴェル by CHICK COREA

CHORD PROGRESSION ANALYZE

●Chord Progression & Scales



IMPROVISATION ADVICE

速いテンポのサンバである。メロディーがアドリブ全体をリードしているので、各音を充分に歌うようにしよう。部分的なコード進行にとらわれないで、コードとスケールの大まかな流れをよく理解してアドリブしてみるように。

大まかなコードの流れは、次のように考えられる。

Em→Bm→F♯m→B♭m→F△→B♭△→E♭△→Cm→Gm→A♭△→Dm→Gm→F△

練習する場合、右手のアドリブ中にある休符に特に注意して練習するように。また、左手は右手のメロディーを助ける程度にし、あまりダイナミックスが大きくならないように注意しよう。

IMPROVISATION

Chick Corea (keyboards)
Joe Farrell (ts, fl)
Stanley Clarke (b)
Airto Moreila (ds, perc)
Flora Purim (vcl)

「Captain Marvel」

by Chick Corea

● Record: LIGHT AS A FEATHER (Polydor PD-5525, Polydor MPF-1171)
Date: Sep., Oct. 1972

(FAST) SAMBA

E. Piano

Em

Bm

F#m

Bbm

Bbm on Ab

Gm7(-5)

C7

Db△7

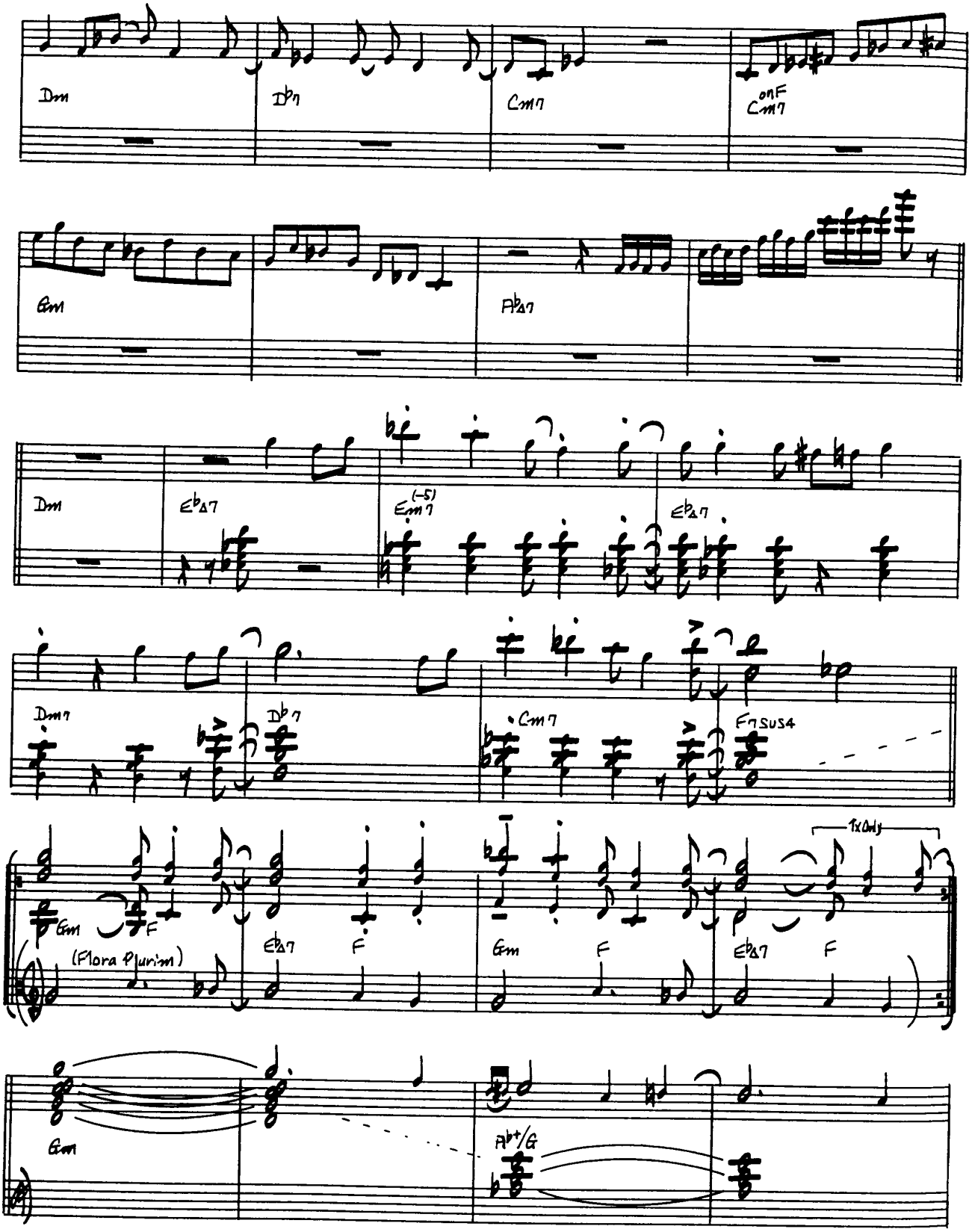
Gb△7

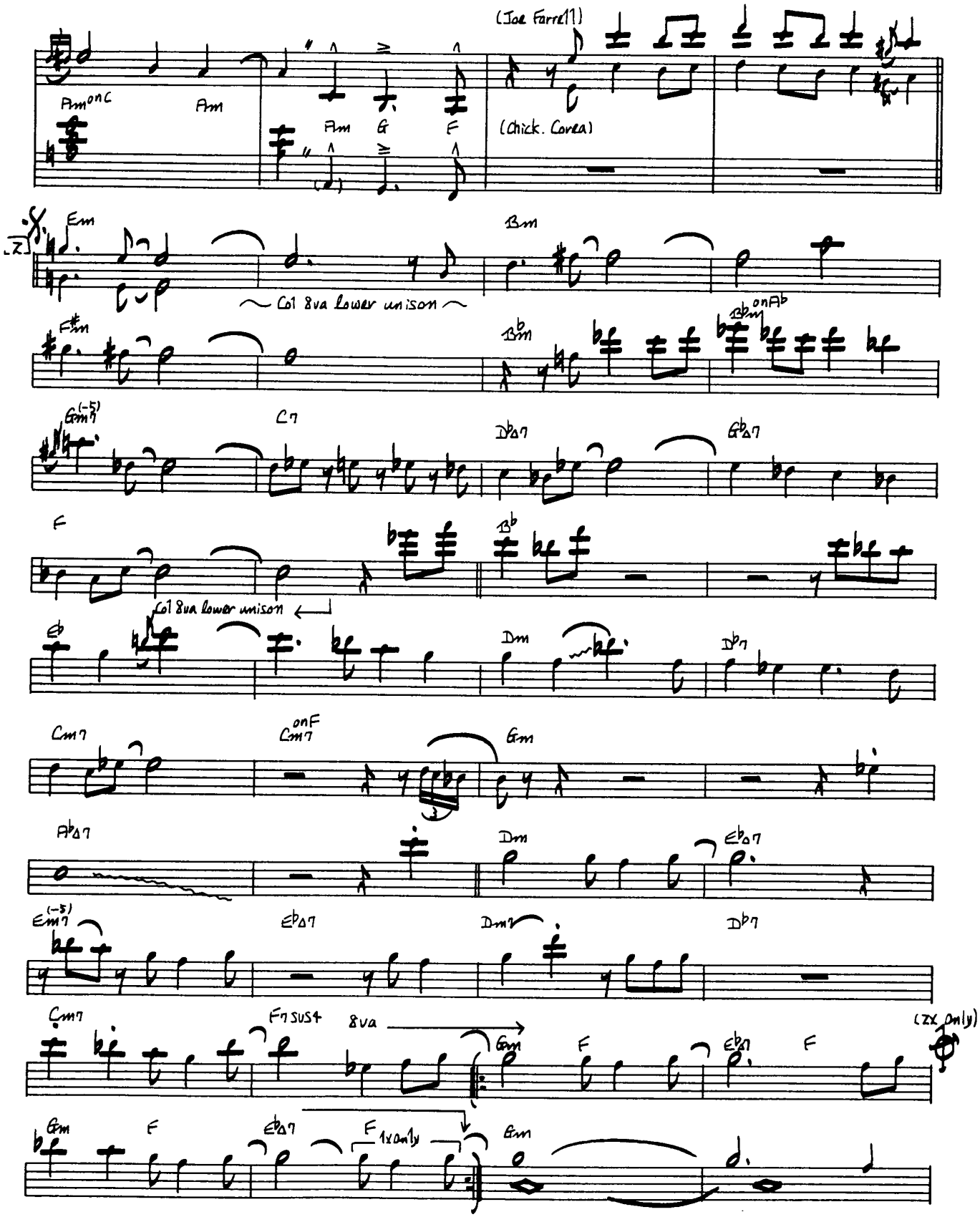
F

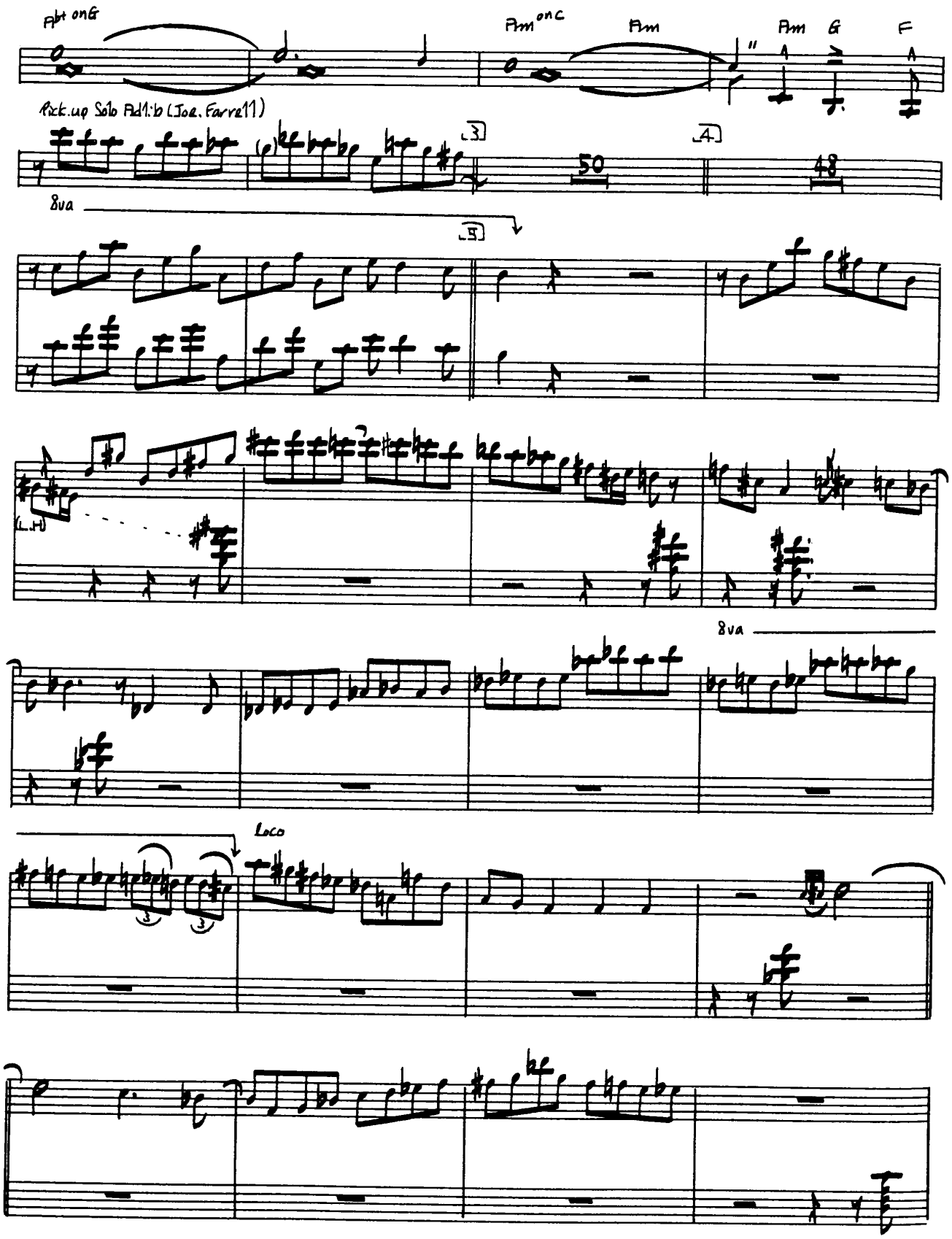
Bb

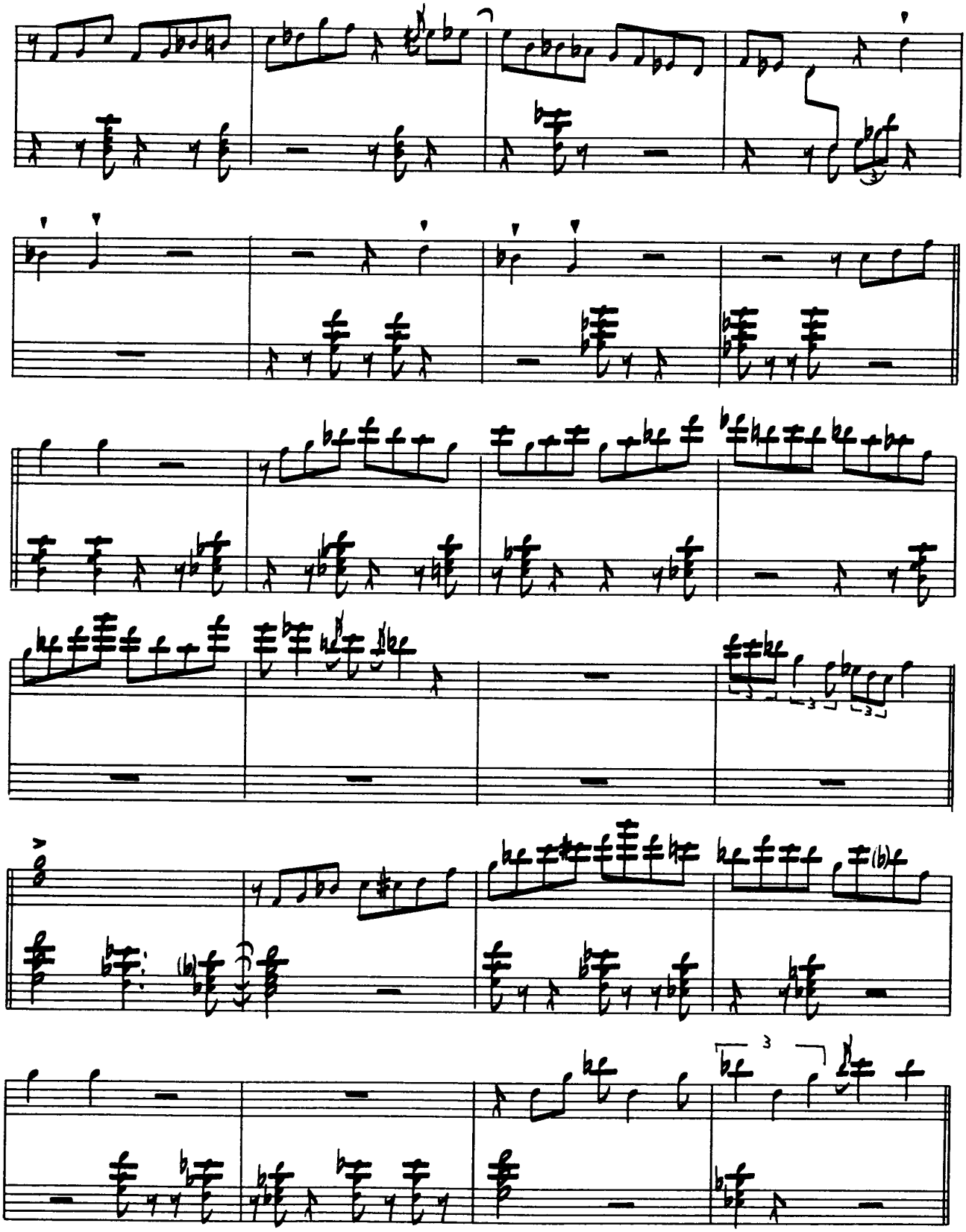
Eb

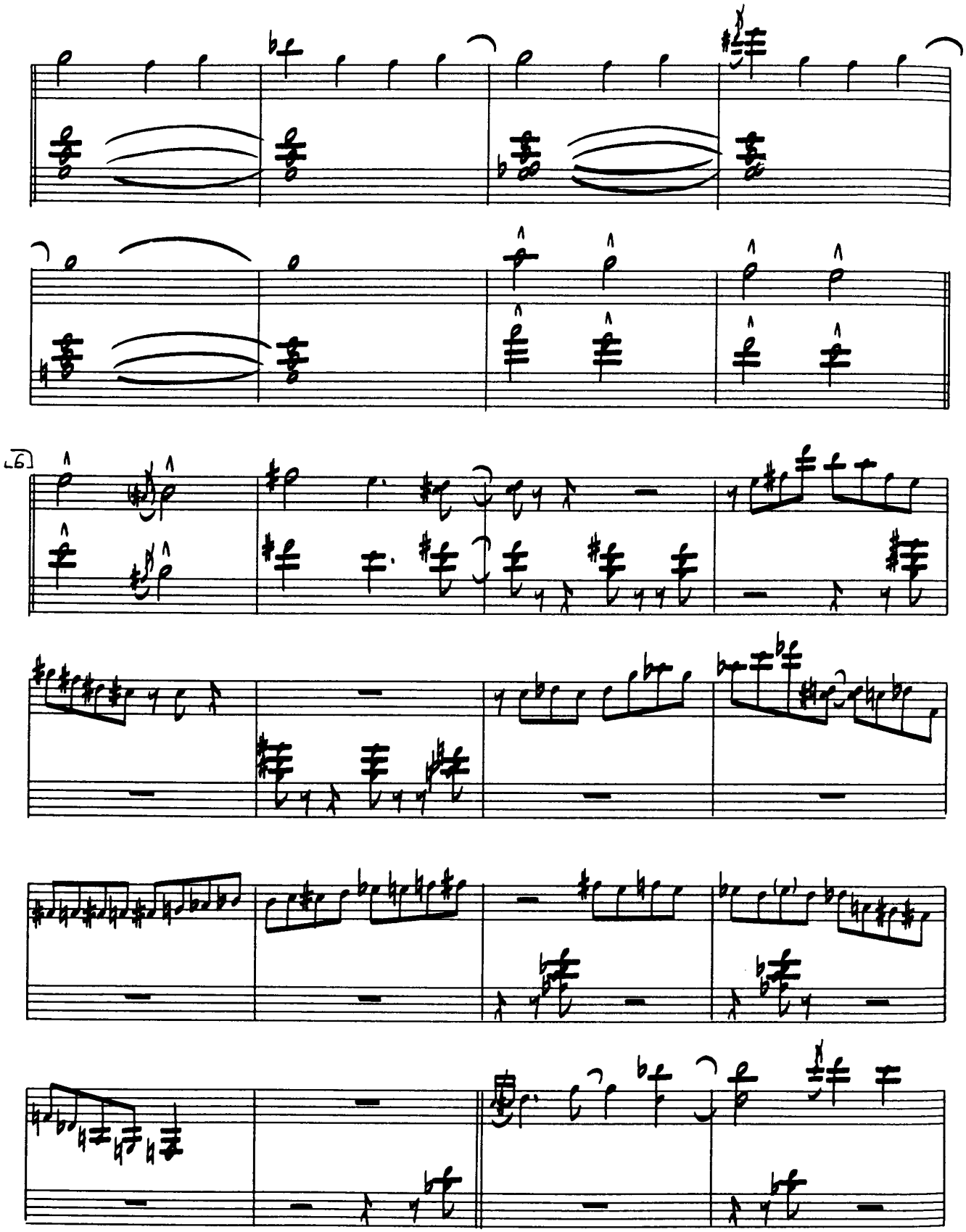
©by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.

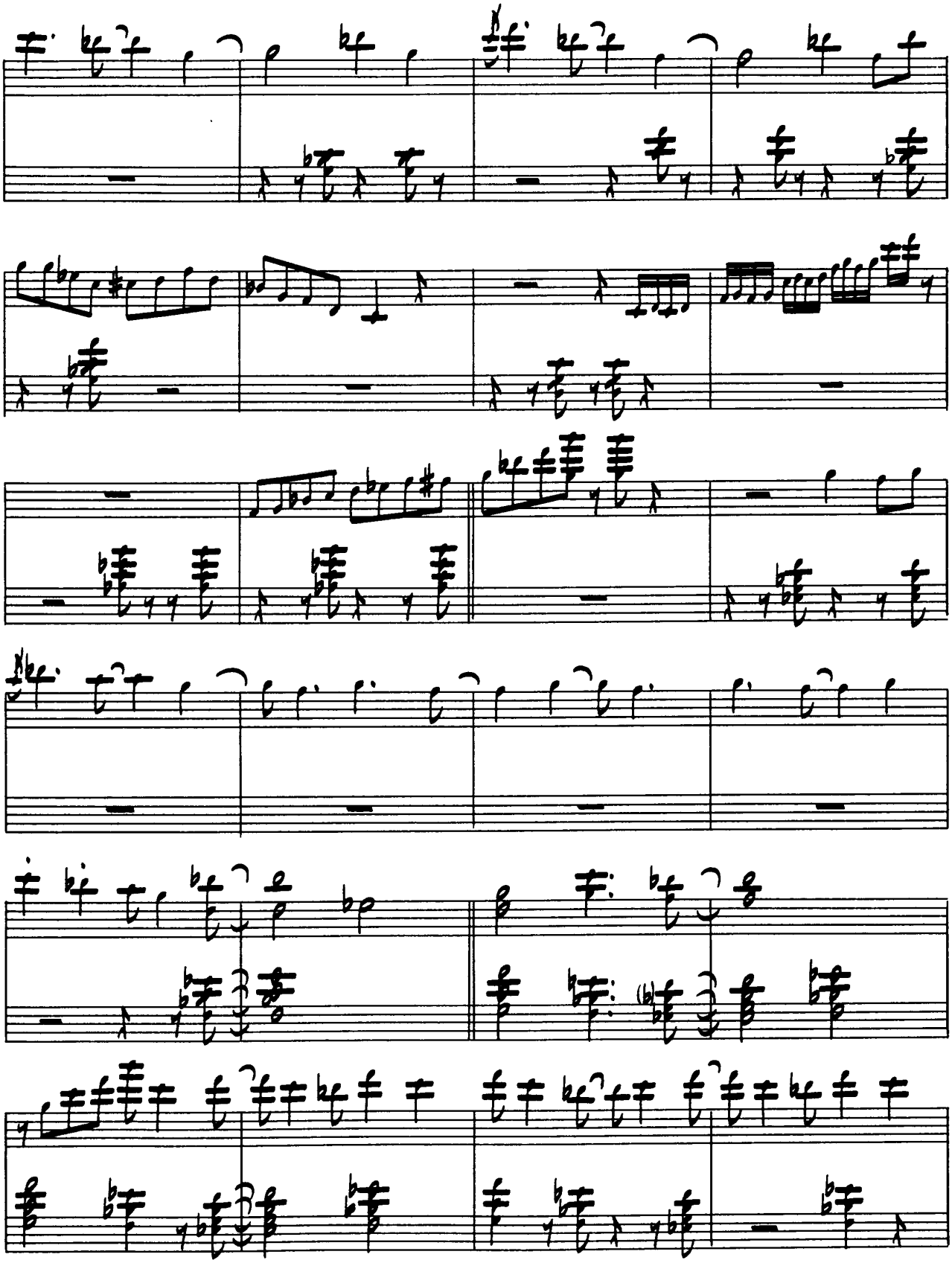

Dm
D♭7
Cm7
onF
Cm7
Gm
A♭Δ7
Dm
E♭Δ7
Em7(-5)
E♭Δ7
Dm7
D♭7
Cm7
F7sus4
Gm
F
(Flora Plurim)
E♭Δ7
F
Gm
F
E♭Δ7
F
1x Only
Gm
A♭+/G

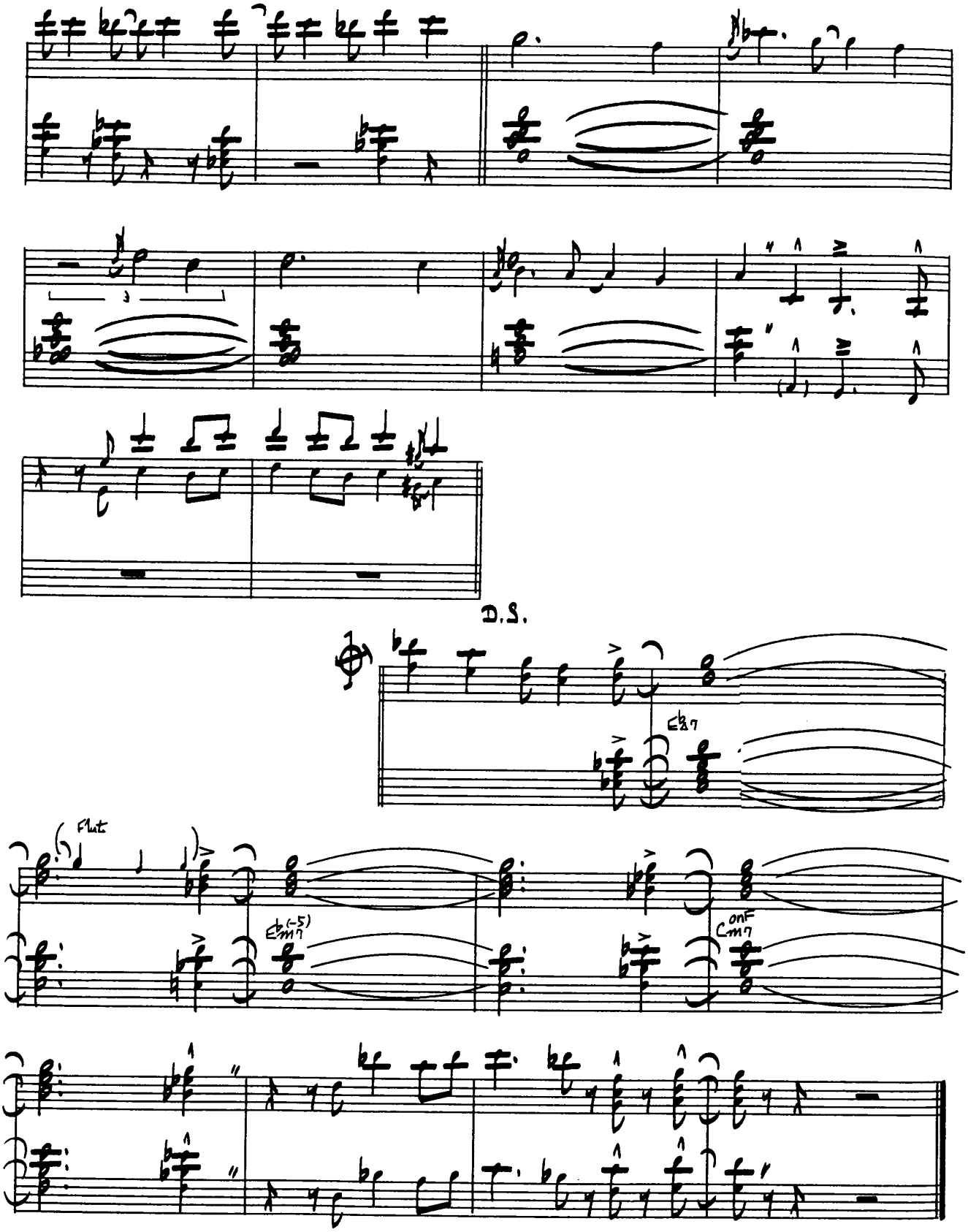

(Joe Farrell)
(Chick. Corea)
Am on C
Am
Am G F
Em
Bm
Col 8va lower unison
F#m
Bbm
Bbm on Ab
Gm7(-5)
C7
Db△7
Gb△7
F
Bb
Eb
Dm
Db7
Cm7
Cm7 on F
Gm
Ab△7
Dm
Eb△7
Em7(-5)
Eb△7
Dm7
Db7
Cm7
F7sus4
8va
Gm
F
Eb△7
F
(2x Only)
Gm
F
Eb△7
F 1x Only
Gm


A♭ onG
Am onC
Am
Am
G
F
Pick-up Solo Ad1:b (Joe. Farrell)
3
4
50
48
8va
5
(L.H)
8va
Loco




6




D.S.
Flute
onF

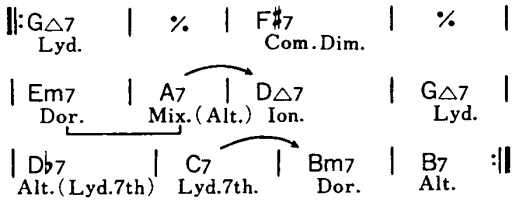
Spain

スペイン by CHICK COREA

IMPROVISATION ADVICE

イントロ部分は、『アランフェス協奏曲』の「第二楽章」のヴァリエイションである。あせらず、ゆっくりと弾くように。Bの頭は1拍ずつ足踏み、または、手拍子をとるような気持で弾こう。Bの10小節目からは、特に休符に注意して弾くように。また、Bの4小節目の左手は、リズムをはっきりと出すように。

アドリブ・パートは、テーマのメロディーとスケールを充分に頭に入れ、自由にアドリブしてみよう。アドリブのコード進行は次に示す。



Bmのところで1度、5度、9度の音からなる和音を使うのは、ギター曲としてのこの曲にとてもよく合っていて、グッド・サウンドである。

Makion

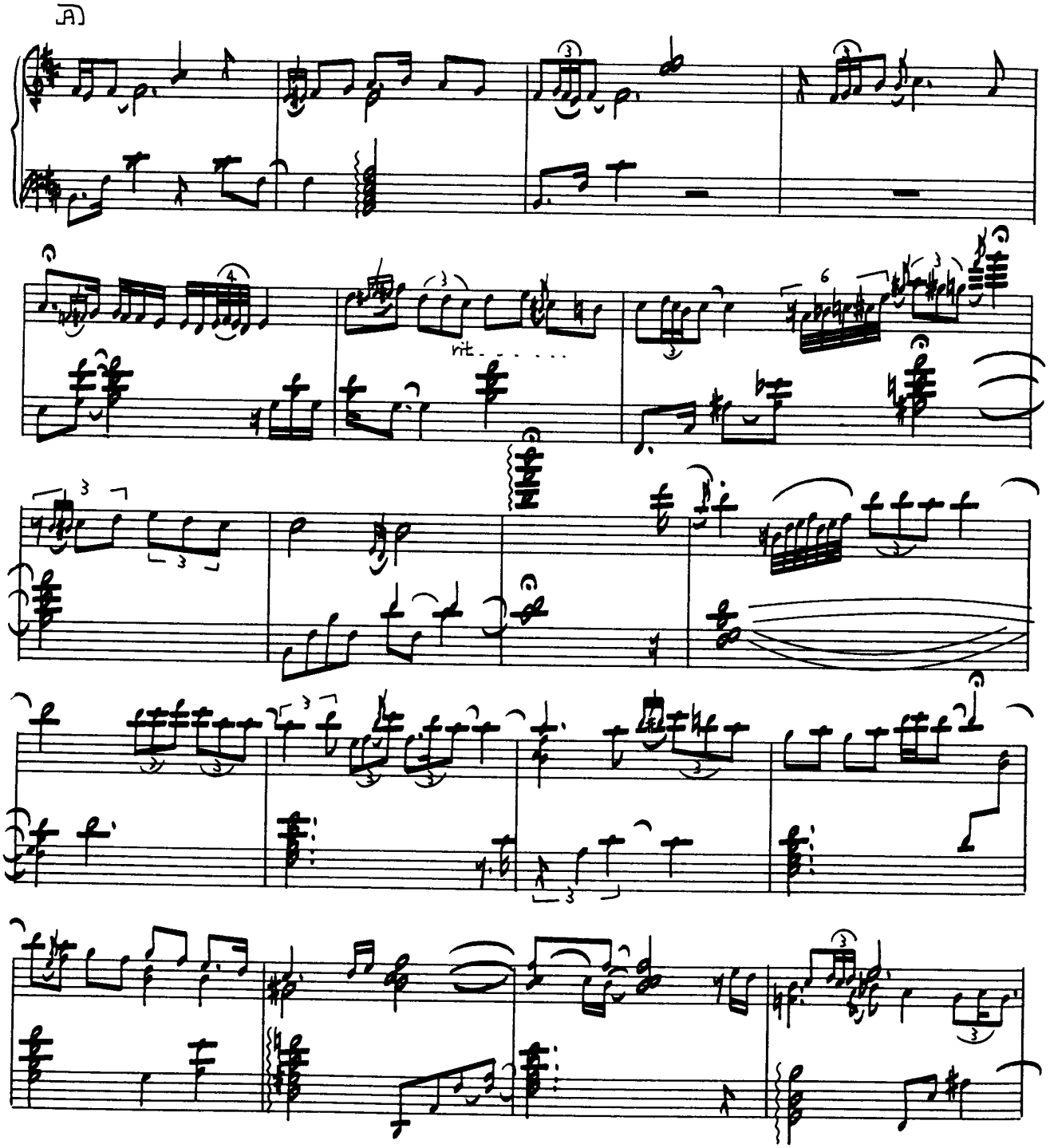
IMPROVISATION

「*Spain*」

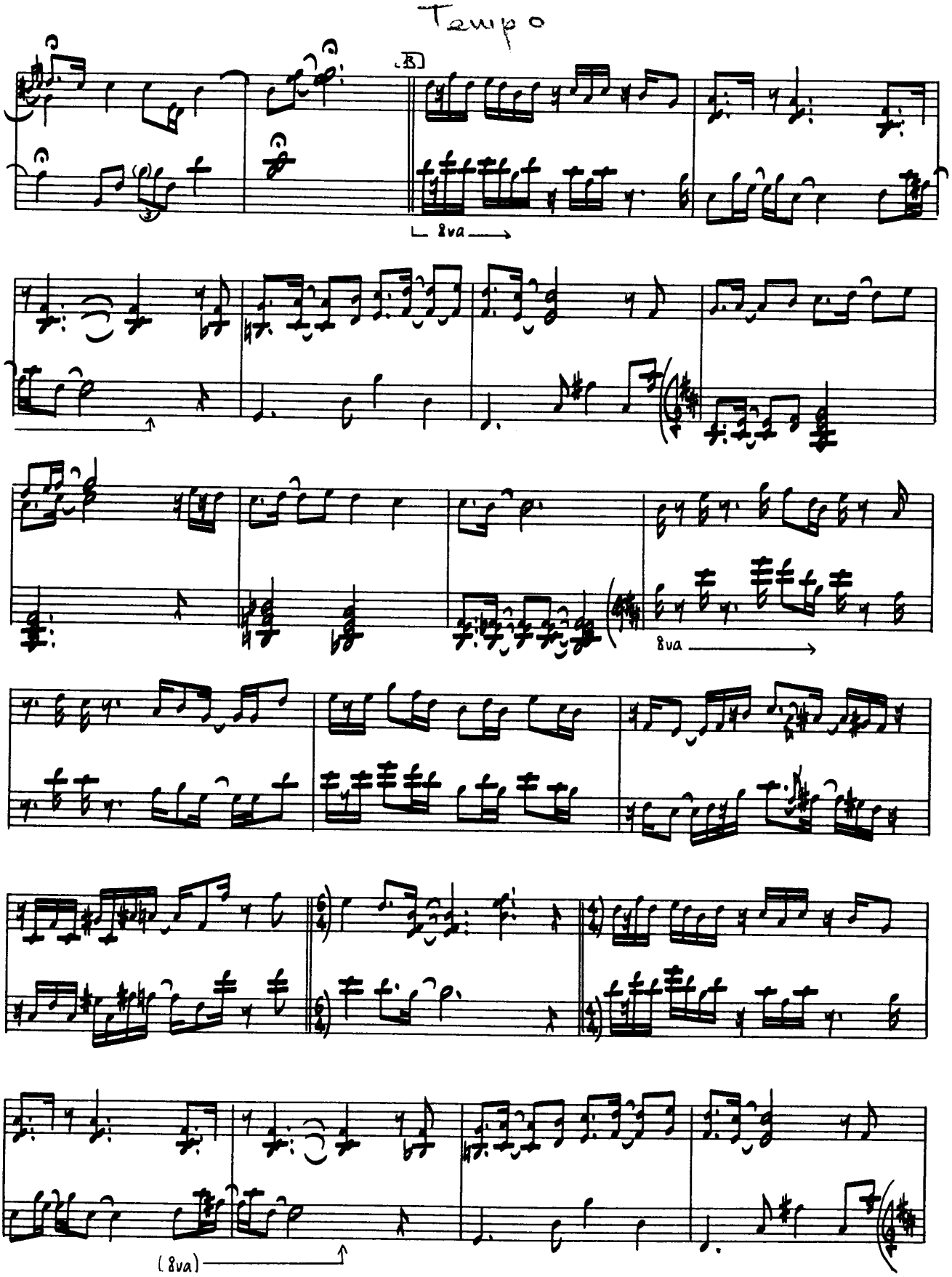
by Chick Corea

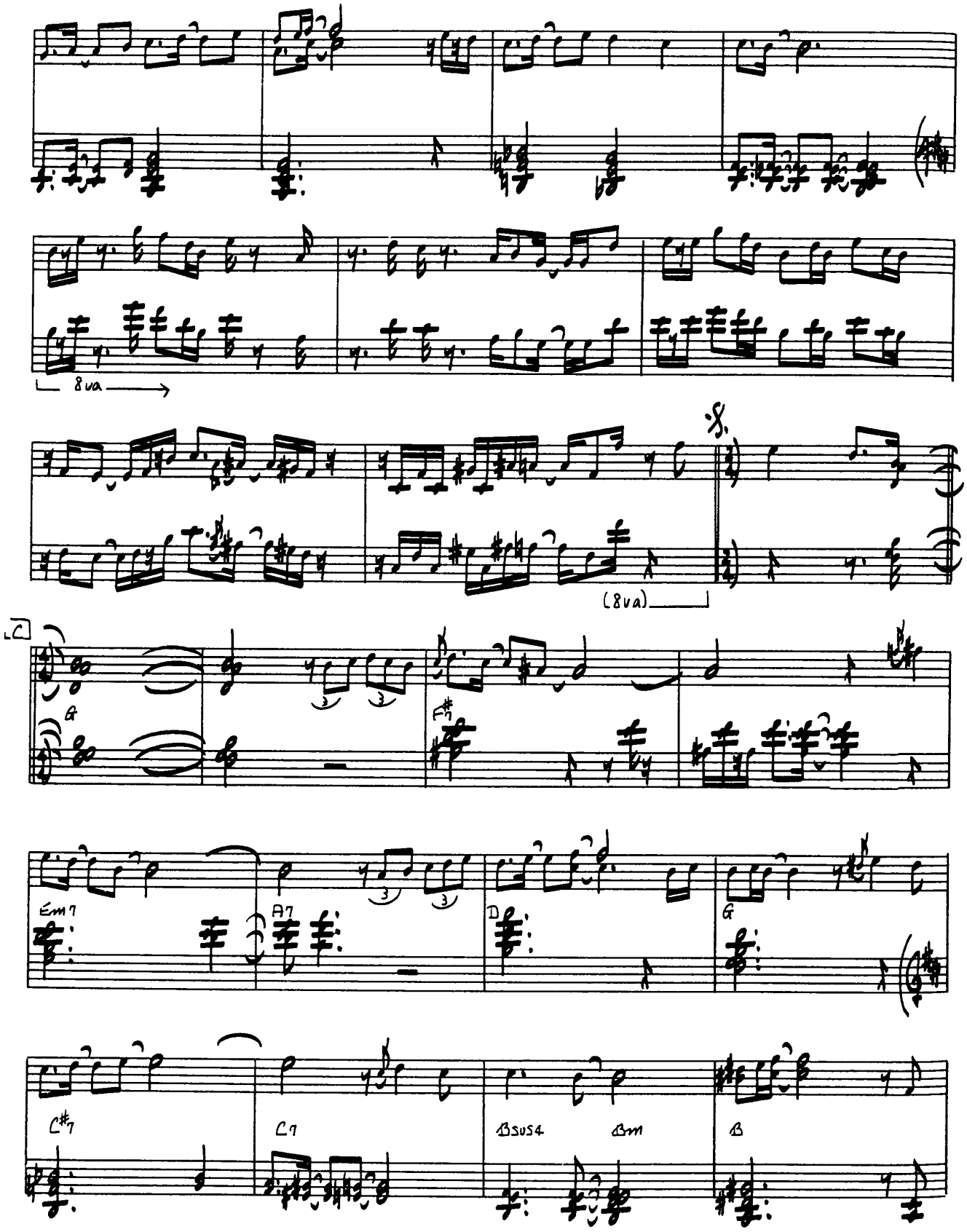
Chick Corea (keyboards)
Joe Farrell (ts, fl)
Stanley Clarke (b)
Airto Moreila (ds, perc)
Flora Purim (vcl)

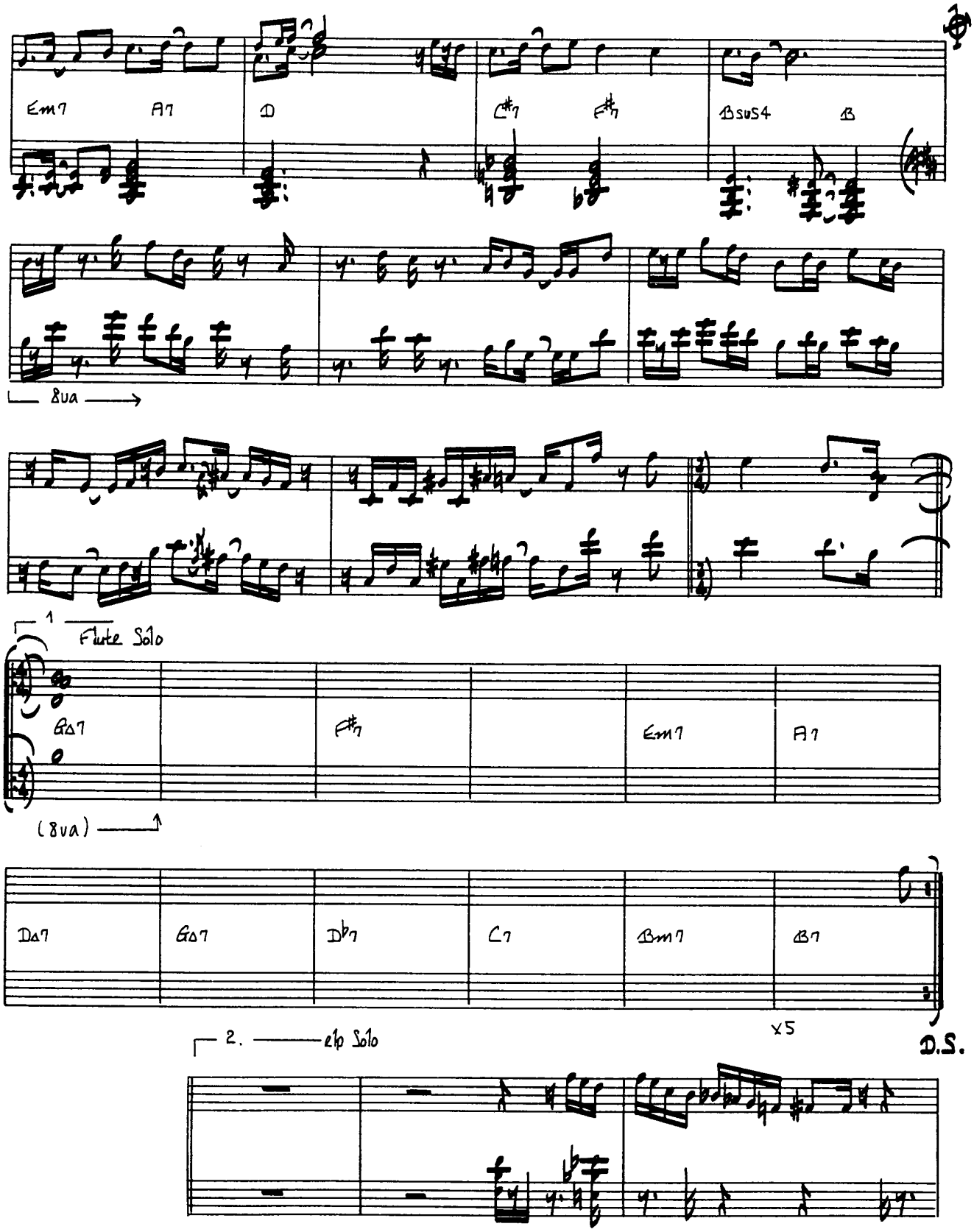
● Record:LIGHT AS A FEATHER (Polydor PD–5525, Polydor MPF–1171)
Date:Sep., Oct. 1972

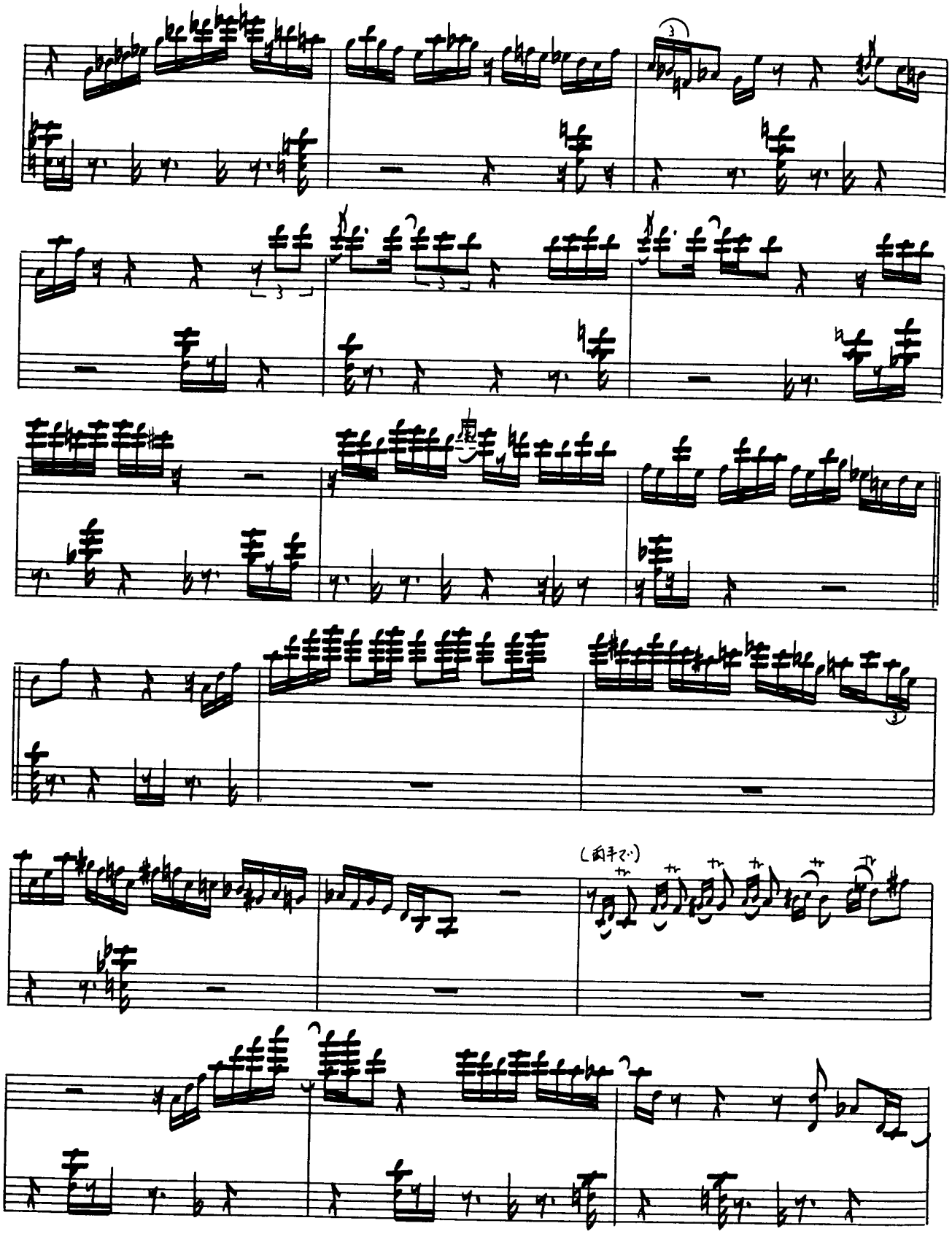


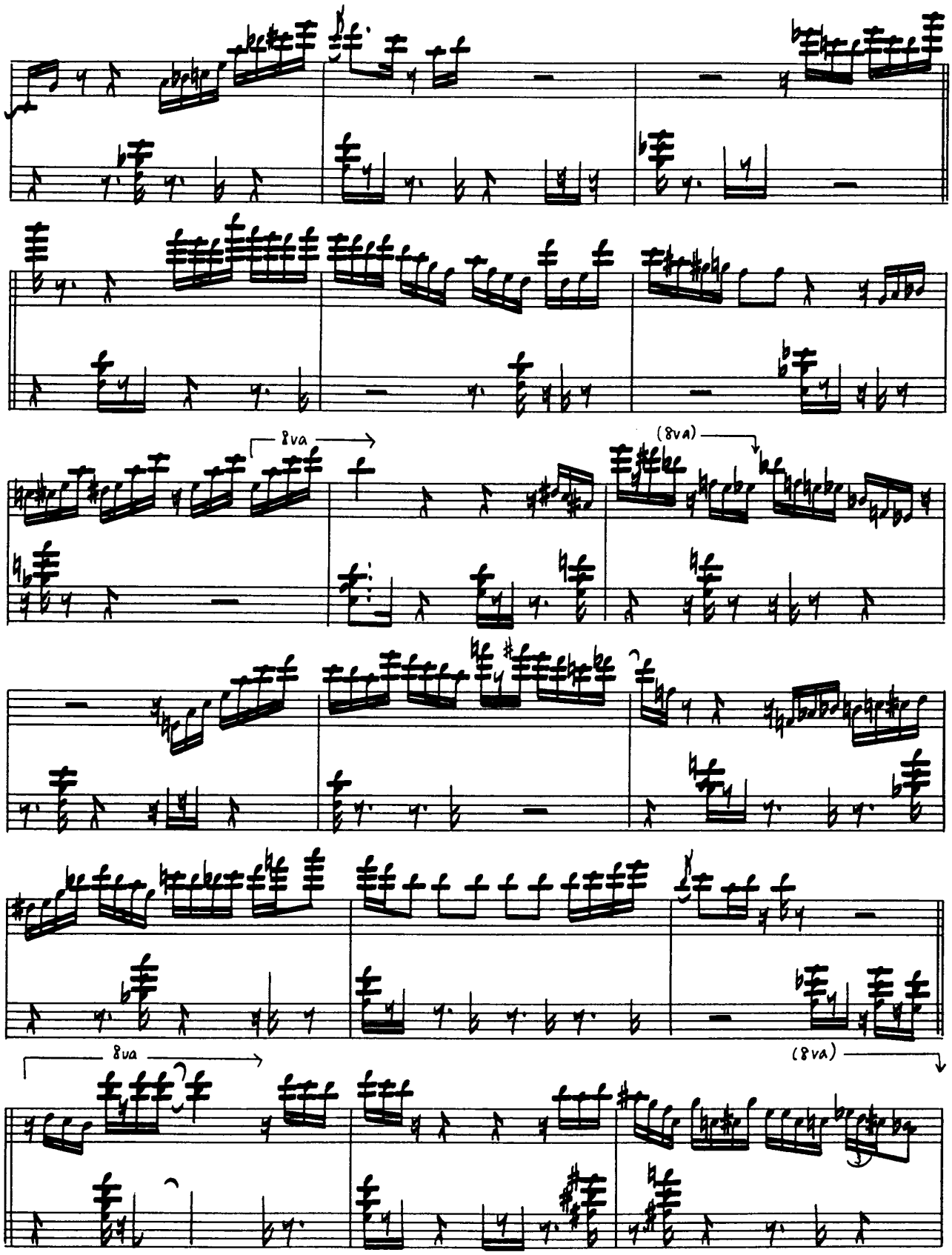
©1973 by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.

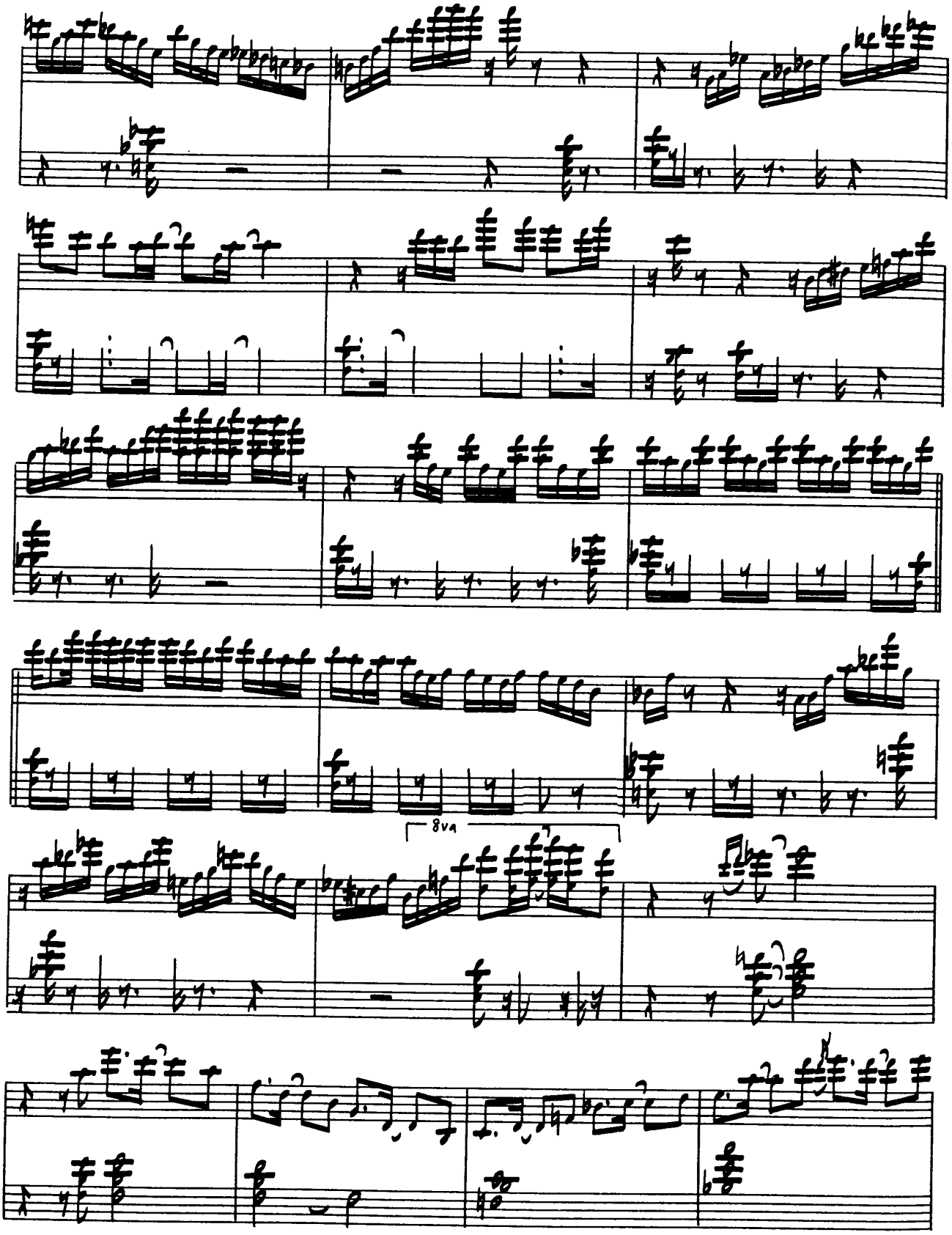

Tempo
B
8va
8va
(8va)

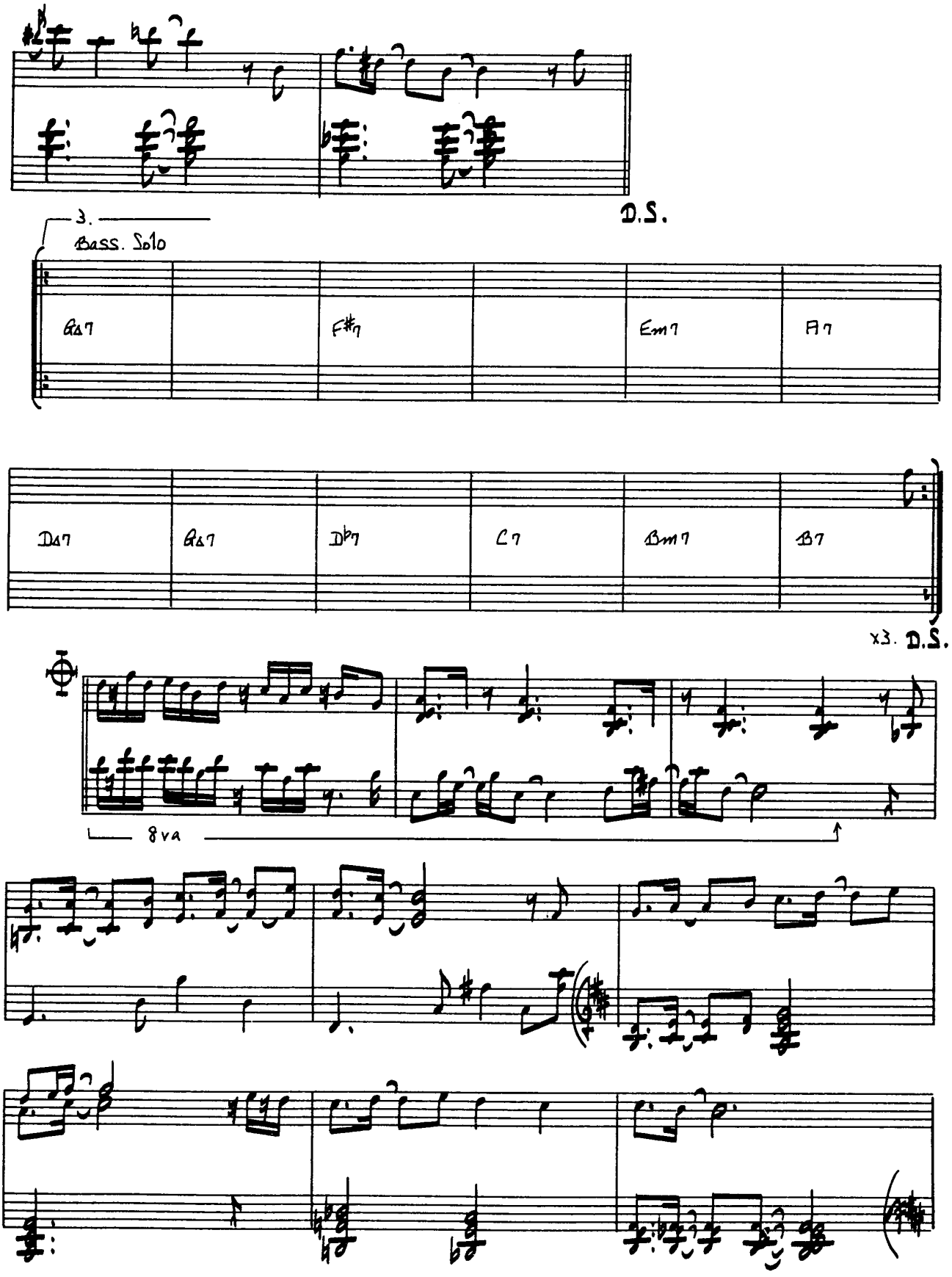

8va
(8va)
G
F#7
Em7
A7
D
G
C#7
C7
Bsus4
Bm
B

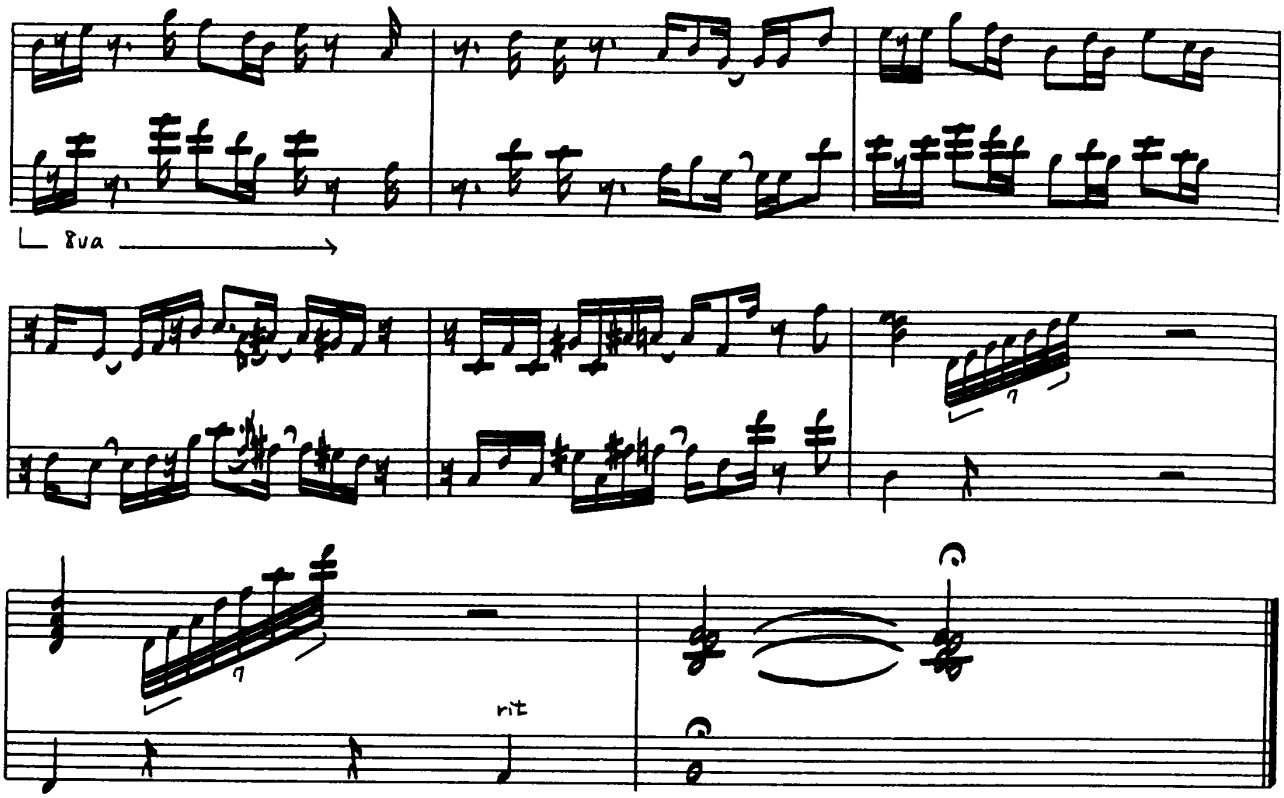

Em7
A7
D
C#7
F#7
Bsus4
B
8va
1
Flute Solo
G△7
F#7
Em7
A7
(8va)
D△7
G△7
D♭7
C7
Bm7
B7
x5
D.S.
2.
Alto Solo


(両手で)


8va
(8va)
8va
(8va)


8va


D.S.
3.
Bass. Solo
G△7
F#7
Em7
A7
D△7
G△7
D♭7
C7
Bm7
B7
x3. D.S.
8va


8va
rit

No Mystery

ノー・ミステリー　by CHICK COREA

IMPROVISATION ADVICE

変拍子を使い分け、変化に富んだ構成になっている。

最初の6小節目Bの部分から、D音のペダル・トーンが続き、10小節目からは、そのペダル・トーンの上をメジャー・セブンス・コードが動き、興味深いサウンドになっている。曲全体のストーリーをよく感じて、ダイナミックスに充分気を配るように。

Cの14小節目から始まる部分の左手のオクターブ音は、体全体で弾くように。

Dからは、最初の主題のメロディーがハーモニーとなって現われるので、リード・ラインのメロディーをうまく生かすように弾いてほしい。

Eから始まるベースのアルコ・ソロを、ピアノの低音部を使って演奏してみてほしい。この時、右手でコードのアルペジオを弾くとよいサウンドを得ることができる(アルペジオの使い方のヒントは、その前の小節にあるので自分で研究すること)。

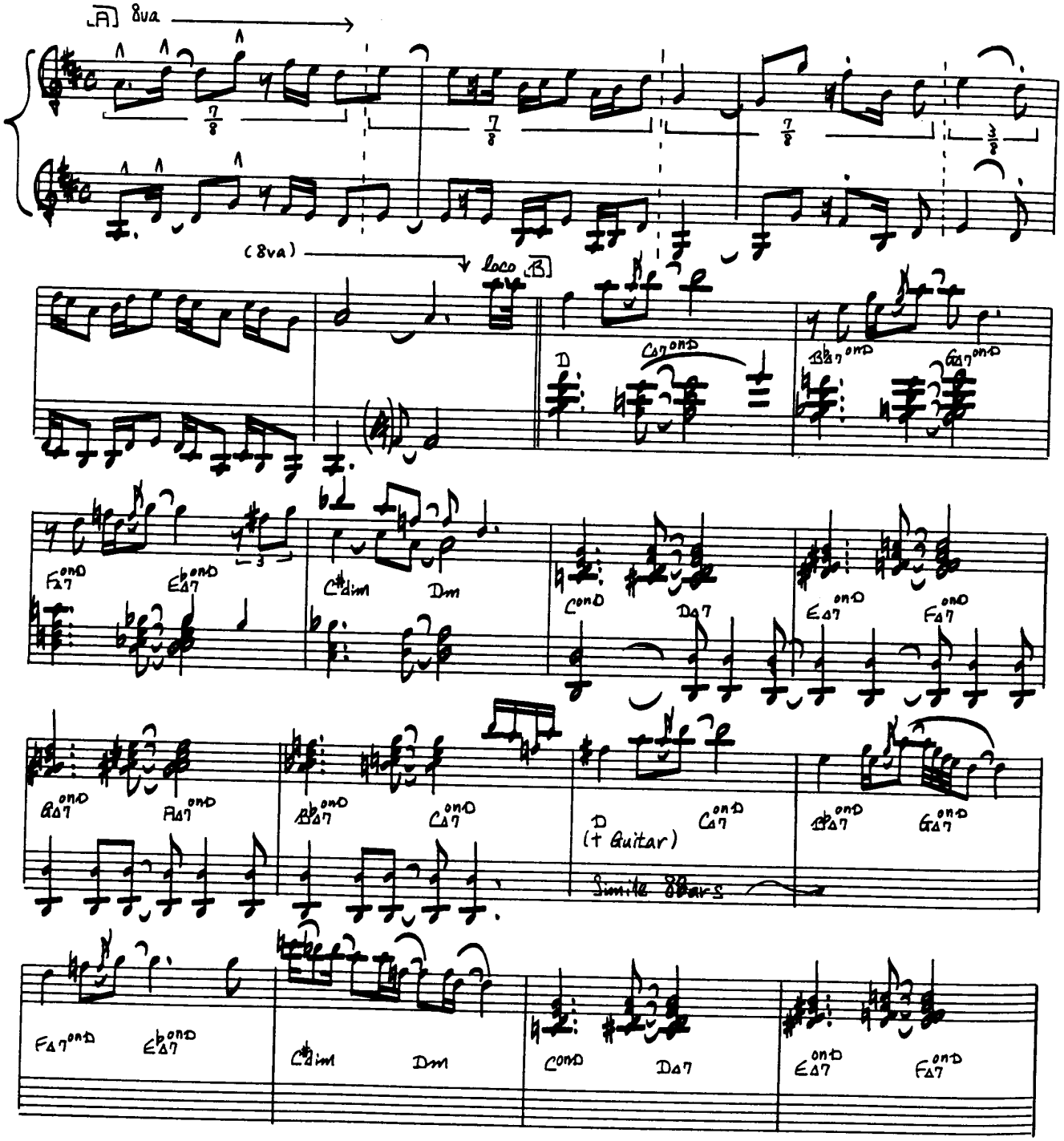
IMPROVISATION

「No Mystery」

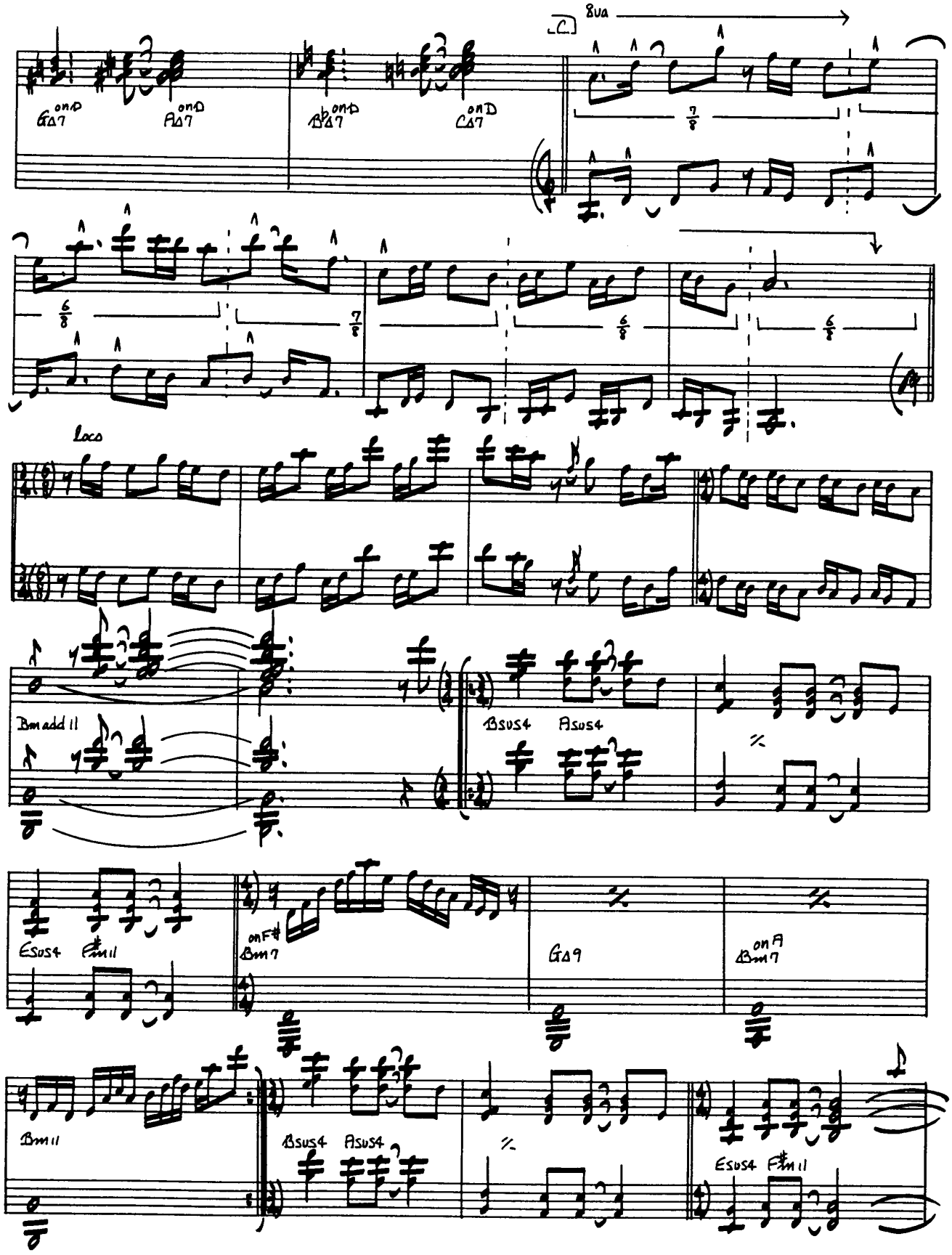
by Chick Corea

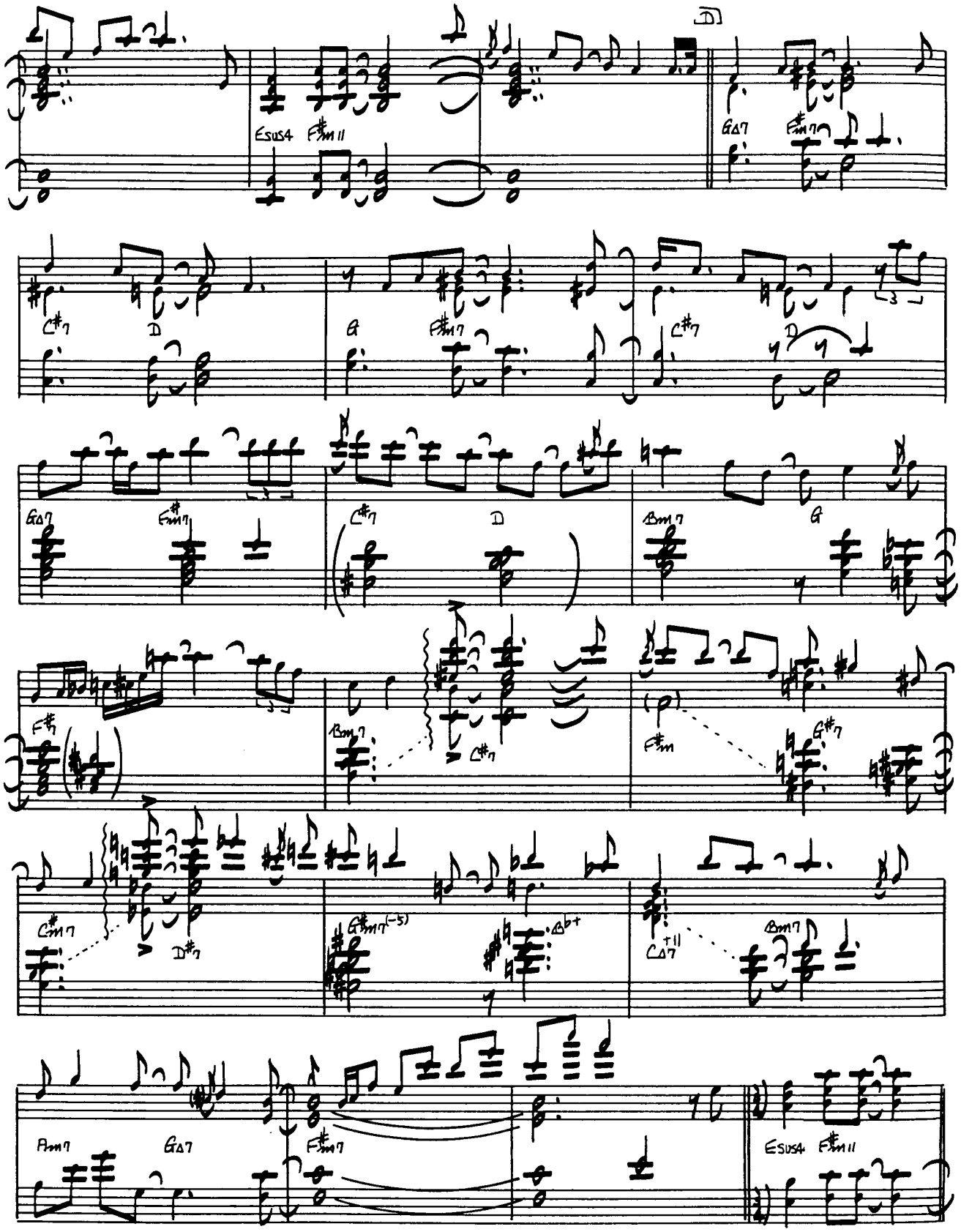
Chick Corea (keyboards)
Stanley Clarke (b,el–b,keyboards)
Al Di Meola(g,el–g)
Lenny White(ts,perc)

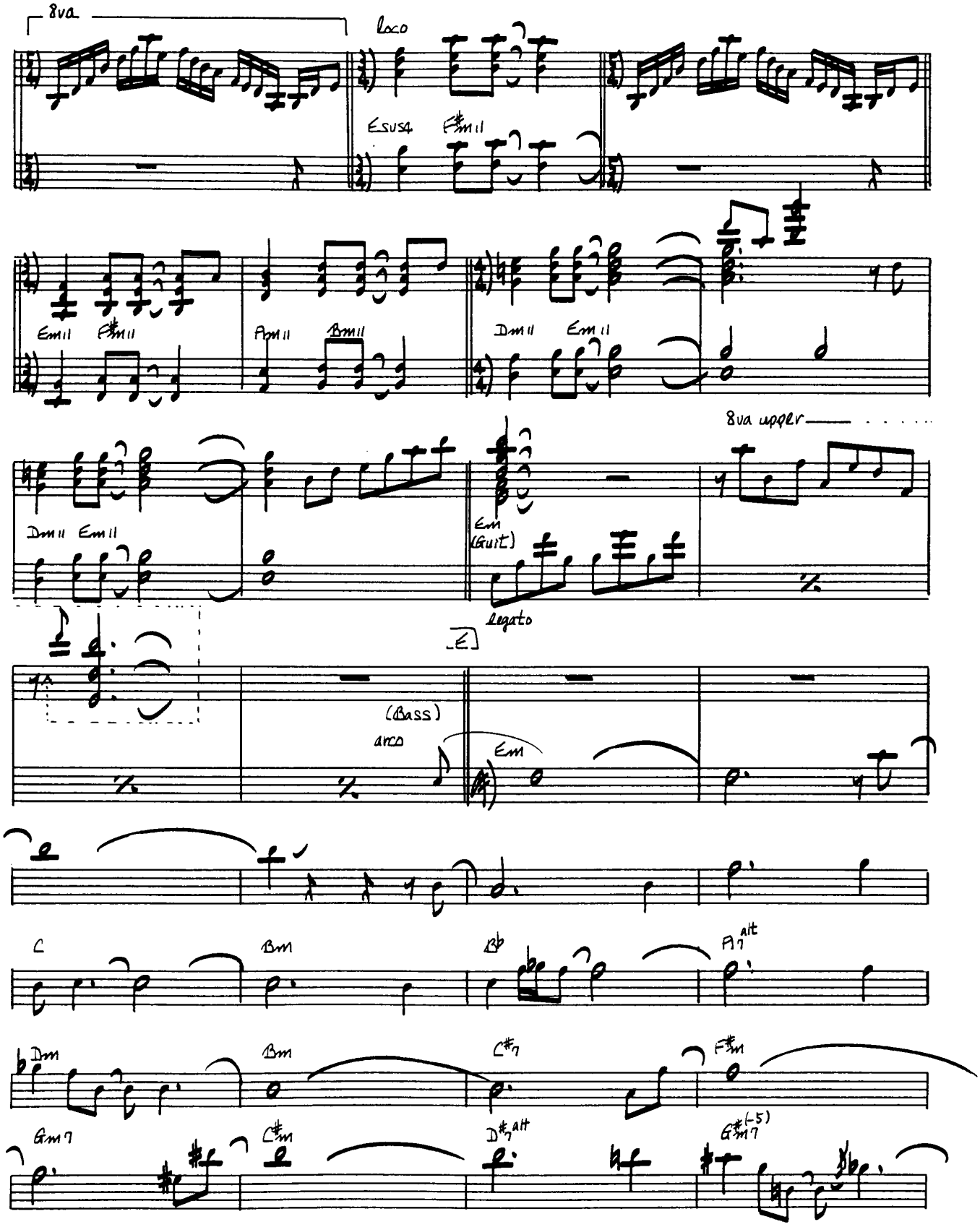
Record:NO MYSTERY/RETURN TO FOREVER
(Polydor PD–6512, Polydor MPF–1174)
Date:Jan. 1975

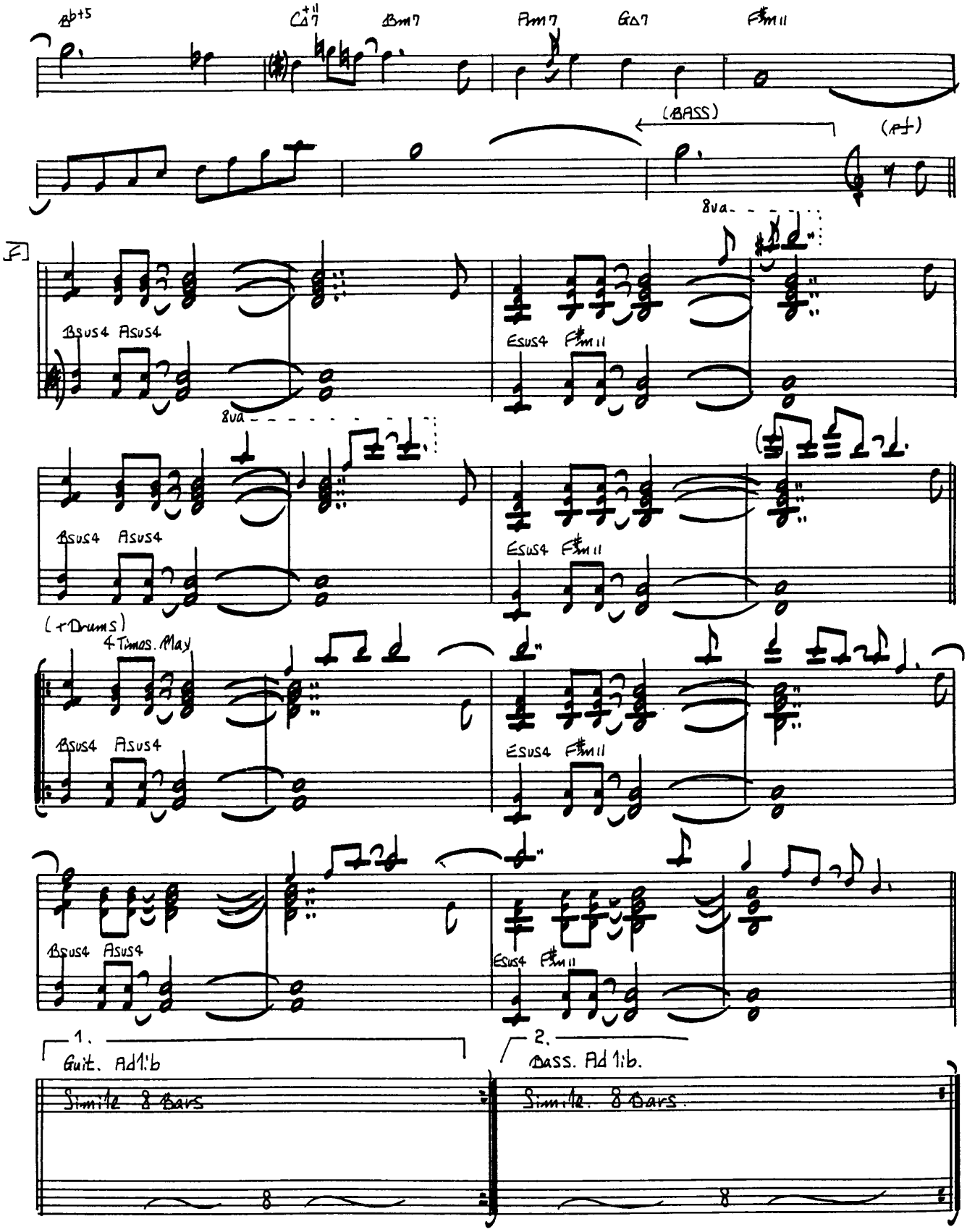


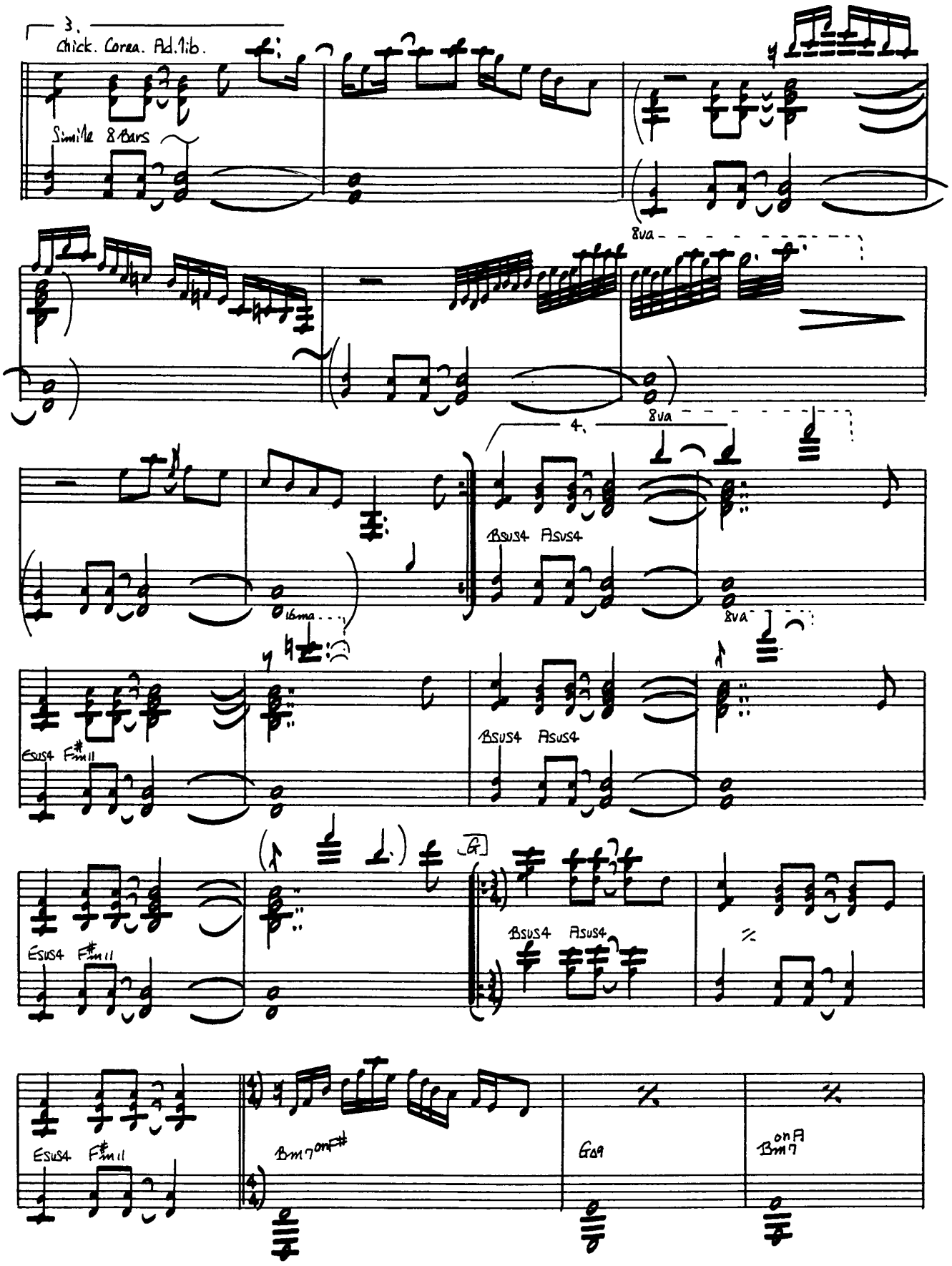
© by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.

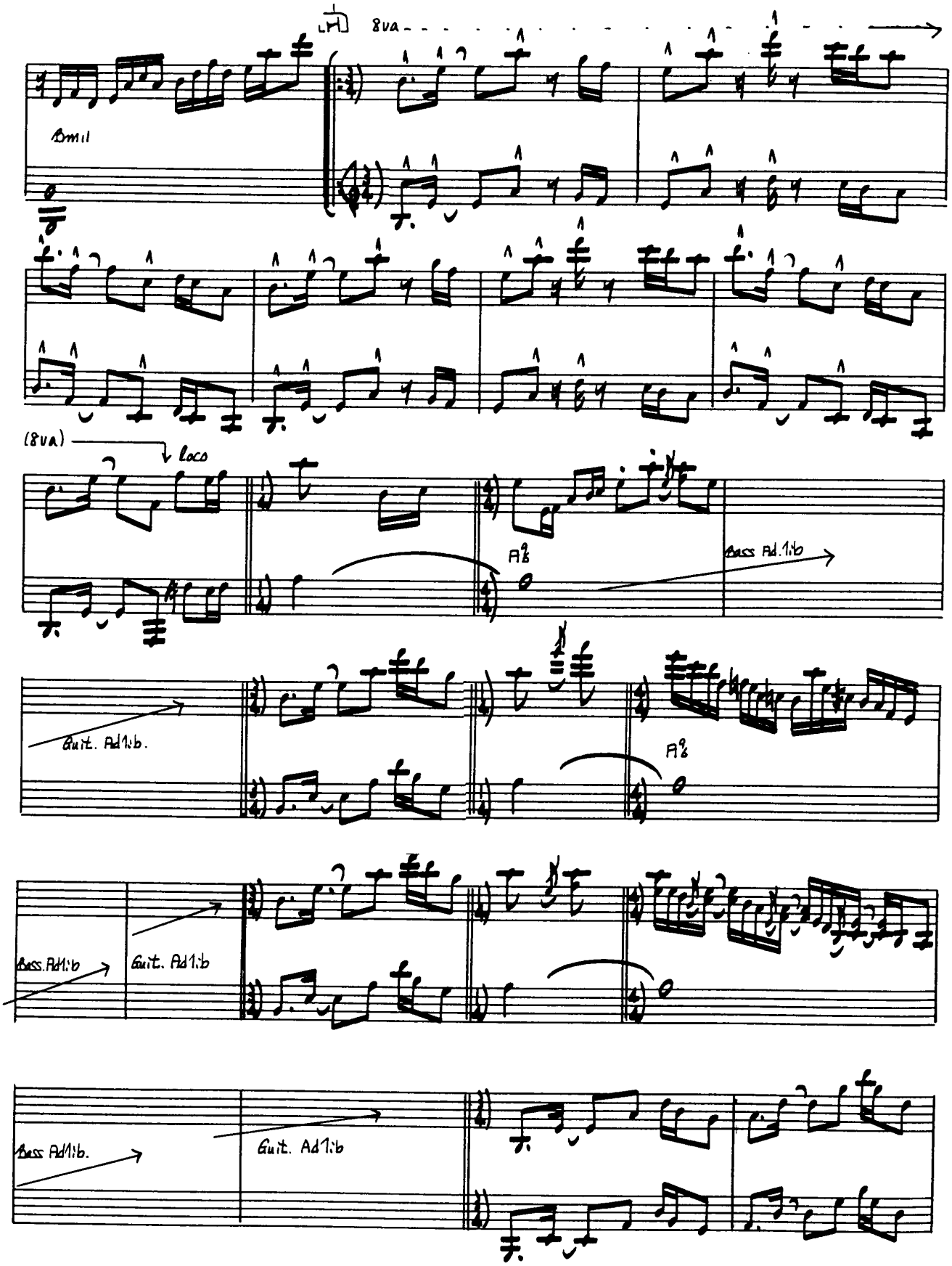

8va
G♯Δ7 on D
A♯Δ7 on D
B♭Δ7 on D
CΔ7 on D
loco
Bmadd11
Bsus4
Asus4
Esus4
F♯m11
Bm7 on F♯
GΔ9
Bm7 on A
Bm11
Bsus4
Asus4
Esus4
F♯m11

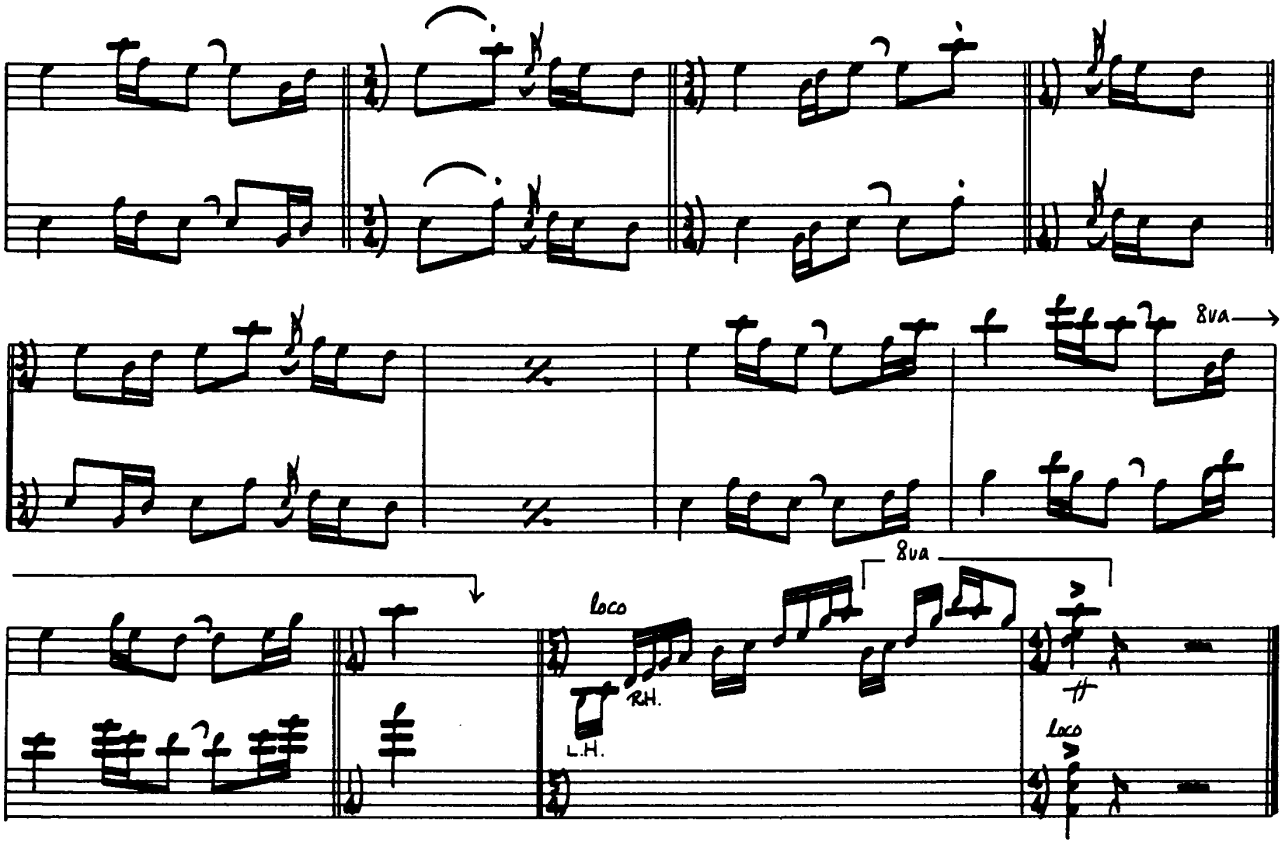

Esus4
F♯m11
GΔ7
F♯m7
C♯7
D
G
F♯m7
C♯7
D
GΔ7
F♯m7
C♯7
D
Bm7
G
F♯7
Bm7
C♯7
F♯m
G♯7
C♯m7
D♯7
G♯m7(-5)
BΔb+
CΔ7+11
Bm7
Am7
GΔ7
F♯m7
Esus4
F♯m11


8va
loco
Esus4
F#m11
Em11
F#m11
Am11
Bm11
Dm11
Em11
Dm11
Em11
8va upper
Em
(Guit)
legato
E
(Bass)
arco
Em
C
Bm
B♭
A7alt
Dm
Bm
C#7
F#m
Gm7
C#m
D#7alt
G#m7(-5)


B♭+5
C♯11
Bm7
Am7
GΔ7
F♯m11
(BASS)
(Pf)
8va
F
Bsus4 Asus4
Esus4 F♯m11
8va
Bsus4 Asus4
Esus4 F♯m11
(+Drums)
4 Times. May
Bsus4 Asus4
Esus4 F♯m11
Bsus4 Asus4
Esus4 F♯m11
1.
Guit. Ad lib
Simile 8 Bars
2.
Bass. Ad lib.
Simile. 8 Bars.


3.
Chick. Corea. Ad.lib.
Simile 8Bars
8va
4.
8va
Bsus4 Asus4
16ma
8va
Esus4 F#m11
Bsus4 Asus4
Esus4 F#m11
Bsus4 Asus4
Esus4 F#m11
Bm7 on F#
G69
Bm7 on A


8va
Bmil
(8va)
loco
A%
Bass Ad.lib
Guit. Ad.lib.
A%
Bass.Ad.lib
Guit. Ad.lib
Bass Ad.lib.
Guit. Ad.lib


8va
loco
8va
RH.
L.H.
loco

五木音

Soft And Gentle

ソフト・アンド・ジェントル　by CHICK COREA

IMPROVISATION ADVICE

トライアッドを全音ステップさせての転調がおもしろい曲である。

Ⓑの8小節目から注目すると、

Dm→Dm7(on C)→Dm7(on B)→B♭△7→E♭△7→B♭7(on A♭)→C7(on B♭)→D7(on C)→E7(on D)→F△7(on E)……

この進行での低音部の動きは、

D→C→B→B♭→E♭→A♭→B♭→C→D→E

という動きになり、全音、半音、4度をうまく組み合わせたラインである。簡単に書くと、Dm→F△7(on E)（Eフリジアン）となり、ふたつのコードの間にこれだけの道筋を含んでいる。

この曲でチックは、メロディックな部分、ハーモニーの動きのおもしろさ、リズミックなおもしろさをうまく使い分けている。各々の組み合わせもおもしろい。また、Ⓑの7小節目は、この曲唯一のドミナント・モーションをしている部分である。

| Em7(−5) A7 | Dm |

この曲全体にあらわれる主な進行法をあげてみよう。

① トライアッドの変化 / ペダル・トーン（一定）→

② ドミナント・モーション

③ 共通のトライアッド（一定） / 低音部の変化→

④ トライアッドの変化 / 低音部の変化→

（トライアッドと低音の距離は一定、また、動きの間隔も一定）

⑤ 2種のトライアッドの反復 / ペダル・トーン→

Makion

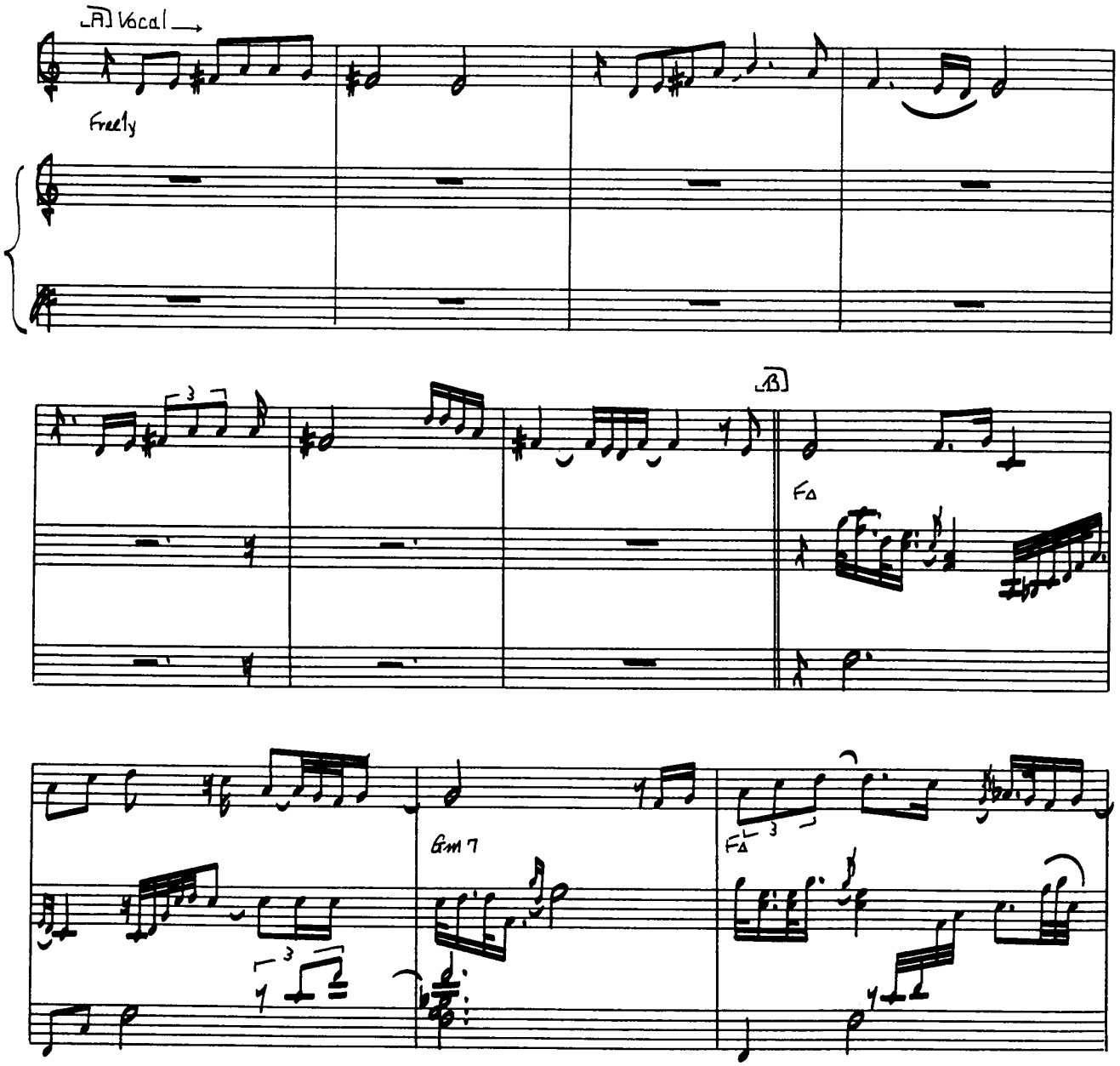
IMPROVISATION

「Soft And Gentle」

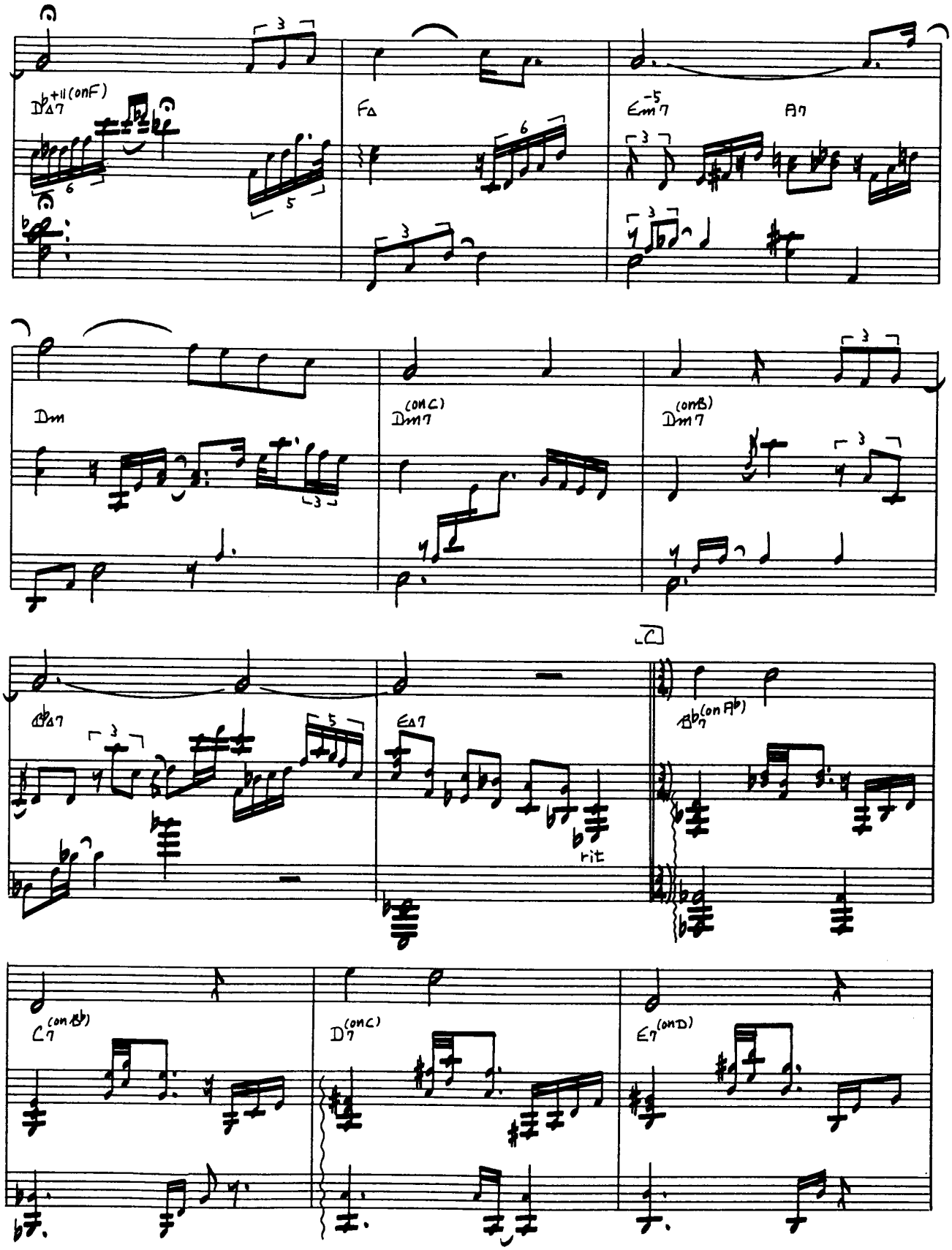
by Chick Corea

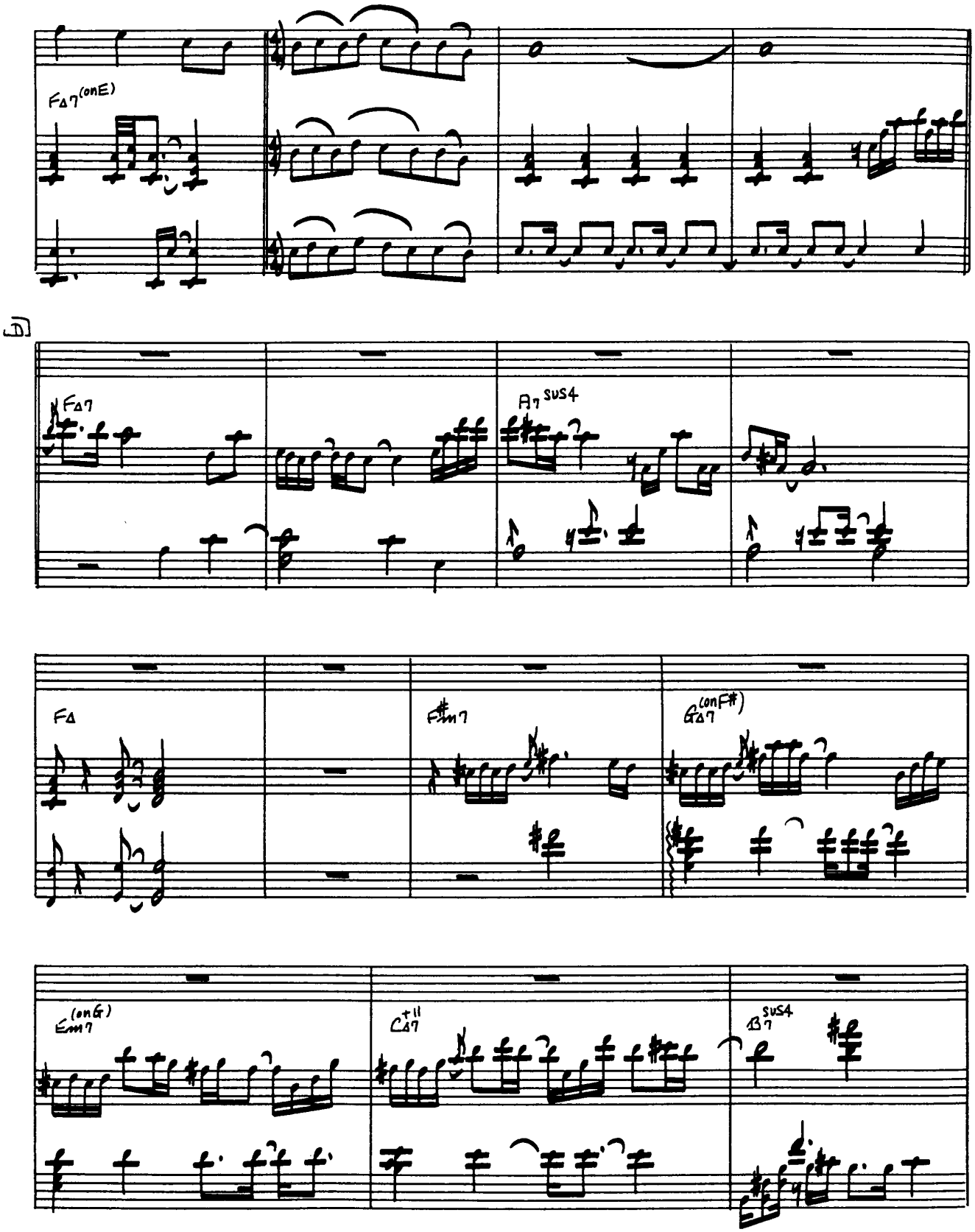
Chick Corea(keyboards)
Eddie Gomez(b)
Anthony Jackson(b-g)
Steve Gadd(ds)
Joe Farrell(ss,english-horn)
Fred Sherry(cello)
Ida Kavatian, Annie Kavatian(violin)
Louise Shouman(viola)
Bill Watrous(tb)
Danny Cahn, Bob Millikan,
John Gatchell(tp)
Gayle Moran(vcl)

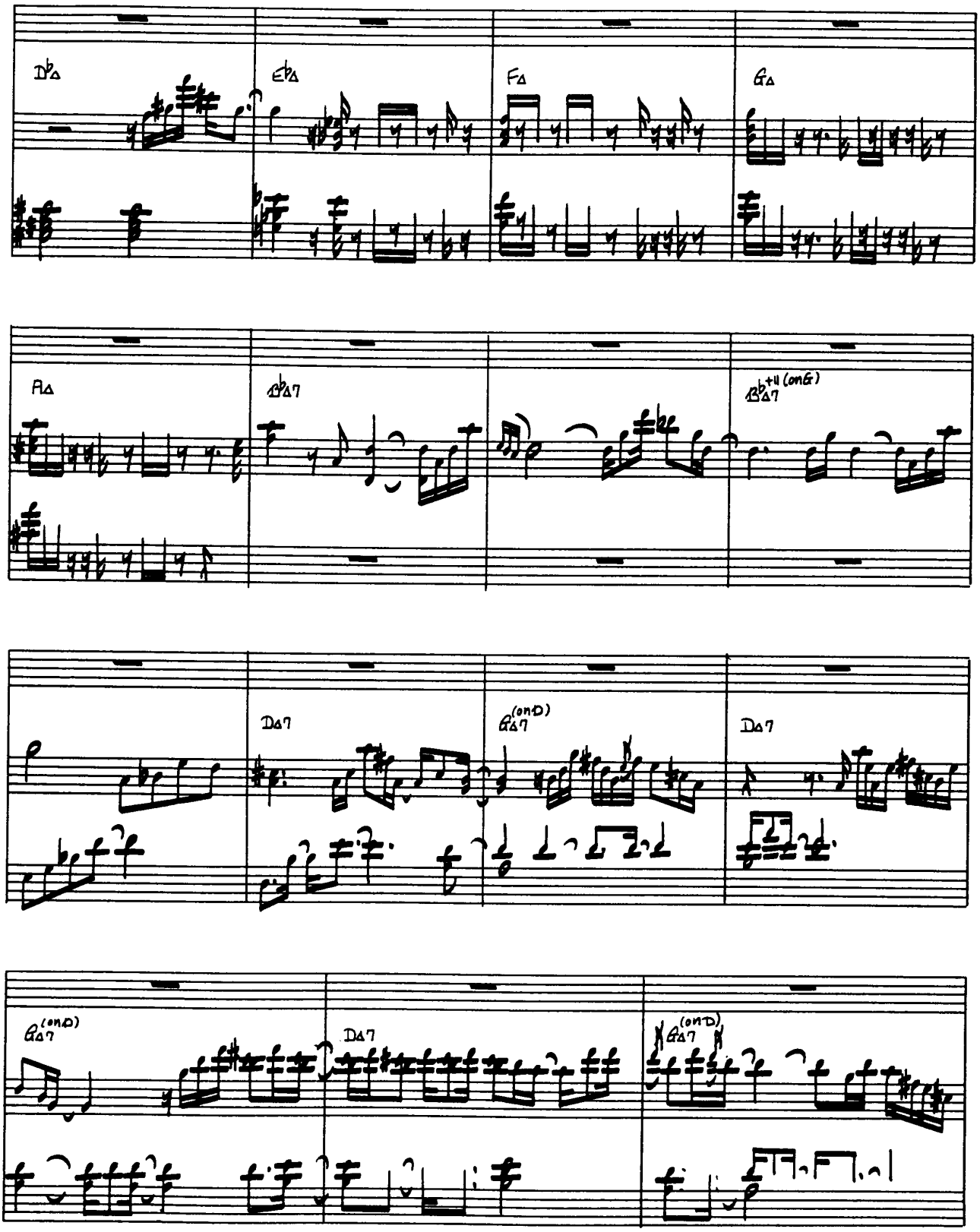
Record:THE LEPRECHAUN (Polydor PD-6062 , Polydor MPF-1175)

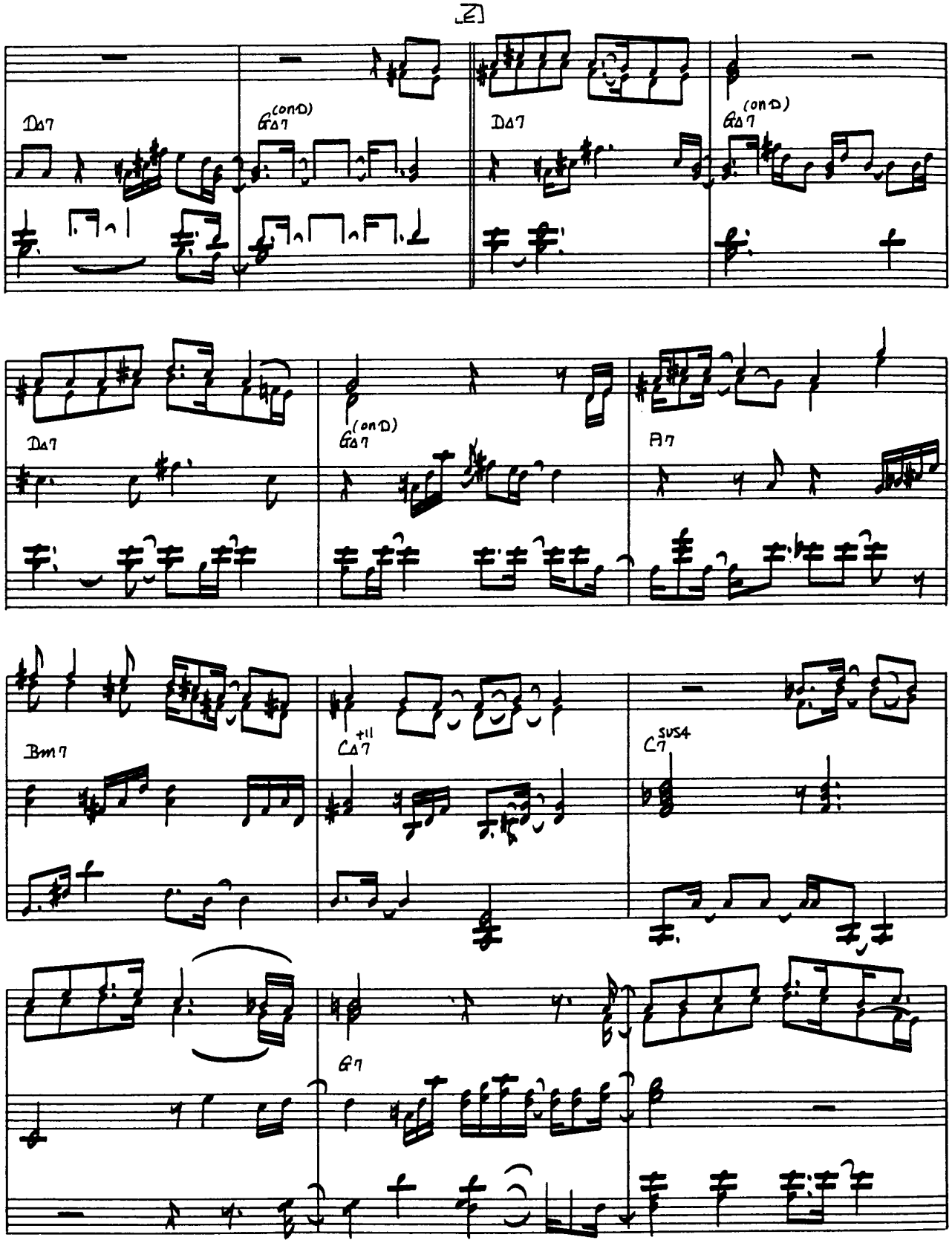


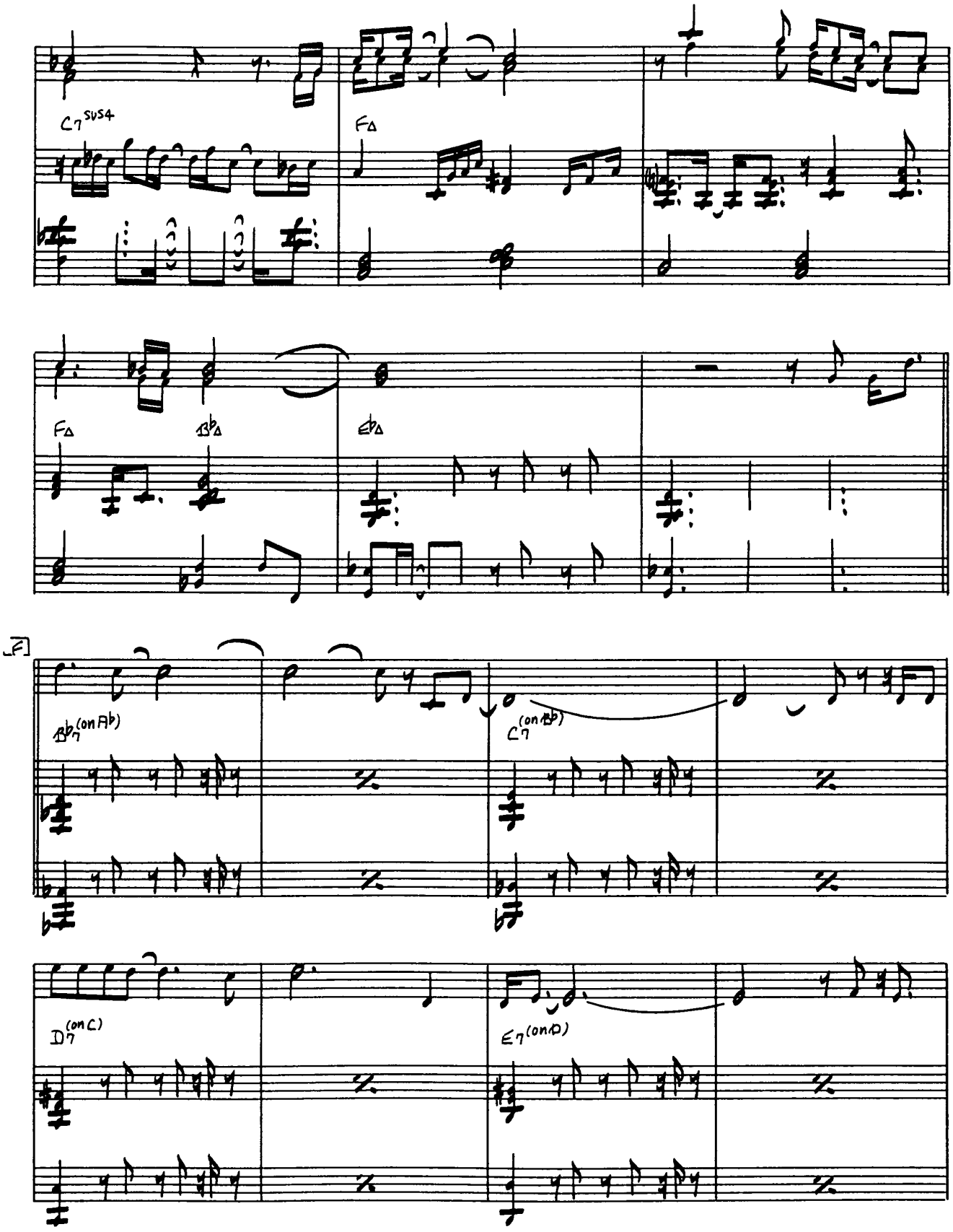
© by Litha Music Co.
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.

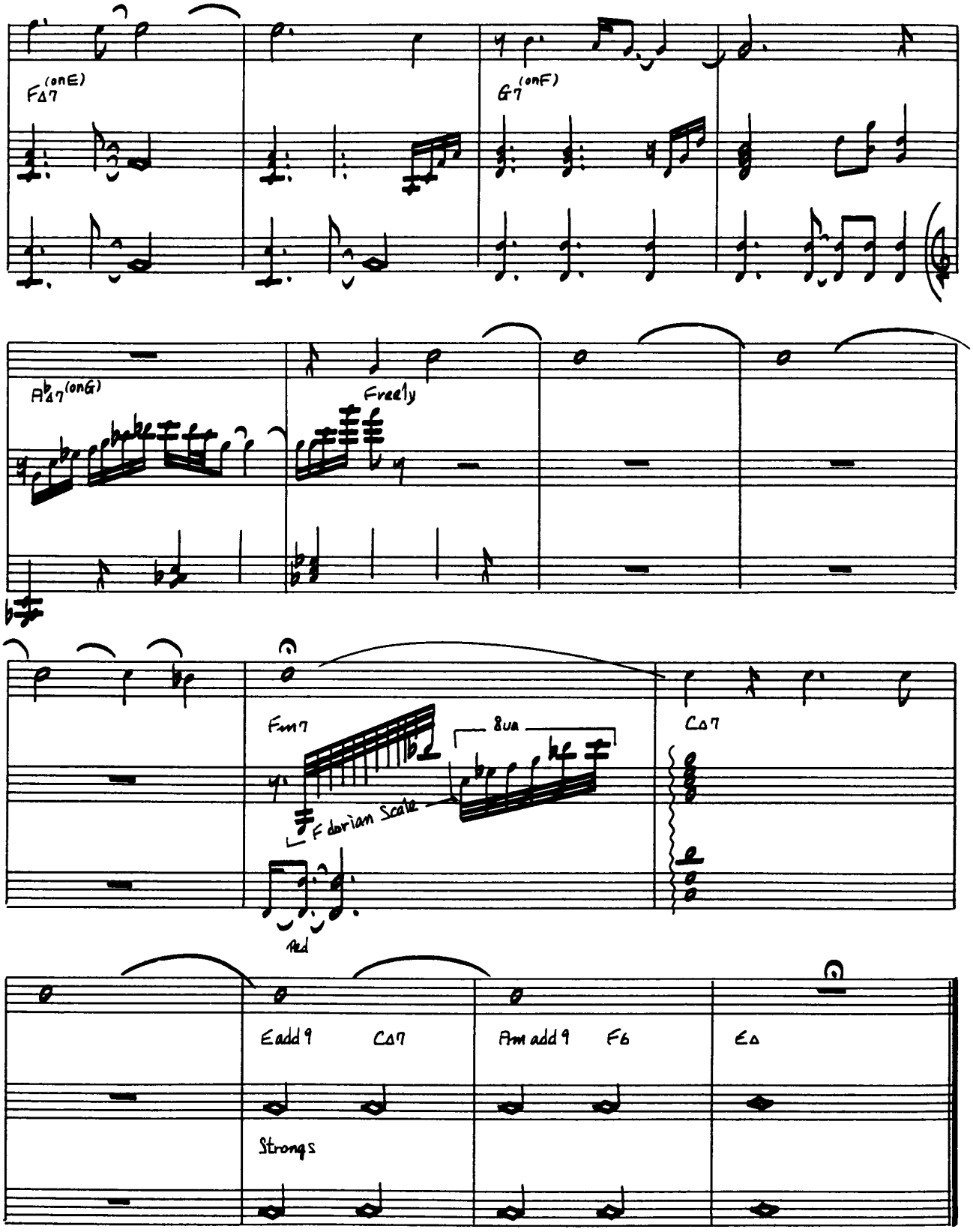

D♭△7 +11 (on F)
F△
E♭m7 -5
A7
Dm
Dm7 (on C)
Dm7 (on B)
C
B♭△7
E△7
rit
B♭7 (on A♭)
C7 (on B♭)
D7 (on C)
E7 (on D)


FΔ7(onE)
D
FΔ7
B7sus4
FΔ
F#m7
GΔ7(onF#)
Em7(onG)
CΔ7+11
B7sus4


D♭△
E♭△
F△
G△
A△
B♭△7
B♭+11 (onG)
D△7
G△7 (onD)
D△7
G△7 (onD)
D△7
G△7 (onD)


E
DΔ7
GΔ7 (onD)
DΔ7
GΔ7 (onD)
DΔ7
GΔ7 (onD)
A7
Bm7
CΔ7 +11
C7 sus4
G7


C7sus4
FΔ
FΔ
B♭Δ
E♭Δ
F
B♭7(on A♭)
C7(on B♭)
D7(on C)
E7(on D)

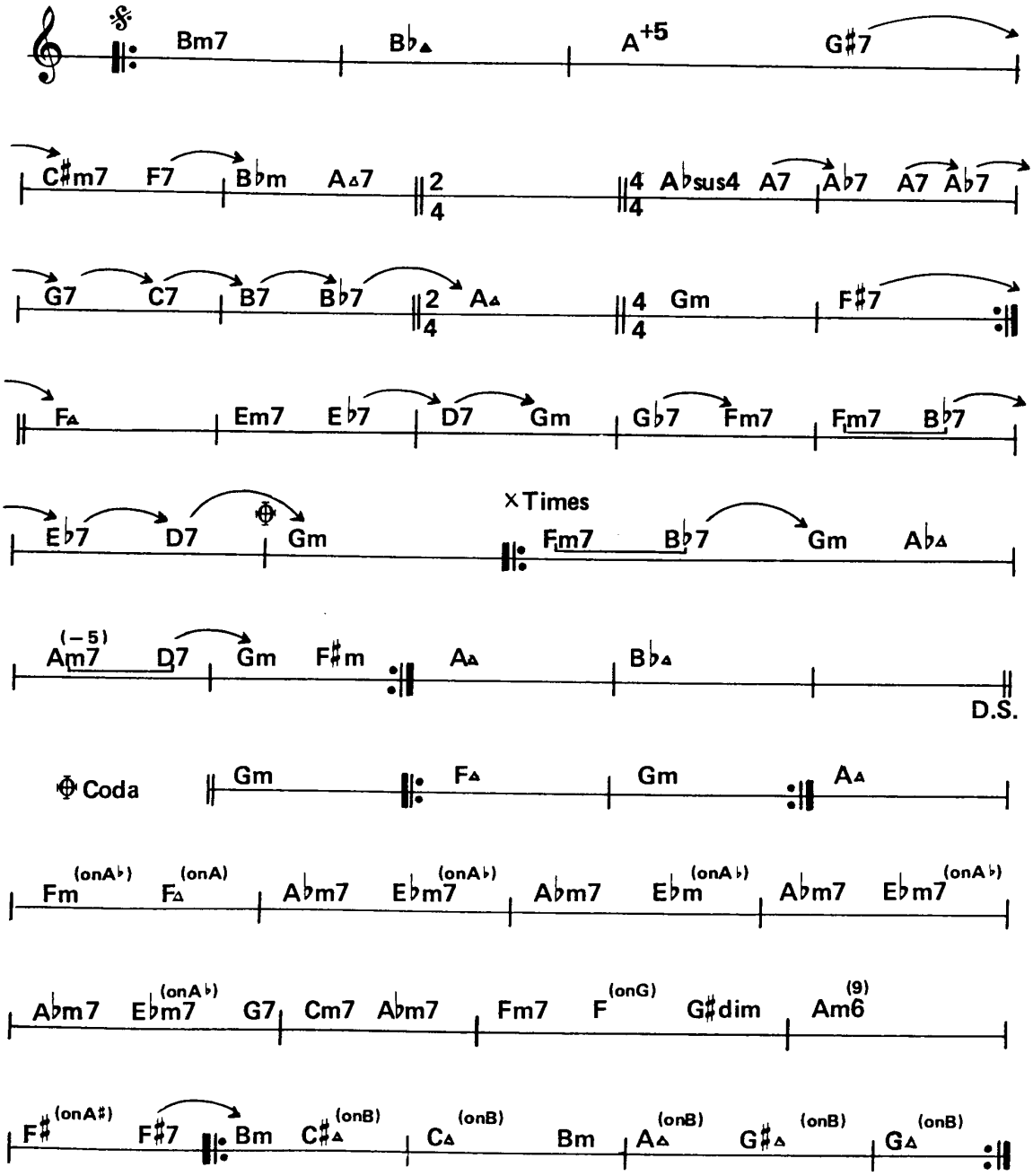

F△7 (on E)
G7 (on F)
A♭△7 (on G)
Freely
Fm7
8va
F dorian Scale
Ped
C△7
Eadd9
C△7
Am add9
F6
E△
Strings

The Mad Hatter Rhapsody

ザ・マッド・ハッター・ラプソディー by CHICK COREA

CHORD PROGRESSION ANALYZE

●Chord Progression



IMPROVISATION ADVICE

この曲も変拍子を伴った曲で、複雑だが大変素晴らしい曲だ。

チック・コリアのシンセサイザー・ソロ部分のコード進行は、つぎの4小節の繰返しである。

‖: Fm7 B♭7 | Gm A♭△ | Am7(−5) D7 | Gm F♯m :‖

この進行でのトニックは、一応Gmと考えられる。この進行の中での2小節目のGmは、E♭△の代理コードとも考えられるので、B♭7→Gmはドミナント・モーションをしているディセプティブ・ケーデンスと考えられる。また、4小節目のF♯mは、Fmに対するドミナント機能を持ったもので、アドリブの場合は、C7Alt.(F♯7)として演奏してもよい。

シンセサイザーの音質は、ピッコロ、またはフルートに近いチューニングである。この曲全体に流れる、スペイン系統の人が話しているようなフレーズのニュアンスをよく聴いて、ラテン特有のリズム感やメロディー感を考察し、コリアの音楽を理解するならば、よりいっそう楽しいものになるであろう。

Makion

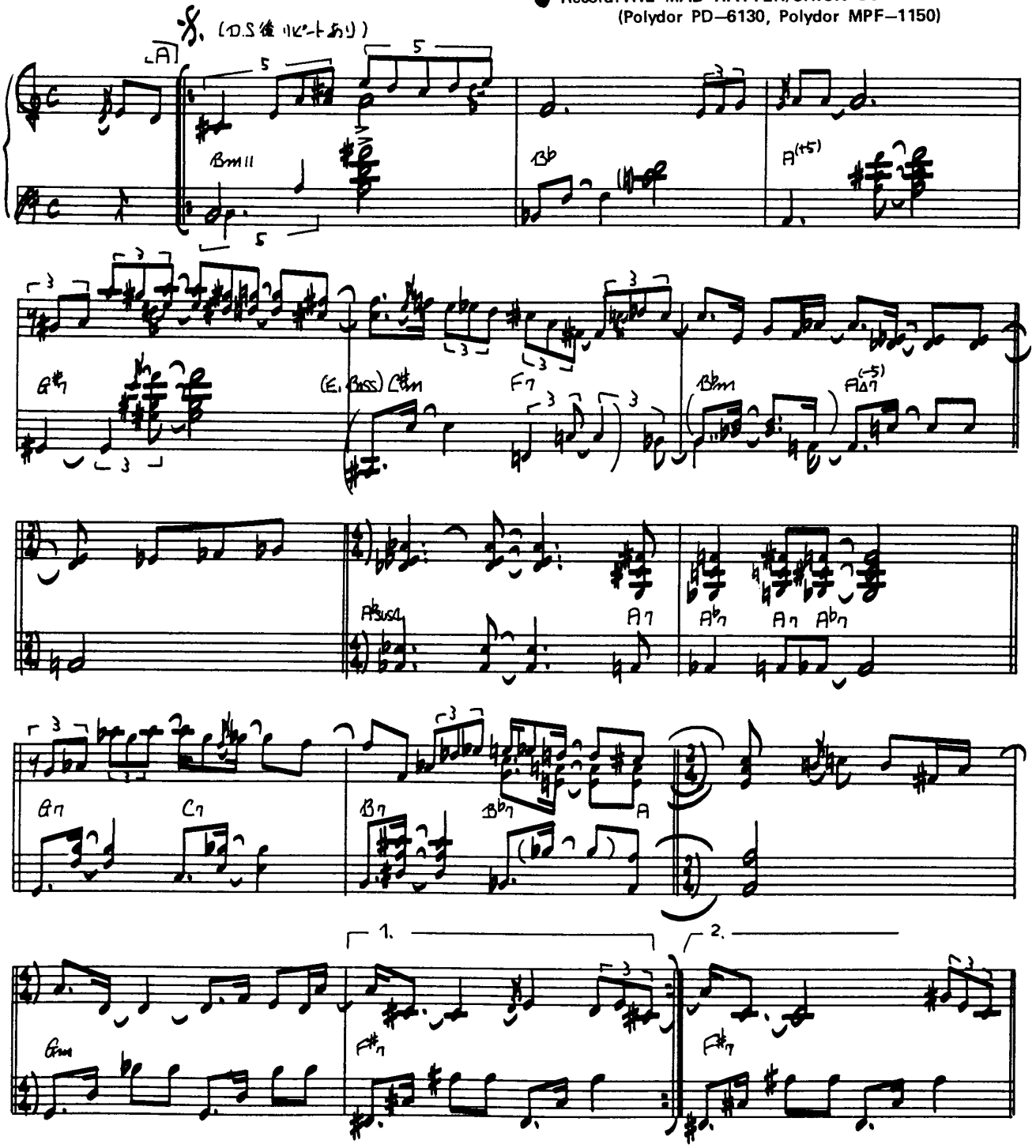
IMPROVISATION

「The Mad Hatter Rhapsody」

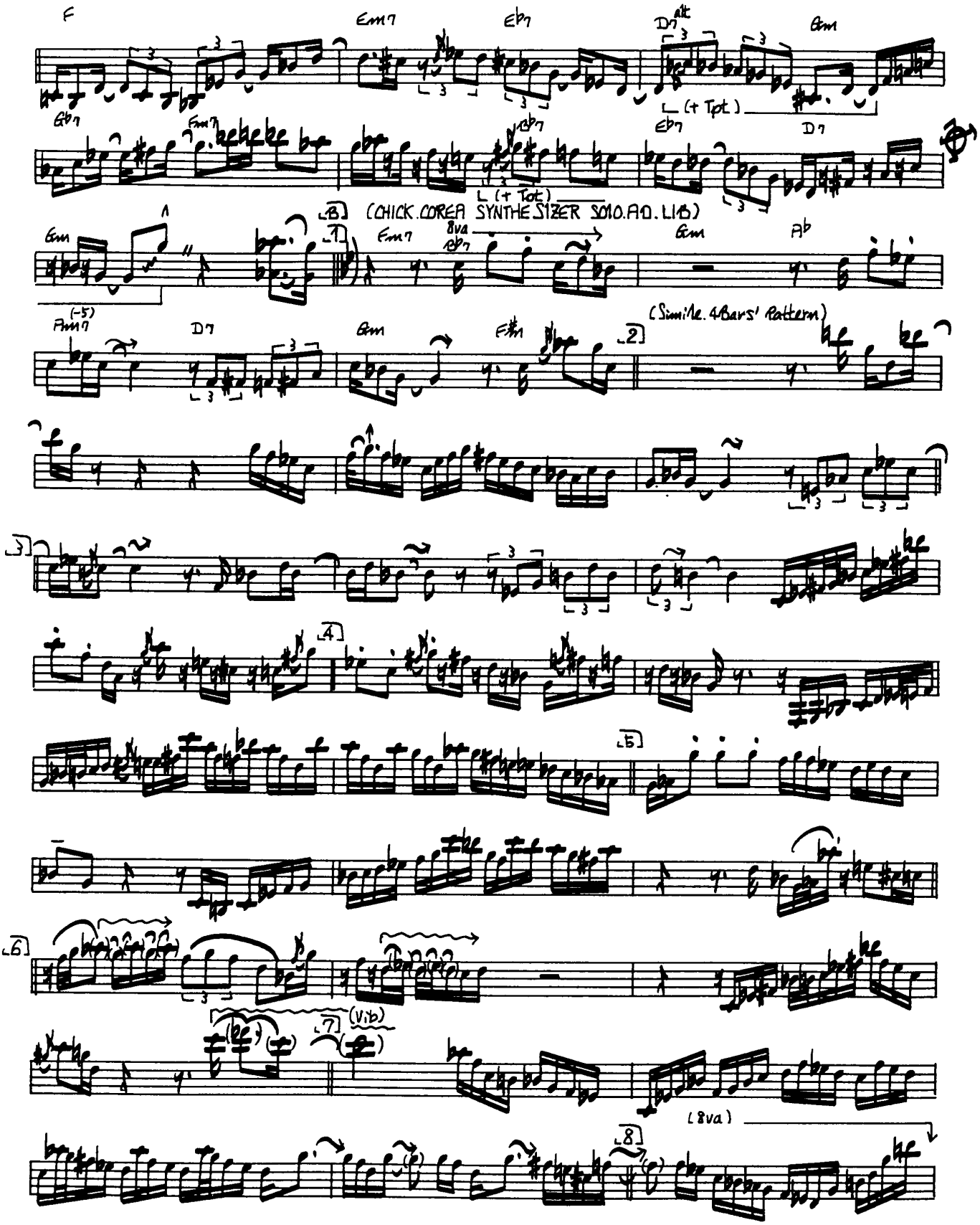
by Chick Corea

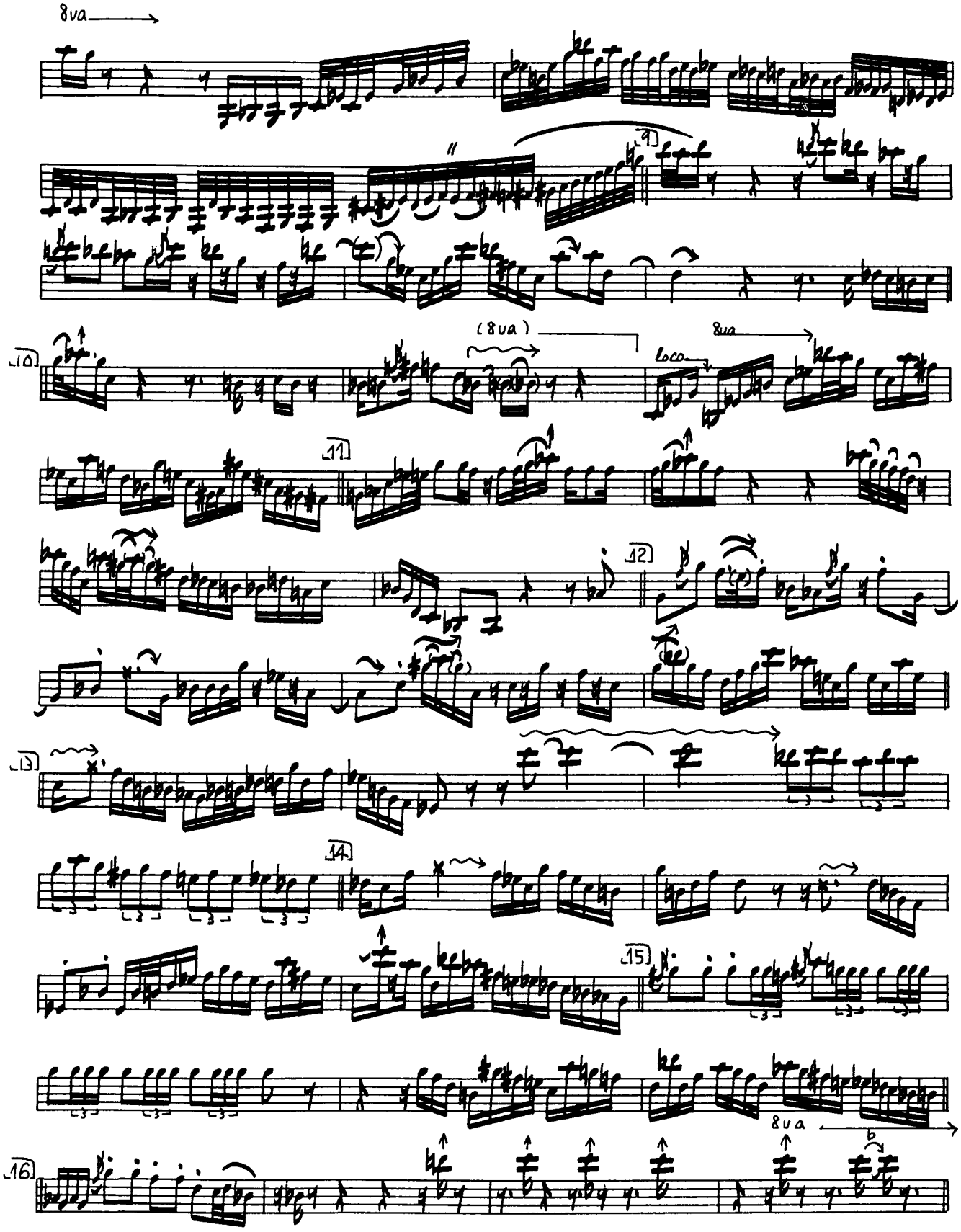
Chick Corea(keyboard)
Herbie Hancock(fen-rhodes)
Gayle Moran(vcl)
Steve Gadd(ds)
Eddie Gomez(b)
Joe Farrell(fl,piccolo,ts)
Stuart Blumberg, John Rosenberg(tp)

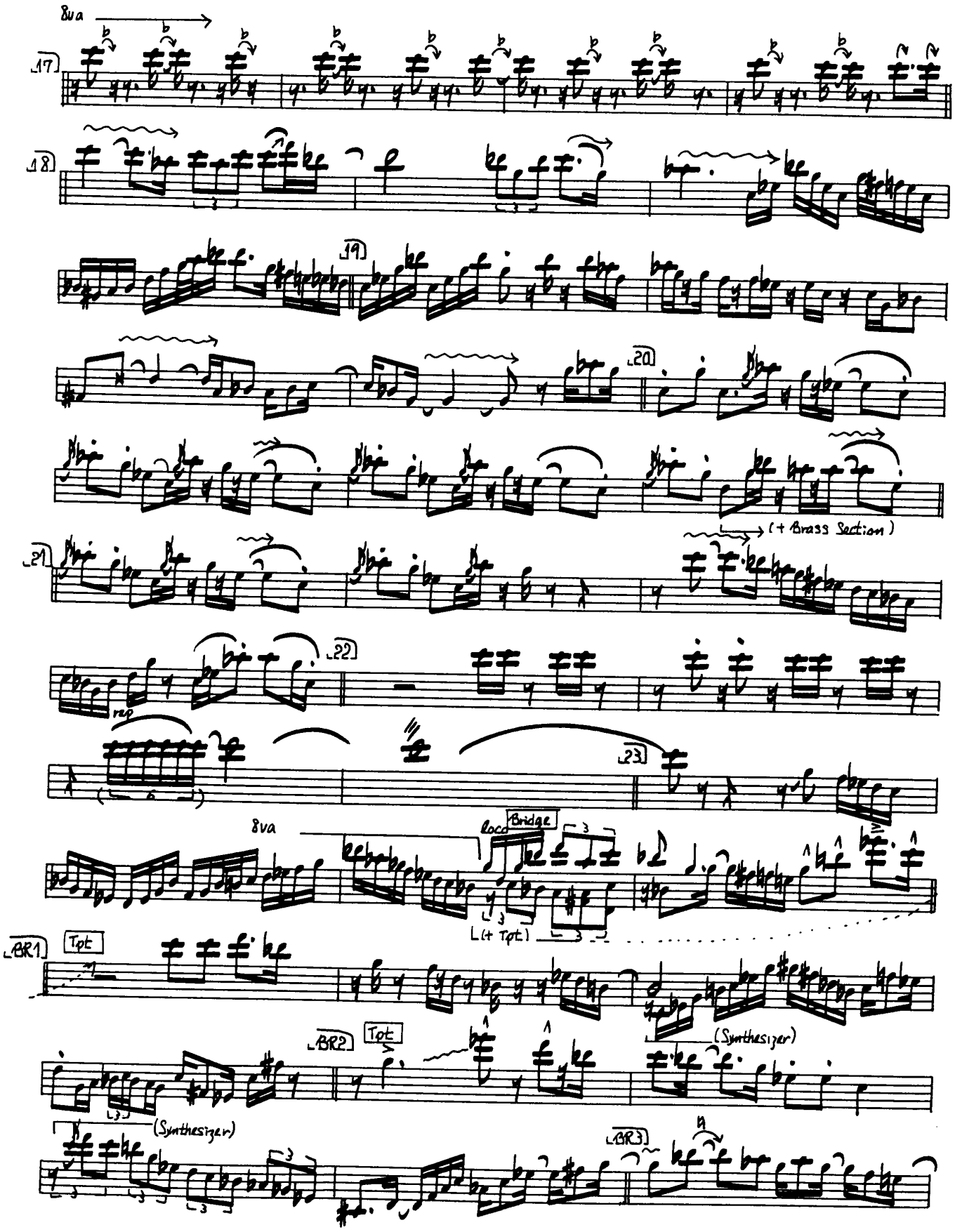
● Record:THE MAD HATTER/CHICK COREA
(Polydor PD-6130, Polydor MPF-1150)

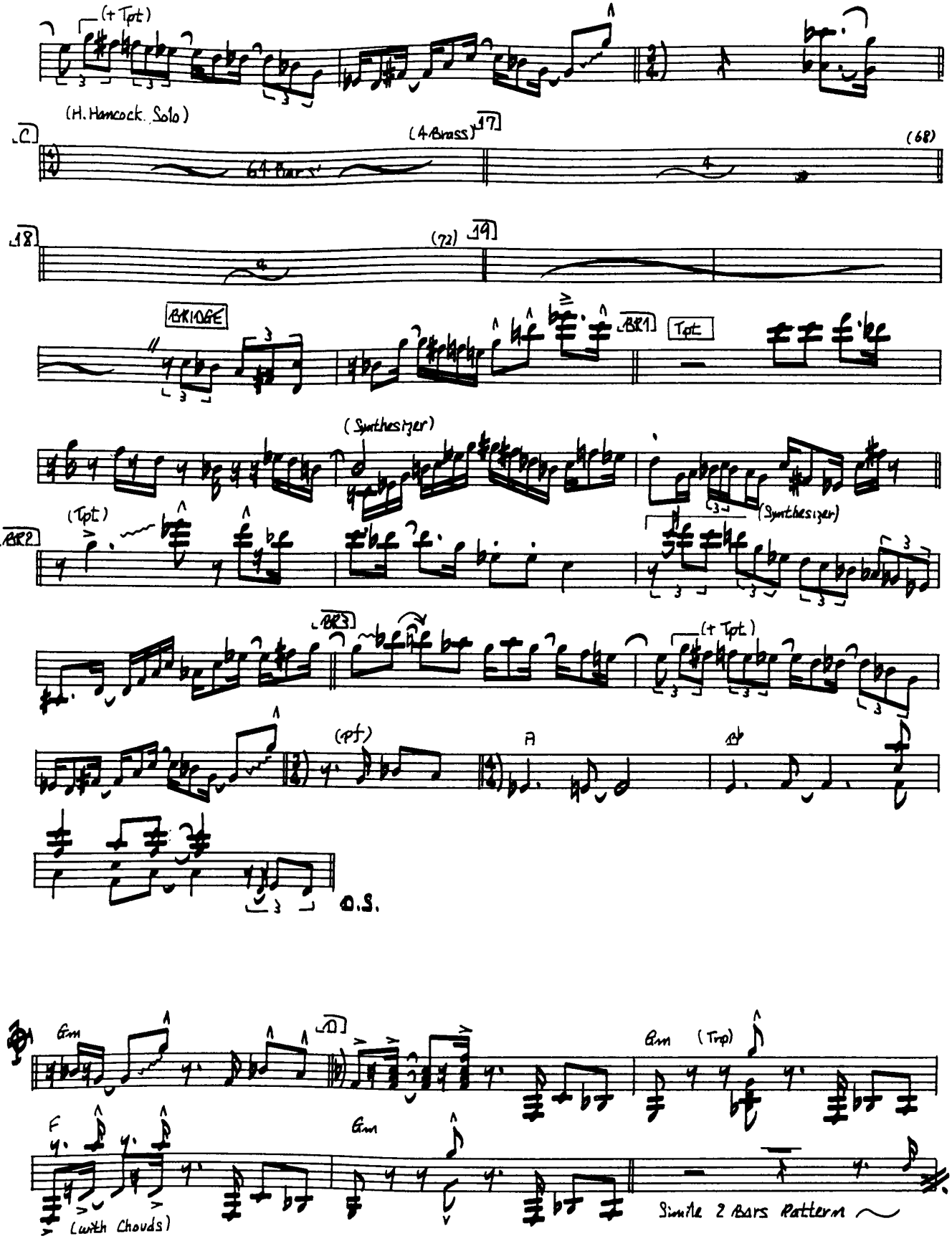


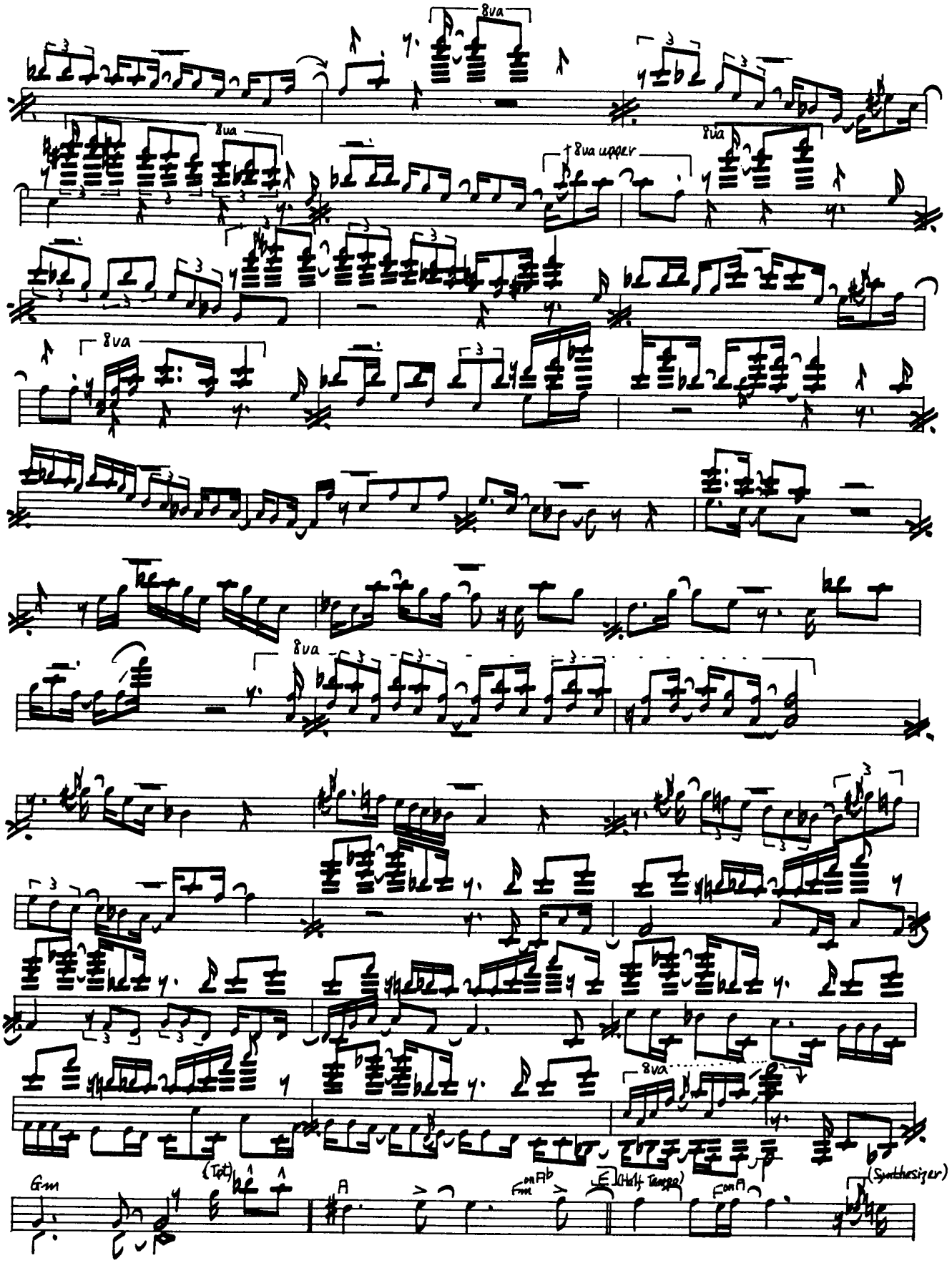
©by Thalian Music
Rights for Japan assigned to VICTOR MUSIC PUBLISHING CO., INC.

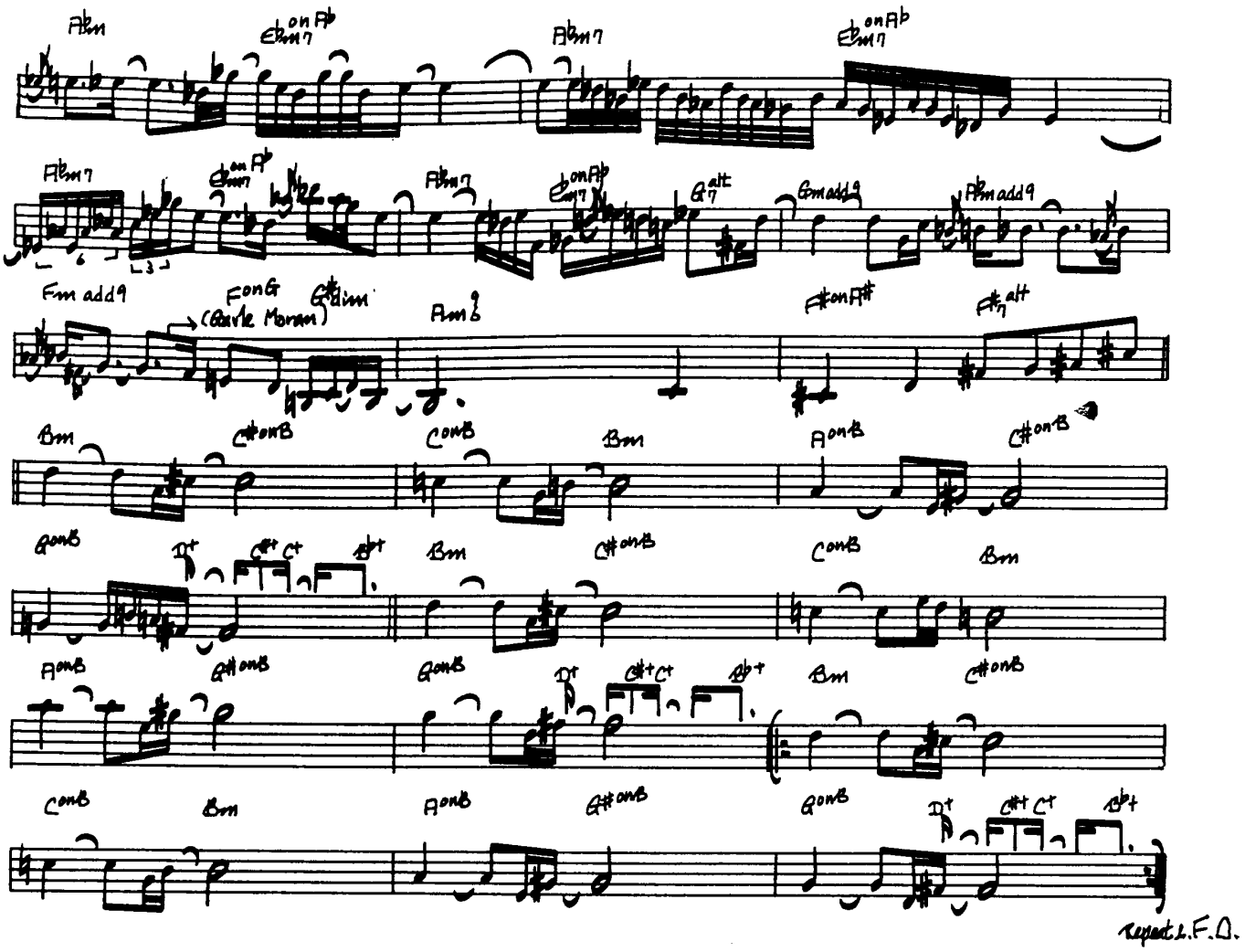

F
Em7
Eb7
D7 Alt
Gm
(+ Tpt.)
Gb7
Em7
Bb7
Eb7
D7
(+ Tpt.)
(CHICK COREA SYNTHESIZER SOLO AD. LIB)
Gm
Em7
8va
Bb7
Gm
Ab
(-5)
Am7
D7
Gm
F#m
(Similar 4Bars' Pattern)
(Vib)
(8va)


8va
9
10
(8va)
Loco
8va
11
12
13
14
15
8va
16


8va
17
18
19
20
(+ Brass Section)
21
rep
22
23
8va
loco
Bridge
(+ Tpt)
BR1
Tpt
(Synthesizer)
BR2
Tpt
(Synthesizer)
BR3

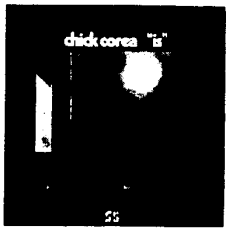

(+ Tpt)
(H. Hancock Solo)
C
(4 Brass)
17
(68)
18
(72)
19
BRIDGE
BR1
Tpt
(Synthesizer)
(Tpt)
BR2
(Synthesizer)
BR3
(+ Tpt)
(pf)
A
D.S.
Gm
D
Gm
(Trp)
F
Gm
(with Chords)
Simile 2 Bars Pattern


8va
8va
8va upper
8va
8va
8va
8va
(Tot)
Gm
A
Fm on Ab
E (Half Tempo)
Fm on A
(Synthesizer)


Ab m
Eb m7 on Ab
Ab m7
Eb m7 on Ab
Ab m7
Eb m7 on Ab
Ab m7
Eb m7 on Ab
G7 alt
Gm add9
Ab m add9
Fm add9
F on G
(Carle Moran)
G# dim
Am 6
F# on A#
F#7 alt
Bm
C# on B
C on B
Bm
A on B
C# on B
G on B
D+
C#+ C+
B+
Bm
C# on B
C on B
Bm
A on B
G# on B
G on B
D+
C#+ C+
B+
Bm
C# on B
C on B
Bm
A on B
G# on B
G on B
D+
C#+ C+
B+
Repeat L.F.O.

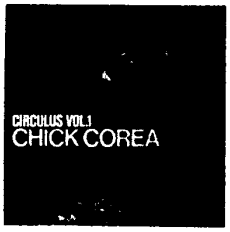
CHICK COREA

「Now He Sings, Now He Sobs」/Chick Corea
(Solid State SS-18039 キング LAX-3151)
1968 Rec
■Chick Corea(p) Miroslav Vitous(b) Roy Haynes(ds)
●Steps What Was/Matrix/Now He Sings, Now He Sobs/Now He Beats The Drum Now He Stops/The Law Of Falling And Catching Up

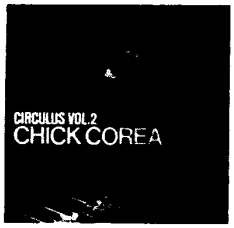


「Is」/Chick Corea
(Solid State SS-18055 キング LAX-3152)
1969 Rec
■Chick Corea(p) Woody Shaw(tp) Hubert Laws (fl, piccolo) Bennie Maupin(ts) Dave Holland(b) Jack Dejohnette(ds) Horace Arnold(ds)
●Is/Jamara/This/It

「The Song Of Singing」/Chick Corea
(Solid State キング LAX-3153)
April 7−8, 1970 Rec
■Chick Corea(p) Dave Holland(b) Barry Altschul(ds)
●Toy Room/Ballad I/Rhymes/Flesh/Ballad III/Nefertitti



「Circulus Vol.1」/Chick Corea
(Bluenote キング GXF-3026)
Aug. 21, 1970 Rec
■Chick Corea(p, perc) Anthony Braxton(reeds) Dave Holland(b, perc) Barry Altschul(ds)
●Quartete Piece No. 1



「Circulus Vol.2」/Chick Corea
(Bluenote キング GXF-3027)
Aug. 21, 1970 Rec
■Chick Corea(p, vib, perc) Anthony Braxton (reeds) Dave Holland(b) Barry Altschul(ds)
●Quartet Piece No.2/Quartet Piece No.3/Percussion Piece

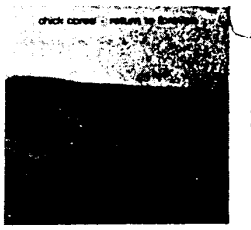
「ECM SPECIAL. I」
(トリオ PA-4011)
■Chick Corea(p, el-p) Joe Farrell(fl) Stanley Clarke(el-b) Airto Moreiera(perc) e.t.c.
●Captain Marvel/Strings/Moon Song II
※オムニバス盤につき、全8曲中、3曲がチック・コリアによる演奏。

「Tones For Joan's Bones」/Chick Corea
(Vortex-2004 ワーナー・パイオニア P-6010)
Dec. 1, 1966 Rec
■Chick Corea(p) Joe Farrell(ts, fl) Woody Shaw(tp) Steve Swallow(b) Joe Chambers(ds)
●Litha/This is New/Tones For Joan's Bones/Straight Up And Down

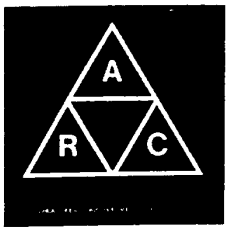
「Inner Space」/Chick Corea
(Atlantic 2-305 ワーナー・パイオニア P-5083〜4)
Dec. 1, 1966 Rec
■Chick Corea(p) Joe Farrell(ts, fl) Woody Shaw(tp) Steve Swallow(b) Joe Chambers(ds)
●Inner. Space/Guijira

「Piano Improvisation Vol. 1」/Chick Corea
(ECM-1014 ポリドール MP-2223)
Apr. 21, 1971 Rec
■Chick Corea(p-solo)
●Noon Song/Song For Sally/Ballad For Anna/Song Of The Wind/Sometime Ago/Where Are You Now ?

「Piano Improvisation Vol. 2」/Chick Corea
(ECM-1020 ポリドール MPF-1135)
Apr. 21～22, 1971 Rec
■Chick Corea(p-solo)
●Afternoon Song/Song For Lee Lee/Song For Thad/Trinkcle Trincle/Masquellero/Prepation 1, 2/Departure From Earth/A New Place



「Return To Forever」/Chick Corea
(ECM-1022 ポリドール MPF-1136)
Feb.2～3, 1972 Rec
■Chick Corea(el-p) Joe Farell(fl, ss) Flora Purim(vo, perc) Stanley Clarke(b) Airto Moreira(perc)
●Return To Forever/Crystal Silence/What Game Shall We Play Today/Sometime Ago/La Fiesta



「A.R.C.」/Chick Corea
(ECM-1009 ポリドール MPF-1133)
Jan. 11～13, 1971 Rec
■Chick Corea(p) Dave Holland(b) Barry Altschul(ds)
●Nefertitti/Ballad For Tillie/A.R.C./Vadana/Thanatos/Games

「No Mistery」/Chick Corea & Return To Forever (Polydor PD-6512 ポリドール MPF-1174) Jan.1975 Rec.
■Chick Corea(kb) Stanley Clarke(b, el-b) Al Di Meola(g) Lenny White(ds,perc)
●Dayride/Jungle Waterfall/Flight Of The Newborn/Sofisifunk/Except From The First Movement Of Heavy Metal/No Mistery/interplay/Celebration Suit Part Ⅰ, Ⅱ

「Light As A Feather」/Chick Corea & Return To Forever (Polydor PD-5525ポリドール MPF-1171)
Sep.～Oct. 1972 Rec
■Chick Corea(kb) Joe Farrell(ts, fl) Stanley Clarke(b) Airto Morelia(ds, perc) Flara Purim (vo)
●You're Everything/Light As A Feather/Captain Marvel/500Miles High/Children's Song/Spain

「My Spanish Heart」/Chick Corea
(Polydor-9003 ポリドール MPZ-8103～4)
Oct. 1976 Rec.
■Chick Corea(kb) Gayle Moran(vo) Stanley Clarke(b,el-b) Jean Luc Ponty(viol) Steve Gadd(ds) e.t.c.
●Love Castle/The Garden/Day Dance/My Spanish Heart/Night Street/The Hilltop/The SKY/Wind Dance/Armand's Rhumba/Plelude To El Boeo(Part Ⅰ, Ⅲ)/Spanish Fantasy(Part Ⅰ, Ⅳ)

「The Leprechaun」/Chick Corea
(Polydor PD-6062 ポリドール MPF-1175)
■Chick Corea(kb) Eddie Gomez(b) Anthony Jackson(b) Steve Gadd(ds) Joe Farrell(sax) Fred Sherry(cello) Gayle Moran(vo) Bill Watrous(tb) Danny Cahn, Bob Millikan, John Mitchell(tp)
●IMP's Welcome/Leonore/Reverie/Looking At The World/Nite Sprite/Soft And Gentle /Pixiland Rag/The Leprechaun's Dream(Part Ⅰ & Ⅱ)

「The Mad Hatter」/Chick Corea
(Polydor PD-6130 ポリドール MPF-1150)
■Chick Corea(kb) Herbie Hancock(el-p) Gayle Moran (vo) Eddy Gomez(b) Joe Farrell(fl,piccolo,ts) Steve Gadd(ds) Stuart Blumberg, John Rosenberg(tp)
●The Woods/Tweedle Dee/The Trial/Humpty Dumpty/Plelude To Falling Alice/Falling Alice/Tweedle Dum/Dear Alice/The Mad Hatter/Rhapsody

「Friends」/Chick Corea
(Polydor PD-1-6160 ポリドール MPF-1191)
Jan.1978 Rec.
■Chick Corea(kb) Joe Farrell(ts,ss,fl) Eddy Gomez(b) Steve Gadd(ds)
●The One Step/Waltz For Dave/Children's Song #5/Samba Song/Friends/Children's Song #15/

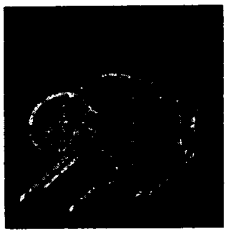
「Secret Agent」/Chick Corea
(Polydor ポリドール MPF-1220)
1978 Rec
■Chick Corea(kb) Gayle Moran(vo) Al Jarreau (vo) Joe Farrell(reeds) Airto Moreira(perc) Bunny Brunel(b) Tom Brechtlein(ds) Al Vizzutti (tp) e.t.c.
●The Golden Down/Sinky/Mirage/Drifting/Glebe St. Blues/Fickle Funke/Bagatelle/Bagatelle #4

「Where Have I Known You Before」/Chick Corea & Return To Forever
(Polydor PD-6509 ポリドール MPF-1173)
July～Aug. 1974 Rec
■Chick Corea(kb, synth, perc) Stanley Clarke (el-b) Al Di Meola(g) Lenny White(ds, perc, congas)
●Vulcan Worlds/Where Have I Loved You Before/The Shadow Of Lo/Where Have I Danced With You Before/Beyond The Seventh Galaxy/Earth Juice/Where Have I Known You Before/Song To The Pharoah Kings

「Hymn Of The Seventh Galaxy」/Chick Corea & Return To Forever
(Polydor ポリドール MPF-1172)
Aug. 1973 Rec
■Chick Corea(kb) Bill Connors(g) Stanley Clarke(el-b, bells) Lenny White(ds, perc)
●Hymn Of The Seventh Galaxy/After The Cosmic Rain/Captain Senormouse/Theme To The Mother Ship/Space Circus/The Game Maker

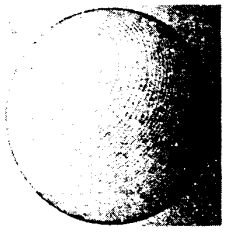
「Romantic Warrior」/Chick Corea & Return To Forever (CBS CBSソニー 25AP-55)
■Chick Corea(kb) Al Di Meola(g) Stanley Clarke(b) Lenny White(ds.perc)
●Medieval Overture/Sorceress/The Romantic Warrior/Majestic Dance/The Magician/Duel Of The Jester And The Tyrant (Part Ⅰ, Ⅱ)

「Musicmagic」/Chick Corea & Return To Forever(CBS-34682 CBSソニー 25AP-445) Jan.～Feb.1977 Rec.
■Chick Corea(kb) Joe Farrell(reeds) Gayle Moran(vo, kb) Stanley Clarke(b) Gerry Brown(ds) John Thomas(tp,fl) James Tinsley(tr) Jim Pugh, Harold Garrett(tb)
●The Musician/Hello Again/Musicmagic/So Long Mickey Mouse/Do You Ever/The Endless Night



「The Complete Concert」/Return To Forever(CBS CBSソニー 72AP1160～3)
May 20～21, 1977 Rec.
■Chick Corea(kb) Stanley Clark(b) Gayle Moran(vo) Joe Farrell(sax,fl)Gerry Brown(ds) John Thomas, James Tinsley (tp, fl-h, piccolo-tp) Jim Pugh(tenor-tb, baritone-horn) Horold Garrett(b-tb, tuba) Ron Moss(tenor-tb)
●Opening '77/The Endless Night (part 1)/The Endless Night(part 2)/The Muisician/Hello Again/So Long Mickey Mouse e.t.c.

「Circle Ⅰ Live In German Concert」
(CBSソニー SOPL-19)
Nov. 28, 1960 Rec. 70
■Chick Corea(p) Anthony Braxton(as) Dave Holland(b) Barry Altschul(ds)
●Toy Room/O & A/There Is No Greater Love



「Circle Ⅱ -Gathering」/Chick Corea
(CBSソニー SOPL-20)
Summer. 1970 Rec
■Chick Corea(p) Anthony Braxton(as) Dave Holland(b) Barry Altschul(ds)
●Gathering Part 1 & 2

「Circle Paris Concert」/Chick Corea
(ECM-1018～9 CBSソニー SOPJ-19～20)
Feb. 21, 1971 Rec.
■Chick Corea(p) Anthony Braxton Creeds(perc) Dave Holland(b) Barry Altschul(ds)
●Nefertitti/Song For The Newborn/Duet/Lookout Farm/73' Kalvin/Toy Room/Q & A/There Is No Greater Love

「Sundance」/Chick Corea
(Groove Merchant GM-2202 RVC RCA-6037)
1969 Rec
■Chick Corea(p) Bennie Maupin(ts) Hubert Laws(fl,piccolo) Woddy Shaw(tp) Dave Holland (b) Jack Dejohnette, Horace Arnold(ds)
●The Brain/Song Of Wind/Converge/Sundance

CHICK COREA

OTHER ALBUMS

①「Go, Mango」/Mango Santamaria
(Riverside RLP-423)

②「Facets Vol.1」/Miles Davis
(CBSソニー SOPL-268)

③「Stitt Goes Latin」/Sonny Stitt
(Roost LP-2253, 日本コロムビア YW-7505)

④「Manhattan Latin」/Dave Pike
(Decca DL-74568)

⑤「The Laws Of Jazz」/Hubart Laws
(Atlantic SD-1432 ワーナー・パイオニア)

⑥「The Things To Do」/Blue Mitchell
(Bluenote BST-84178)

⑦「Down With It」/Blue Mitchell
(Bluenote BST-84214)

⑧「Herbie Mann Plays The Roaf Of The Grasepaint」(Atlantic SD-1437)

⑨「Standing Ovation At Newport」/Herbie Mann
(Atlantic SD-1445)

⑩「Flute By Laws」/Hubert Laws
(Atlantic SD-1452)

⑪「Monday Night At The Village Gate」/Herbie Mann (Atlantic SD-1462)

⑫「Our Mann Flute」/Herbie Mann
(Atlantic SD-1464)

⑬「Latin Mann」/Herbie Mann
(CBS CS-9188, CBSソニー 23AP-672)

⑭「Soul Burst」/Car Tiader
(Verve V6-8637)

☆⑮「Sweet Rain」/Stan Getz
(Verve V6-8693, ポリドール MV-2049)

☆⑯「What The World Need Is Love」/Stan Getz
(Verve V6-8752)

⑰「Jazz For A Sunday Afternoon Vol.1」
(Solid State SS-18027, キング LAX-3154)

⑱「Jazz For A Sunday Afternoon Vol.2」
(Solid State SS-18028, キング LAX-3155)

⑲「Dizzy Gillespie At The Village Vanguard」
(Solid State SS-18034, キング SR-3018)

⑳「Jazz For A Sunday Afternoon」
(Solid State SS-18034, キング LAX-3157)

㉑「Law's Cause」/Hubert Laws
(Atlantic SD-1509)

㉒「Planet Ends」/Larry Coryell
(Vanguard キング GP-3047)

㉓「Wind Flower」/Hubert Laws
(Atlantic SD-1624)

㉔「Files De Killimanjaro」/Miles Davis
(CBS CS-9750, CBSソニー SOPL-169)

㉕「Wild Thing」/Almand Peraza
(SKY LP-5D)

㉖「Total Eclips」/Bobby Hutcherson
(Bluenote BST-84291)

㉗「We Are The Levitts」/Stella Levitt
(ESP-1095)

㉘「Turkish Women At The Bath」/Pete Ra Roca (Douglas SD-782)

㉙「Water Babies」/Miles Davis
(CBS CBSソニー 25AP-314)

㉚「In A Silent Way」/Miles Davis
(CBS CS-9875, CBSソニー SOPL-170)

㉛「To Here Is To See」/Eric Kloss
(Prestige-7793)

㉜「Bitches Brew」/Miles Davis
(CBS GP-26, CBSソニー SOPJ-58～59)

㉝「Super Nova」/Wayne Shorter
(Bluenote BST-84332, キング GXK-8048)

㉞「Big Fun」/Miles Davis
(CBS PG-32866, CBSソニー SOPW-5～6)

㉟「Consiousness」/Eric Kloss
(Prestige 7793)

㊱「Live Evil」/Miles Davis
(CBS G-30954, CBSソニー SOPJ-88～89)

㊲「Spaces」/Larry Coryell
(Vanguard VSD-6558, キング LAX-135)

㊳「Conflagration」/The Trio
(Dawn DNLS-3022)

㊴「Black Beauty」/Miles Davis
(CBSソニー SOPJ-39～40)

㊵「Bass Is」
(Enja-2018)

㊶「Miles Davis At Filmore」/Miles Davis
(CBS G-30038, CBSソニー SOPJ-86～87)

☆㊷「Joe Farrell Quartet」/Joe Farrell
(CTI-6003)

㊸「Round Trip」/Sadao Watanabe
(CBSソニー SONP-50320)

㊹「Afternoon Of A Georgia Faun」/Marion Brown (ECM-1004)

㊺「The First Great Rock Festival Of The Seventies-Isle Of Wight」(CBS G3X-30805)

㊻「Going To The Rainbow」/Rolf Kühn
(BASF CRC-008)

㊼「Complete Braxton」/Anthony Braxton
(Freedam FLP-40112～3)

㊽「Philosophy Of The Spiritual」/Richard Davis
(Cobblestone CST-9003)

☆㊾「Out Back」/Joe Farrell
(CTI-6014, キング LAX-3180)

㊿「Merry-Go-Round」/Elvin Joens
(Bluenote BST-84414)

(51)「Time To Fly」/David Pomeranz
(Decca DL-75329)

☆(52)「Captain Marvel」/Stan Getz
(Verve-2304, ポリドール MV-2090)

☆(53)「At Montreux」/Stan Getz
(Polydor 2310 549, ポリドール MPF-1112)

☆(54)「Portrait」/Stan Getz
(テイチク UPS-2052)

(55)「Crystal Silence」/Gary Burton & Chick Corea
(ECM-1040, トリオ PA-7074)

(56)「Journey To Love」/Stanley Clarke
(Nemperor NE-423, ワーナー・パイオニア P-10081)

(57)「Land Of The Midnight Sun」/Al Di Meola
(CBS CBSソニー SOPO-128)

(58)「Just Family」/Dee Dee Bridgewater
(Elektra 6E-119, ワーナー・パイオニア P-10483)

Makion

ジャズ・インプロヴィゼイションの研究シリーズ
チック・コリア／ジャズ・ピアノ奏法／￥2,000

編　著　者■益田幹夫／寺下　誠
企画・制作■インターソング株式会社
表紙写真■清水一郎
写真提供■ポリドール株式会社
表紙デザイン■草間和夫
発　行　所■ビクター音楽出版株式会社
発　売　元■㈱リットーミュージック
東京都新宿区三栄町19番地　〒160
大関ビル２Ｆ　☎03(359)0266(代)

■万一、乱丁・落丁がありました時には、当社にてお取り替えいたします。
©無断複製・転載を禁じます。

表紙印刷，本文印刷／新興印刷製本(株)，製本／大観社製本(株)

Makion

ジャズ・インプロヴィゼイションの研究

●チック・コリア・ジャズ・ピアノ奏法

著 益田幹夫
寺下 誠

シンコーミュージック
2000★

Rittor Music ¥2,000★